慣れてゐる連中の例に洩れずコロッソフがブランディや葡萄酒やリキュウを飲んで少し許り酔つてゐるのをネクリュウドフは見た。でコロッソフはよろめきもせず、又無茶な事を口走るでもなかつたが、併し獨合點で滿足してゐるやうな大分勝手氣儘な昂奮狀態であつた。又窓より日の光が斜に射し込んで公爵夫人の額の年波を餘りにありありと照らすので、それを氣にして話の間にも彼女が窓の方を見てゐるのにネクリュウドフは目を留めた。

『全く其通りですわねえ。』コロッソフが何か云つた後に彼女はさう云つて、寢臺の傍の壁にある呼鈴の釦を押した。

醫者は立上つて、自分も家族の一員の積りで何とも云はないで室を出て行つた。公爵夫人はコロッソフと話を交へながらも、出て行く醫者を目送した。

『フィリップ、窓掛を下ろして貰ひませう。』入つて來た飾し屋の給仕に窓の方を指し示しながら彼女はさう云つた。

『いゝえ、あなたは何とでも仰しやつていゝ事よ、それでも何か斯う神秘的なものがあの作にはありますわ、神秘がなけりや誰でも何でもないんですもの。』と彼女は窓掛を下してゐる給仕のやり方を忌々しげに見やりながらコロッソフと尙ほ話を續けた。『詩のない神秘は迷信でせう、神秘のない詩は本當は散文ですからね。』彼女は苦々しげな微笑を湛へて給仕より目

を離さないでさう云つた。給仕は窓掛の具合を未だ巧く爲し得ないでゐた。

『フィリップ、その窓掛ぢやないよ、あの大きい窓のだよ。』と公爵夫人は氣を苛立たせて云つた、それはそんな事を云ふのに努め骨折らなければならない自分を恐らく自分で同情するのであつた、そして指環を矢鱈にはめた指に香氣の高い卷莨を挾んで、そんな不幸な自分を勞はる爲めに口の方へ持つて行つた。

肩幅の廣い筋骨逞しい飾し屋のフィリップは詫るやうに上半身を輕く前に屈めてから、その確乎した丈夫な足で音のしないやうに靜かに敷物を踏みながら他の窓の方へ行つて、恭しく又十分氣を付けて公爵夫人を見やり、そして日の光が彼女に射しかゝらないやうに窓掛を下しにかゝつた。しかし今度も亦うまく行かなかつたので、氣の焦れてゐる公爵夫人は又もや神秘の話を途切らしてフィリップに指圖をしなければならなかつた。フィリップは彼女の云ふ事を容易に解しかねて、容赦なく彼女を昂奮さした。フィリップの目にはちらと險しい光が出た。

何うしろと云ふんだらう、誰にだつて分るもんか、とフィリップは腹で一人云つてゐるに違ひないとネクリュウドフはつくづく見やり乍らさう思つた。けれども美男のヘルクウレスたるフィリップは直ぐ其の癇癪を押し隱し、公爵夫人が苛々したかつかりした意地惡な語調で云ひ付ける通りを、柔順に靜かにやつとの事にし終つた。

『云ふまでもなくダルキンの説には隨分眞理がありますよ。』とコロッソフは低い椅子の上に伸びをして睡むさうな目で公爵夫人を見やり乍ら云つた。『しかしあの作者は餘り界限を越えてゐますからね、これは誰だつて認める事でせう。』

『あなたは遺傳説を信じていらしつて？』公爵夫人はネクリュウドフが默つてゐるのに氣が窒るやうな思ひをして斯う問ひかけてみた。

『遺傳説を？』とネクリュウドフは鸚鵡返しに云つて、『いえ、それは私信じません。』

丁度その時彼は空想に耽つて妙な幻影を描いてゐた。畫家に取つては好いモデルになりさうな强壯なヘルクウレスたる飾し屋のフィリップと、その傍に素裸にしたコロッソフが南瓜のやうな肥大腹を抱へ頭はてらてらに禿げ渡り、痩せ細つた腕をぶら下げて立つてゐる恰好とを假想してみた。それから尙ほ彼は天鵞絨や絹にくるまつてゐる公爵夫人の肩つきを其實際のまゝに曝け出して描き出してみた。けれども此の空想の圖は餘りに忌々しかつたので、彼はそれを自分の頭の中より追ひ出さうと努めた。

公爵夫人はネクリュウドフをじろじろと見てゐた。

『ミッシイはあなたをお待ちしてゐるでせうよ。』と公爵夫人は云つた。『あの子の所へ行らつしやいな、シュウマンの新しい曲を彈いてお聞かせしたいと思つてゐますから。あれはそりや面白い曲ですの。』

「何も彈きたいと思つてゐるものか、又此の女は嘘をつくんだな。」とネクリュウドフは思つた、そして椅子を離れて公爵夫人の指環だらけな蠟のやうな色をした骨張つた手に握手を交した。

廣間で彼はカタリイナ・アレキセイエフナに逢つた、彼女は直ぐ彼に話しかけた。

『陪審員としての義務にあなたは大へん惱まされていらつしやるわね、そりやようく私に分りますわ。』と彼女は例の通り佛蘭西語で云つた。

『さうです。今日は私御免を蒙ります、少し氣持が惡いんですから、それに他人樣に不愉快な思をさせては濟みませんから。』とネクリュウドフは答へた。

『どうして氣持がお惡いのです？』

『どうしてですか、それは何うか聞かないでおいて下さい。』

『でも、あなた、いつぞやは何と仰しやつて？　思ひ出して御覽なさいまし。人はいつも本當の有りの儘の事を云はなくちやいけないとは仰しやらない？　そして其時は亂暴な有りの儘を仰しやつたんぢやないこと？　だのに今日は何うして仰しやらない？　ね、ミッシイさん、さうだつたわねえ。』と丁度其時入つて來たミッシイに彼女は云ひかけた。

『あれは遊びの時ぢやありませんか。』とネクリュウドフは屹となつて答へた。『遊びの時はさうもゆきますが、實際に於ては氣持の悪いものですよ、といふのは私が氣持悪いと云ふわけです、ですから本當の事を云ふのが少くとも私には出來ないのです。』

『辯解なさらなくつたつていゝわ、それよりか、何故私達が氣持を悪くするか、それを仰しやいな。』と老嬢は言葉を弄びながら云つた。そしてネクリュウドフがむきになつてゐる顏色に氣付かないらしかつた。

『いゝえ、誰でも氣持の悪いのを悪いと白狀してしまふ位ゐ厭な事はなくつてよ。』とミッシイは註を入れた。『私は一度だつて夫れを自分にも白狀しはしないわ、ですからいつも氣持の悪い事なんかありやしないの。ね、いらつしやいな、そしてあなたの其氣持のお悪いのを追ひ散らしてしまひませうよ。』

ネクリュウドフは馬が手綱を着けられる爲めに、そして車に繋がれる爲めに、豫め額を撫で勞られるかのやうな感じを覺えた。けれども今日はそれが彼には平常よりもずつと甚く不愉快であつた。それで折角の御好意ですが今日はこれから直ぐ家へ歸らなければならないからと云つて暇を告げた。ミッシイは平常より長く彼の手を握りしめた。

『あなたに取つて大切な事は、私達にも大切なんですから、それを御忘れになつちや厭よ。』

と彼女は云つた。『明日は來らしつて？』

『さあ、六ケ敷いでせう。』と云つてネクリュウドフは其の冷かな答を自分ながら恥ぢたが、それは自分の爲めに恥ぢたのか彼女の爲めに恥ぢたのか分らず、顏を赤くして急いで出て行つた。

『どうした譯なの？ Comme cela m'intrigue（氣になるわねえ。）』と老嬢はネクリュウドフが行つたあとで云つた。『わたし是非とも譯を聞いてやるわ、affaire d'amour propre（艶事）かも知れませんわね。Il est très susceptible, notre cher Mitja（感情家なんだもの、ねえ、ミッシイさん。』

「それより、もつと affaire d'amour sale（穢い色事）かも知れないわ。」とミッシイは云はうと思つたが、默つて、ネクリュウドフを見た時の顏とは全く變つた顏付をして見るともなしにたゞぼんやりと前を見た。彼女は先程ネクリュウドフと二人つきりで不愉快な言葉を交へた事なども老嬢には默つてゐた、そしてたゞ何氣なく輕い調子で『誰にも氣分の好い日と悪い日があるんだもの。』と呟いた。

「あの人も私を騙したのかしら。」とミッシイは思つた。「あんな色んな様子を見せた後で、それで騙したのならあの人こそ本當に悪いわ。」

けれども其「あんな色んな樣子を見せた後で」とは何を意味してゐるかを彼女が若し說明しなければならないとすれば、彼女はどぎまぎしないでは居られない筈であつた。とは云へ彼が彼女に水を向けて希望を持たした事、のみならず殆ど約束したも同樣な態度を見せた事は、彼女はちゃんと知つてゐた。もとより夫れは皆公然と明言した事ではなく、遠廻しな言葉であり、目の囁きであり、微笑の取交しであり、それとなしの樣子であり、雄辯な無言ではあつた。それでも彼女ははや彼を自分の所有と思ひ込んでゐたのである、それを今失はねばならないとすれば、それは彼女には辛い事であるに相違なかつた。

二八

「淺間しい、穢らはしい。」とネクリュウドフはかねてよく知つてゐる道を家の方へ歩いて歸りながらさう思つた。ミッシイと話してゐる間窒息するやうに覺えた感じは未だ消え去つてはゐなかつた。彼は彼女に對して自分は當り前な正當な態度を取つてゐたとより外には思はなかつた。彼は自分を彼女に結び付けるやうな言葉は今迄に一寸も云つた事はなかつた、又彼女に結婚の申込など一言もした事はなかつた、それでも彼は心の底では彼女に束縛されてゐるのを感じてゐた、そして彼女に約束をしてゐるやうな氣持を覺えてゐた。併し今日は彼は彼女と結婚する譯には行かないとつくづく心の底に思つた。

「淺間しい、穢らはしい。」と彼は呟いて、自分とミッシイとの間がさうであると思つたばかりでなく、一般に自分の生活をさう思つて咀つた。「何でも淺間しいわい、穢らはしいわい。」さう呟きながら彼は家に歸つた。

『私は夜食はしないよ。』と彼は後から彼に續いて食堂に入つて來たコルネエに云つた、食堂にははや膳立が出來て茶の道具もそろつてゐた。『もう彼方へ行つていゝ。』

『畏りました。』とコルネエは云つたが、直ぐは行かないで膳立を片付けにかゝつた。ネクリュウドフは忌々しげに彼を見やつた。ネクリュウドフは誰からも靜かにそつとして置いて貰ひたかつた、であるのに誰にも邪魔をされるやうな氣がしてならないのであつた。コルネエが出て行つてからネクリュウドフはサモワアル(茶沸し)の傍へ行つて自分で茶を注がうとすると、直ぐ又アグラフェエナ・ペトロフナの足音が耳に入つた、で彼は彼女にも顏を合はせるのが厭さに急いで廣間に行つた、そして戶をぴしんと閉めた。

その室は三月前に彼の母が歿くなつた處であつた。兩親の肖像が掛かつてゐて、その各の前にランプが一つづつ點火されてゐたが、それで室內一ぱい大へんに明るかつた。彼は母の歿くなる時分の事を切りに思ひ出した、併し母に對する彼の態度は不自然でもあり不愉快で

もあつたので、それを思つてみても亦淺間しくもあり穢らはしくもあつた。彼は母が危篤になつた時は寧ろ早く死んで呉れるやうに心私かに願つてゐた事を思ひ出した。それは母にそんなに甚い苦しみを出來るだけ少くしてやり度いからだと思つてゐた。併し實際は母のそんな苦惱を見てゐなければならない自分の不愉快を成るだけ早く取り除き度い爲めであつた。母の爲めよりも實は自分の爲めであつた。

母に對する心地よい思出を自分の心に呼び起し度いと思つて、彼は肖像の前に行つて見上げた。それは或る有名な畫家が五千ルウブルで描いたものであつた。襟開きの廣い黑天鵞絨の服を着てゐる母の其の肖像は、畫家が如何にも十二分の注意を拂つて首筋から肩つき、扨ては胸のふくよかな具合などに艶々しい美しさを出さうと努めたあとを見せてゐた。それがしかし全く淺間しい唾棄すべき無恥であつた。そんなに半裸體の美人として彼の母が描き出されてゐることは、矛盾であり不調和であり嘲弄であり殆ど無上の汚辱であつた、況して彼女はほんの三月前には同じ此室で死體になり木乃伊にされて、室中はおろか家一ぱいに鼻を突くやうな厭な臭氣を放散させ、どんな臭氣止めの方法も効力がなかつた位だつたから、それを思ふと尙ほさらであつた。ネクリュウドフは、今も其惡臭が鼻についてるやうな氣がした。それから彼は彼女が死ぬる前日その痩せ細つた骨ばかりのやうな手で彼の强壯な白い手を握り、彼の顏をぢつと見入つて、『ミティヤ、惡く思つて御呉れでないよ、ねえ、私の爲たことに良くない事があつたつてもねえ。』と云つて、光澤の失せた目に涙を浮べた事を思ひ出した。

『何といふ唾棄すべき恥晒しだ。』肩や腕の肌も大理石のやうに白く艶々してさも得意らしい微笑をさへ湛へてゐる半裸體の其肖像を見ると、彼は尙ほ一度さう呟いた。その肖像の胸の露はになつてゐる事で、彼は又つい三四日前に矢張り同樣に半裸體な扮裝をした或る若い女を見た事を思ひ出した。それはミッシイで、自分の舞踏服を着た所を彼に見せようと思つて、或る舞踏會に行く夕方ロ實を設けて彼を呼んだのであつた。その時の彼女の美しかつた腕や肩つきなども、今はネクリュウドフは忌々しげに思ひ浮べた。又酷薄な淫縱な所業をいくらも過去に持つてゐる粗野な彼女の父も、如何はしい噂の持主で女學者を氣取つてゐる彼女の母も、皆が皆淺間しい醜惡なもの許りであつた。

「いけない、いけない。」彼は思つた、「おれは自分を解放しなくちやいけない、こんな一切の醜惡な關係から解放しなくちやいけない、コルチャアギンの家とも、マリア・ワッシリエフナとも、又親讓りの財產とも、又其他一切の今迄の關係とは緣を斷たなくちやいけない、おれは自由に呼吸し度い、外國へ旅行をしたい、羅馬に行かう、そしておれの繪を完成ささう。」

さう思つて來ると彼は又自分に畫才のない事を考へずにはゐられなかつた。「なあに、いゝわい、おれはたゞ自由に息がつき度いのだ、先づコンスタンティノオプルへ行かう、それから羅馬だ。それには成るだけ早く陪審員の役目を終らなくてはいけない、そしてあの辯護士に賴んだ一件を濟まさなくつちやいけない。」

すると急に今日見た黑い目の被告の女の姿があり〳〵ありと彼の心に浮んで來た、判決を聞いて泣き喧つた姿がまざまざと目について來るのであつた。彼は吸ひ殘りの卷莫を灰皿に躙り潰し、新しいのに火をつけて室内を彼方此方と歩き出した。そして彼女と一緒に居た時分の事をそれから夫れへと思ひ辿つてみた。彼が最後に彼女を見た時の事、その時彼女に云つた事、その頃彼が彼女に對して强い激しい情熱に驅られてゐた事、そして其後直ぐ深い悔恨に落ちた事。それから彼女が白い服を着け靑い帶を締めてゐた姿、さては夜明けの供養の光景など。

「おれは彼女を愛してゐたのだ、本當に愛してゐたのだ、純眞な愛を注いでゐたのだ。あの叔母達を最初に訪うてあの論文を書いてゐたあの時から疾うに愛してゐたのだ。」その頃の自分の事をも思ひ出した。生き生きした快活な靑春時代の氣持や調子が微風のやうに和らかに彼の心を撫でた、彼は深い哀愁に襲はれざるを得なかつた。

然るに今は何といふ變り方であらう。それは十幾年前寺で見たカテュウシヤと今日判決を下された賣女としての彼女との間の相違以上はないにしても、それに劣らぬ變り方である。昔は彼も人生の希望に滿ち輝いて、洋々たる前途には何事も出來ない事はないと確信してゐた自由無碍な人であつた。然るに今はあらゆる方面に壓迫を感じない譯に行かない身の上となり、目的も値打もない荒凉たるやくざな生の網にかゝつて、それより脫け出すべく何等の方法をも講じない又講じようと思ふ事すらない彼であつた。又彼は嘗ては自分の公明正大な心事を誇り得る人であつた事、如何なる場合にも嘘は云はないのを自分の處世の根本原則としてゐた事、そして又實際その通りして來た事、それだのに今は淺間しい虛僞瞞着の底に沈淪して、それを本當だと四周の者共に追從されて好い氣になつて世を渡つて來た事を思ひ出した。そしてその虛僞の生活より脫出す可き何等の道もなかつた、少くとも彼はそれを見出さなかつた、そして彼は昏々として其醜惡の底に沈んでゐた、そして夫れに慣れきつて、後には其處に滿足をさへ感じてゐたのである。

彼はマリア・ワッシリエフナと其の夫とに對する關係を何うして解決すればよいのであらうか、その夫に對し又其子供達に對し顏を合はせる面目もないのを何うすれば巧く解決出來るであらうか。又ミッシイに對する關係も彼は何うすれば僞らないで解決をつける事が出來

るであらうか。又土地私有の不正な所以を承知してゐ乍ら母の遺産のそれを受繼いでゐる自分の矛盾撞着から、何うすれば彼自身を解放する事が出來るであらうか。彼はカテュウシヤに對する罪を何うすれば償ふ事が出來るであらうか。決して其儘にしておかるべき事ではないのである。

「おれは自分の愛した彼女を、決して棄てるわけには行かない、又彼女が不當に課せられた懲役の刑を辯護士に金をやつて、取除いてやる事だけで滿足してゐるわけには行かない。どうしておれはあの時は金で自分の罪を償ふ事が出來ると思つたのだらう、彼女に金を握らせると夫れでおれの爲すべき分だけは爲してしまつた積りでゐたのだらう。」

そして彼はその昔玄關先きで彼女に金を握らした時の光景をありありと思ひ浮べた、そして旅立つて行つてしまつた自分のやり方を思ひ浮べた。「あゝ、あの金を！」彼は悚然として其場の光景に責められた。

『あゝ、何といふ淺間しさだ。』と、彼は高い聲で獨語つた、『あんなことの出來るのは無賴漢だけだ、そして、おれは、此のおれは無賴漢だな。でも、おれは實際無賴漢なのだらうか。』と彼は一寸立止つて自ら問うた。『さうとも、無賴漢でなくて何だ。』と自ら答へた。そして彼は自身を責めずにはゐられなかつた、「マリア・ワッシリエフナと貴樣との關係はどうだ、彼女の夫に對する貴樣の態度は何うだ、それが醜惡でないのか、下劣でないのか。また財產に對する貴樣の態度は何うだ。自分の母の側から貰ふ金だといふ口實の下に、貴樣は自分で不正と認めてゐる富を味はひ貪つてゐるではないか。それから貴樣の今までの無爲遊食の唾棄すべき全生涯は何だ、その卑劣の頂上としてのカテュウシヤに對するやり方は何うだ。この無賴漢め。世間の者は貴樣の事を何とでも云ふだらう、その好きな通り云ふがよい、そしてまた貴樣も世間を誤魔化して行けもするだらう、たゞ併し貴樣自身を今は僞ることが出來るか。」

この時彼ははじめて知つた、彼が昨今多くの人に對して抱いてゐた嫌惡の情、殊に今日コルチャアギン公爵夫妻に對し、ミッシイに對し、又コルネエに對して抱いた嫌惡の情は、實は彼が彼自身に對する嫌惡の情であつたのである。そして不思議な事には、自分の卑劣無恥を承認するのが、その承認の中には或る病的な何物かが含まれてゐるやうではあつても、併し何となく嬉しくもあり心が安まるやうでもあつた。

ネクリュウドフの今迄の生涯にも、彼自ら「靈魂の潔齋」と名づけてゐた或事が一度ならずあつた。それは大抵それより長く續く反對な生活の後に起つてゐた或る靈的狀態で、彼が其狀態になると彼は急に其時迄の自分の內部生活の萎縮弛緩してゐた事に氣付くのであつた、

そして心の底に停滯鬱積して其萎縮弛緩の原因をなしてゐた一切の汚物を早速取り除く事にかゝるのであつた。

さうなるとネクリュウドフはいつも自分の行爲の諸法則を規定し、向後永久それを遵奉して行く積りをした。日記をつける事にし、新生涯に入り、決して再び其の縫りを戻さないと誓ひ自ら turning a new leaf（性行一新）だと名づけて其記錄を始める事にした。けれどもいつの間にか又世間の誘惑に捕へられ、知らず識らず溷濁の淵に落ちてゐるのが例であつた、そしていつも以前よりは却つて深く沈んでゐるのが今迄の事實であつた。

そんな具合で彼は今までに數度の潔齋をした、そして又數度の墮落をした。彼が始めて叔母達を田舍に訪うた時も其潔齋の一時期であつた、そして其時が最も強い感激に驅られた時で、其効果も亦可なり長く續いた。その次ぎに彼が官途の文官をやめて一身を捧げて國家の爲めに盡すと云つて軍隊に入つた時が又墮落期（こゝはいづれの獨譯にも英譯にも反對な意味（即ち潔齋期）としてある、中には少し曖昧にしたのもあるし、併しこゝをさういふ意味にすると第十三章と矛盾する、若しトルストイが不用意とすれば、こゝは改めなくてはいけない。牽强な說明を以てすれば潔齋期としても全く通用せぬ事はないが、どうしてもこゝは矢張り墮落期と信ずる。）で、その墮落振りは以前よりは一層甚くなつてゐた。それから軍隊より身を引いて外國へ旅行し繪畫の道に入つた時は又潔齋の一時期であつた。

それ以來今日までの長い期間は少しの潔齋もなく經過した。それで彼は尙ほ一層深い醜惡の淵に沈んでゐたのである。彼の良心の要求するやうな生涯と今現に彼の送つてゐるそれとの間には、嘗てなかつた大きな溝渠が出來て居た。それを思つた彼は憮然たらざるを得なかつた。

その溝渠はあまりに大きかつた、それを思つた瞬間は彼は迚も自分は再び起き上る事は出來はしないと絶望せずにゐられない位ゐであつた。

「お前は自己を完成させるとか云つて、今迄に幾度夫れをやつてみたのだ、そして其の何れにせよ物になつたか何うか。」と彼の心の底で誘惑の聲は彼に話しかけた、「何の爲めに尙一度お前はそれをやつてみようといふのだ。お前ばかりがそんな醜惡な生活をしてゐるのぢやないのだ、皆がそれをやつてゐるのだ、人生といふものが抑もさうしたものなんだ。」けれどもネクリュウドフの今の心には彼の自由無碍な靈的な、唯一の眞であり唯一の權威であり唯一永遠の支配者である或物が再び頭を擡げて來た、そして彼はそれに身を投げ出して委ねるより外に道はなかつた。如何に溝渠が大きからうとも、再び目覺めた精神に取つては、そんな事は何でもなかつた。

「おれはおれを繫めてゐる此の虛僞を寸裂してやる、何樣な事があらうとも寸裂してやるのだ、そして如何なる場合にも、又誰に對しても嘘は云はない、又不誠實な行は斷じてしな

い。」と彼は高い屹とした聲で自分に云つた。「ミッシイにも本當の事を云つてやる、おれが言語道斷な無賴漢である事、彼女と結婚する資格のない者である事、今迄思はせ振りなどをして不安を抱かせて濟まなかつた事、殘らず云つてやる。あの貴族頭の妻君にも云つてやる――いや、彼女には云ふ必要がない、彼女の夫に云つてやる、おれがやくざなしれものであつた事、そして彼を欺いて來た事を云つてやる。引繼いだ遺產も本當の道理の命ずる通りに處置してやる。カテュウシヤにも云ふ、おれがやくざ者である事、彼女にどれだけおれは醜惡な所業をしたか、皆云ふ、そして彼女の運命をよくする爲めには、どのやうな事でもするのだ。さうだ、おれは彼女を訪ねる、そして赦して呉れと願はう、子供等が願事をする時のやうに心の底から一圖に願はう。」

彼は默つた。

「おれは彼女と結婚しよう、さうする方がよければ結婚しよう。」そして彼は子供の時にしたやうに兩手を胸の前に上げて指を組み合はせて合掌し、天を仰いで願つた、「神樣、力をお添へ下さい、教へて下さい、導いて下さい、そして此の一切の醜惡の中より私を救ひ出して下さい。」

其の願は彼が願つてゐる間に採用された。彼は內部の自由と勇氣と生命の悅びとを感じた許りでなく、善に向ふ大威力を身內に感ずる事が出來るのであつた。彼は今は一個の人間として爲し得可き一切の善は、彼も亦爲し遂げ得る事を感ずるのであつた。

目には涙が湧いて來た。それは善い涙でもあり又惡い涙でもあつた。數年睡つてゐた靈的資質が爰に目覺めた悅びの涙であつたから善い涙であつた、同時に自分をいたはる心と自分の道德に感激しての涙であつたから惡い涙でもあつた。

彼はかつかと身の熱るのを覺えた。窓際へ行つて其扉をあけた。淸々する靜かな月夜であつた。往來の方では馬車の音がしたが、それもだんだん遠くなつて、何處も一體にしんとなつた。窓の直ぐ前にはまだ葉の出ない高い白楊が一本、その枝の網のやうに入り組んでゐるのも其儘に、其處の砂地の上に鮮かな影を投げてゐた。左の方には物置の屋根が月の光に白く輝いてゐた。それより向うの正面には並んでゐる樹々の枝が互ひ違ひに入り混り、その幹の彼方には塀の影が黑く見えてゐた。ネクリュウドフは月に照らされた庭や屋根や又は樹々の影などを眺めやつて、爽やかな新鮮な空氣を思ふさま吸つた。

『何といふ好い氣持だ、何といふ爽かな心持だ。』と彼は云つた。それは月を讃美したのでもなく眺めを稱したのでもなくして、彼自身の心の奥に動いてゐる何者かに對する感激であつた。

やつと夕方の六時になつてマスロオワは監獄に、腹もへり疲れ弱つて歸つた。十五エルストの長い石の道を慣れない足で歩んだので、足はづきづき痛んだ。それに思ひ掛けもない判決を下されたのでがつかりしてゐた。

裁判所で見張の兵が休みの時間に傍でパンと鷄卵を食つてゐた時は、彼女は口がむづむづする位ゐであつた。けれども彼等に少し分けて呉れなどといふ事は、如何にも賤しいやうで云へなかつた。それから尙ほ三時間經つと腹の空いた感じは止んだ、たゞもうからだがすつかり疲れたのを感じた。丁度その時彼女はあの思ひ掛けない判決を聞いたのであつた。はじめは自分の耳を疑つた、聞いた事を夫れと合點する事は出來なかつた。彼女は自分と懲役といふものを結び付けて考へる事は出來なかつたのである。けれども裁判官や陪審員等が何か極く當然な事をでもしたかのやうに件の判決を採用して平靜な事務的な取澄ました顏をしてゐるのを見ると、彼女は憤激した、そして自分は無罪であると室中に叫んだのであつた。そして其叫びが至極當り前な、豫め待ち設けられてゐた、その爲めに變更など勿論少しも持來さない分りきつた事として聞かれたと知つた時、その時彼女は泣いたのであつた、そして

彼女は自分に加へられた怖ろしい不當な殘忍酷薄な取扱ひに屈服せねばならないのかと思つたのであつた。殊に彼女は彼女を親切さうに優しさうに見てゐた男達から取分け若い男達からそんな殘酷な判決を下された事に愕いた。自分をそんな目で見てゐなかつたのはたゞあの副檢事だけだつたのにと彼女は思つた。開廷前に判事等の出勤を待たされてゐる時とか、又は間の休み時間などに、彼が囚人室の腰掛にかゝつてゐると、そんな男達は彼女を見る爲めに色々な口實を設けて其室に入つたり出たりしたのである、それを彼女も知つてゐたのである。その男達が何ういふわけか分らないが、彼女を、無罪であるのに拘はらず懲役と判決したのでなつた。

彼女は泣いた、そして泣きやむと、全く何が何やら分らない茫とした氣持になつて、ただ監獄へ連れ歸られるのを待ちながら囚人室に腰かけてゐた。その時彼女はたゞ煙草を飲み度いと思つた。その時ボオチュコワとカルティンキンが判決を下された後で其同じ室に引かれて入つて來た。ボオチュコワは直ぐ口穢く罵りかけた、そしてマスロオワに極道奴と云つた。

『見やがれ、何うしたい、放免になつたのか、それで。へん、さうは行くものか、この懲役女め。ちやんと罰が當つたでねえか。どうだい、懲役に行きをつたらもう男にべちやくちやする手管も忘れやがるだらう。』

マスロオワは頭をぐつたり下げて、兩手を獄衣の袖に隱し、薄汚い床を見るともなく茫然見ながら、身動きもしなかつたが、『私はお前だちに取り合はないから、お前共も私をそつとして邪魔しないで置いて呉れ。』とたゞ夫れだけ云つた。それからなほ一二度『お前達に取り合はない』と繰返したが、それきりでもう何も云はなかつた。ボオチュコワとカルティンキンとが引立てられて行き、そして廷丁の一人が入つて來て彼女に三ルウブルの金をやると、やつと彼女は再び生き返つたやうな調子になつた。

『マスロオワと云ふのはお前か。』と廷丁は云つた、『これを渡すぞ、何處かの奥樣がお前にやつて呉れといふ事だつた。』と云つて廷丁は彼女に其金を渡した。

『どんな奥樣なの？』

『たゞ此金を取ればいゝ、お前と話などするわけには行かない。』

その金はキタイエワが呉れたのである。

キタイエワは法廷を出ると、マスロオワに少し金をやつていゝだらうかと法廷取締に尋ねた。法廷取締がいゝと答へたので、彼女は三釦付きの手袋を脱いで、着てゐる絹服の後ろの隱しから白い太つた脂肪ぎつた手で品のいゝ金入れを出し、債券の利札が可なり入つてゐる中から二ルウブル五十コペエケンのを一枚取り出し、なほ夫れに銀貨を加へて法廷取締に渡した。法廷取締は一人の廷丁を呼んで、キタイエワの前で其金をさう云ひつけて廷丁に渡した。

『どうぞ間違ひなくあの女に渡して頂戴な、ね。』とキタイエワは其時云ひ添へたのである。

廷丁は間違ひなくなどと云はれたのでつんとした。それでマスロオワに對して突慳貪にしたのである。

マスロオワは金を得て唯一の望みが叶へさせられるので悦んだ。早く卷莨を買ひ度いんだけれど、そして吸つてみ度いんだけれど、と彼女の心は今はたゞ其事のみに集中した。判事の室などから煙草の煙が廊下へ漂ひ出るのを見ても吸つてみたい位ゐそれ程彼女は欲しくなつた。けれども彼女のために夫れ夫れの手續きをせねばならない書記が、役目の事は打忘れて或は新聞雜誌に就いて一人の辯護士と切りに話し合つたり論じ合つたりしてゐるので、長いこと彼女は待たなければならなかつた。

やつと五時近くになつて彼女は監獄に戻られる事になつた、そしてニッセゴロッド出とチュウワッセ出の二人の見張の兵に引立てられて裁判所の裏門から出た。出ると直ぐ彼女は彼等の一人に五十コペエケンを渡して、白パンを二つと卷莨を買つて呉れるやうに頼んだ。チュウワッセの兵は金を受取つて微笑を含み乍ら、『よからう、どうかしてやらう』と云つて承知し

た。そして本當に彼は卷莨と白パンを云はれた通り買つて、剩錢も確かに彼女に渡した。けれども彼女は途中では吸ふわけにも食べるわけにも行かなかつた、それで何より莨が吸ひ度いと思ふ心を滿たすことが出來ないで監獄に歸つた。彼女が檻房の方へ連れ行かれやうとしてゐる時、汽車で送られて來た百人許りの囚人が矢張り監獄内に入れられる所であつた、入口の邊りで彼女は彼等と一緒になつた。

髭のあるの、剃つたの、老人、若者、露西亞人、他國人、頭の半分を剃られたの、といふ具合に囚人は種々樣々で、鎖をぢやらぢやら音させ、埃と足音と話聲と鼻を突く汗の匂ひを其處ら中に撒きちらした。彼等はマスロオワの前を通る時は、皆が皆彼女を見返つた、中には彼女に近く寄つて來て揶揄ふのもあつた。

『やあ、何て別嬪だらう。』と一人は云つた。

『姐さん、今晩は。』と一人は目を細くしてお世辭を使つた。

後頭部から顏一ぱいを髭だけ殘して青く剃られてゐる色の黑い一人の囚人は、鎖をぢやらぢやら鳴らし乍ら彼女に飛び付いて來て抱きしめた。

『昔馴染を忘れたかい。そんなに氣取らなくてもいゝやねえ。』彼女に突きのけられたので其男は目をぱちくりさせ乍ら白い齒を見せてさう云つた。

『何をしてるんだ、この野郎。』と其男の後ろからやつて來た看守長は怒鳴りつけた。

その囚人は縮み上つた、そして逃げるやうに行つてしまつた。看守長はマスロオワに當りかゝつた。

『何しに其方は其處に立つてるんだ。』

彼女は裁判所から連れ戻されて來たと答へようと思つた、けれどももはや口を利く力も無い位ゐに弱りきつてゐた。

『裁判所より連れ戻つた所であります、看守長殿と』年上の見張の兵は一歩進み出て擧手注目の禮をしながら答へた。

『それでは看守に渡すがよい。何といふ亂雜な有樣だらう。』

『はい、畏りました。』

『ソコロオフ。受取らないか。』と看守長は怒鳴つた。

看守はやつて來て、意地惡さうにマスロオワの肩を突いた、それから顎でしやくつて彼女を女囚部へ連れて行つた。そこで彼女は服の上から身體各部を撫で廻はされて檢査を受けたが、卷莨の小匣はパンの中に差し込んでゐたので見付からずに濟んだ。それから彼女は朝出て來た同じ檻房へ再び入れられた。

マスロオワの入れられてゐる檻房は長さが九アルシン（一アルシン二尺三寸強）、幅七アルシンの長手の室で、窓が二つに飾り無しの出張つた煖爐が一つあり、縁臺のやうな形の寢床が室の三分の二を占め、その板は皆古くてばさばさになつてゐた。戸口の眞向ひの正面には煤けた聖像が小さい蠟燭を添へて掛けてあつて、其下に埃の積んだかひざいくの花束があつた。戸口から左の方の床には薄暗い所があつて、其處には惡い臭ひのする桶が置いてあつた。檢閲が濟んで此室の女囚は皆寢る用意をしてゐた。

この檻房に入れられてゐるのは總計十五人で、十二人の大人の女と三人の子供であつた。まだずつと明るい頃なので、縁臺の樣な寢床に横はつて寢てゐるのは二人しかなかつた。その一人は獄衣の端で頭を被うてゐた。其女はパスを持たなかつた爲に捕まつたもので、半ば白痴であつた、そしていつも睡つてばかり居た。今一人のは肺病病みで、盜みをして此處に來てゐる女であつた。この女は睡りはしないで、獄衣を頭の下に敷き、自は大きく見開いて、咳をすまいと絶えず努め、濕氣に喉がもさもさするのを我慢しいしいしてゐる方だつた。其他の女は皆頭に何もかけず、體にも粗い麻の肌着だけ着けてゐるのもあつた。縁臺の樣な寢床に腰かけて縫ひ物をしてゐるのもあつたが、多くは窓際に立つて外を通る男の囚人等を見てゐた。

物を縫つてゐる三人の女の中の一人は今朝マスロオワに親切な注意をした老婆で、名はコラブレエワと云ひ、顎の肉が弛んで下り、其他一體に皺が多く、氣六ケ敷さうな顏付をした大柄な丈夫さうな女であつた。顳顬の邊りにはは霜の降つた一體に薄い赤い髪を短い組髪にしてゐた。頬にある疣にも毛が生えてゐた。この女は自分の亭主を斧で打殺した廉によつて懲役の判決を受けてゐた。殺したわけは亭主が彼女の無邪氣な娘の操を蹂躙しさうになつたからであつた。コラブレエワは此の檻房の大將株で、內緒にブランデエをも賣つてゐた。眼鏡をかけながら、力業で硬くなつた手に百姓流に三本の指で針を持ち針の尖を自分の方へ向けて縫つて行つた。

コラブレエワの隣に腰かけてゐるのは獅子鼻に小さい黑い目を持つた、人の好ささうな茶褐色の肌色をした小柄なお喋りの女で、帆布で袋を縫つてゐた。鐵道線路の踏切番であつたが、ある日列車の通る時旗を持つて出なかつた爲めに其列車を災難に逢はしたので、三箇月の禁錮を云ひ渡されたのである。

今一人の縫ひ物してゐる女はフェドッシフ或はフェニイチュカと呼ばれてゐる極く若い愛ら

しい女であつた。櫻色の顏に子供らしい鮮かな碧い目をして、褐色の長い二つの組髪を小さな頭に捲きつけてゐた。監獄に來たのは夫を毒殺しようとした爲めで、それは十六の小娘として婚禮をした後直ぐの事であつた。しかし保釋で家に歸つて判決を待つてゐる八ケ月間に彼女は夫と仲直りをした許りでなく、非常に睦じい仲になつて、彼女が判決を受けに行く事になつた頃は二人は一心一體といふ程であつたのである。それで夫は勿論、舅も姑も、殊に姑は彼女を可愛がる事一通りでなく、三人力を合せて懸命に彼女を放免にして貰はうと骨折つたが、其効なく、とうとう西比利亞に送られて懲役に服するやうに判決されてしまつたのである。いつも愉快さうに嬌々してゐる柔和な此のフェドッシアは丁度マスロオワと寢床を隣り合はしてゐた。そしてマスロオワには非常な負担を持つてゐて、よくマスロオワの爲めに何くれと氣をつけてもやり、又其の氣に入り度がつてもゐた。

何もしないで寢床に腰かけてゐるのがまだ二人あつた。その一人は四十くらゐにもならうか、昔はすぐれた容色であつたらしい整つた痩せ細つた靑白い顏の女で、子供を抱いて乳を飲ませてゐた。罪人になつたのは、村で新兵が一人徵發された時、百姓達がそれは無法な徵發だと云つて徵發官を追つ拂ひ其新兵を解放してやつた事があつたが、とうとう又捕まつて徵發されて行く時、叔母に當る此女が其新兵の乘せられた馬の轡を取つて容易に放さなかつたからであつた。

今一人何もしないで寢床に腰掛けてゐるのは皺だらけな顏の、溫和らしい小柄の老婆で、背が屈まり、髪にはすつかり霜が降つてゐた。此の老婆は煖爐の傍の寢床に腰かけて、髪を短かく刈り込んだ四歳位ゐの肥え太つた男の兒が笑ひ乍ら前を走るのを捕まへるやうな手つきをしてゐた。男の兒は老婆の前を走つて往つたり來たりしながら、同じことを幾度も繰返した、『そら、捕まへられないぢやないか。』

この老婆は息子と一緒に放火犯として訴へられたもので、自分が監獄に入れられた事は一向平氣であるが、同時に入れられた息子の身の上を思ふと堪らなかつた、なほ又自分の夫の上が思はれた。夫は息子の嫁に逃げられて、洗濯其他身の廻りの世話をして呉れ手がないので、さぞ汚れもしやう虱も湧かうと、それが老婆に思ひやられて仕方がなかつた。

以上七人の女の外に、なほ四人は開いた方の窓際に立つて鐵の格子につかまり乍ら、マスロオワが入口で一緒になつた囚人等が向うを通るのに、呼びかけたり手樣目樣をしたりして巫山戲てゐた。その中の一人は髪の赤い大柄な肥太つた前屈みの窃盗犯の女で、黃色味を帶びた白い顏にも手にも雀斑が一ぱいあつた、ひろげてゐる襟の内に見える首も太かつた。この女は高い嗄れ聲で勝手放題に尾籠な亂暴な口をきいてゐた。その直ぐ傍のは十歳許りの小

娘としか思はれない位ゐ小さい色の黑い百姓女でその胴は長かつたが足が極く短かく、汚點のある赤ら顏に目を大きく見開いて、脣も口を十分包むに足りないかのやうに白い反齒を露出してゐた。そして此女は窓の彼方で何かする毎にきやつきやつと云つて笑つてゐた。罪に落ちたのは放火窃盗の二罪俱發によつたのであるが、化粧が好きなので此處では「めかし屋」の渾名を持つてゐるのである。二人の後ろに立つてゐるのは極く汚い鼠色の肌着を着て如何にも見窄らしい樣子をした痩せた孕み女で、これは贓品隱匿で此處に來たのである。此女は何も自分では云はなかつたが、窓の向うで何かしてゐるのを見てはにこにこ笑つてゐた。

窓際に立つてゐる中の四人目の女は、目の眼れぼつたく出た柔和さうな顏をした中柄の巖疊な百姓で、ブランデエ密賣の廉で罪に落ちたのである。これは前の老婆と捕へつこをして遊んでゐる男の兒と今一人七歲になる娘の子の母親であるが、子供も一緒に此處に連れて來たのは、別に何處にも預け先きを持たないからであつた。此の女も時々窓から外を見はしたが、絕えず靴下を編んで居て、あちらから男囚共が何か云ふのを聞くと、さも忌々しげに眉を寄せたり目を瞑つたりした。七つになる其娘といふのは、ブロンドの髪を振り亂しながら肌着一枚で、髪の赤い大柄な女の傍に立つて其上衣に痩せた手でつかまつてゐた。そして男囚等と取交してゐる大柄な女達の猥雜な言葉を、目を睜つて一心に聞きながら、自分もそれを覺え込まうと努めるらしく小聲で幾度も眞似てみた。

十二人目の女は或る寺の役僧の娘で、自分の生んだ子を井戸に沈めて殺したのであつた。丈の高いすらりとした好い恰好の女で、髪は房々と豐なブロンドの組髪が大部分解けてばらばらに亂れ、目は眼れぼつたく少し出てゐた。此の女は自分の周圍で何があつてもそんな事には一切頓着なく、汚い鼠色の肌着をつけたのみで、足も跣のまゝ、檻房内の餘地のある部分を絕えず往つたり來たりしてゐた、そして壁際に來ると直ぐきちんと巧みな廻れ右のやうな恰好をするのであつた。

三

がちりと錠前をあける音がして、マスロオワが入つて來ると、一同の視線は彼女に注がれた。役僧の娘さへも一寸立止つて彼女を見た、そして眉をぴりぴりと上げたが、何とも云ひはしないで、又直ぐ大跨に往つたり來たりしだした。コラブレエワは針を粗い麻布に刺して、眼鏡越しにマスロオワを見た。其目は既に事の次第を何から何まで尋ねてゐた。

『おや、おや、歸つて來たわねえ、私は此人きつと放免と思つてたんだよ。』と彼女は殆ど男のバスのやうな嗄れ聲で云つた。『それで又此處に戻つて來たんかね。』

コラブレエワは眼鏡を外し、縫ひ物を自分の横の床の板の上に置いて、

『丁度その事を話し合つた所なんだよ、直ぐ放免になるつてさ。此の人もさう云つてるのよ、直ぐそれば出來るつて、そして放免になつた者の爲めに金を集めて呉れる事もあるさうだね。』

『えゝ、えゝ、そんな事はよくあるともさ。』と踏切番の女は直ぐ持前の綾澤たつぷりの聲で喋り出した。

『それで何うなつて？　何だか巧く行かなかつたんぢやない？』とフェドッシアはさも懷しさうにしみじみと思ひやりながら、碧くよく澄んだ子供らしい目を向けてマスロオワに尋ねた。自分の事でもあるかのやうに、その若い冴え冴えしい顏は泣き出しさうに引歪んだ。

マスロオワは何とも答へないで、コラブレエワの隣で端から二番目の自分の寢床に行つて腰かけた。

『そして屹度まだ何も食べてゐないんだらう。』と云つてフェドッシアは立上つて自分もマスロオワの方に行つた。

マスロオワはまだ默つて、白パンを枕元に置き、上衣を脫いだ。埃のした獄衣をはじめに脫いで、それから頭に掛けてゐた布を取つて又腰を下した、黑い髪は縺れ亂れてゐた。

煖爐の傍の寢床の上で子供と遊んでゐた背の屈んだ老婆もやつて來て、マスロオワの前に立つた。ちえつ、ちえつと舌打ちしながら思遣り深さうに頭を輕く搖つた。

子供も老婆の後から從いて來て、目を大きく見開き口を尖らしながら、マスロオワが持つて來たパンを一心に見詰めた。

裁判所であんな具合に取裁かれた後で今此處に斯うした思遣りある人達の顏を見ると、マスロオワは泣き度くなつた、泣き度さに脣はびくびく痙攣つた、けれども老婆と子供が傍にやつて來る迄は無理にも堪へて涙を飲み込んだ。けれども老婆の思遣り深い柔和な聲を聞くと、そして子供が其の愕いたやうな目を白パンから放して彼女を見ると、彼女はもはや我慢が出來なかつた。彼女の顏一ぱいがびりびり痙攣つた、彼女は獻欷り上げた。

『だから私云つたんだがねえ、しつかりした辯護人を賴まなけりやいけねえつてさ。』とコラブレエワは云つた。『それで何うなつたえ？　西比利亞行きかえ？』

マスロオワは答へる事が出來なかつた。泣く泣く白パンの中から卷莨の匣を出してコラブレエワにやつた。その匣には心臟形に襟の開いた服を着て、髪を高く縮らし上げてゐる頰の赤い貴婦人を浮き出させてあつた。コラブレエワは其繪を見ながら、マスロオワがそんな餘計の贅澤品まで買つて金を遣つた事を苦々しく思つたが、中から一本取り出してランプで火

を點け、自分が一服吸つてからマスロオワにやつた。マスロオワはまだ泣き止みはしなかつたが、貪るやうにすぱすぱと吸つて、そして煙をぷうと吹いた。

『懲役なの。』と獻欷り上げながら辛と云つた。

『野郎ども神様に怖ろしいたあ思やがらねえのか、生血吸ひの役人めら。』とコラブレエワは憤つた。『罪の無え此娘を其様な事にしやがつてさ。』

其時窓際に立つてゐた女囚等は急に高聲で笑ひ出した。七つになる小娘も子供らしい細い聲で大人の八ケ間しい聲を眞似ながら一緒になつて笑つた。男囚の一人が窓の外で何か滑稽な眞似をして彼女等を笑はしたのであつた。

『やあい、宿無しの阿呆め、何て態あしやがるんだぇ。』と云つて髪の赤い大柄の女は、其の肥つた全身を可笑さに搖り動かした。それから顏を格子にくつ着けて思ひ切り猥褻な亂暴な事の限りを喚きちらした。

『やい、こら、山の神、何を其様に笑つとるんだい。』とコラブレエワは頭を打振りながら其大柄な赤い髪の女を窘めた。それから又マスロオワに、『幾年だぇ？』

『四年なの。』と答へてマスロオワは止度なく溢れる涙に手の卷莨をすつかり濡らしてしまつた。忌々しげに彼女はそれを投げやつて、又新しいのを二本拔いた。踏切番の女は自分は莨は飲まないのだが、直ぐそれを拾ひ取つて丁寧に扱ひ、その間にも喋るのを止めはしなかつた。

『ねえ、さうだろが、ねえ。』と踏切番は云ふのであつた。『本當な人間の道なんてものは、猪が食つてしまつたのさ。あの野郎ども、いつも自分達のしてえまゝにするのさ、それだのに私達は、放免にするだらうとよくも思つてゐたもんだねえ、マトエイエフナもさう云つたぢやねえか、放免になるつて、なあ。だけんど私あさうでねえと云つたんだよ、さうでねえつて、なあ。何だか蟲が知らせたもの。本當の人間の道なんて、あの野郎ども食つてしまふに違えねえつて、さう思つたのさ。すると丁度その通りなつたぢやねえか。』そして彼女はさう云ひ立てる自分の聲を自分で聞くのが如何にも愉快さうであつた。

その時窓の向うを通る男囚も殘らず行つてしまつたので、窓際に立つてゐた女達もマスロオワの傍に寄つて來た。最初に頑丈な田舍の居酒屋の嚊が娘と一緒にやつて來た。

『え？　どんなになりましたえ？　嚴しい處刑になりましたとえ？』さう云つて其の嚊はマスロオワの傍に腰かけながら、なほ熱心に靴下を編みつゞけて行つた。

『此の娘に金が無えもんだで、嚴しい處刑になつたのさ。金さへありやあ、立派な辯護人が傭へるし、なあ、すりやあ放免は請合ひさ。』とコラブレエワは云つた。『あの人は何て名だつ

けな、あの髪の長え、鼻の長え人さ、あの辯護士なら、なあ、皆さん、あの辯護人なら河に沈んでる者でも濡れてないやうに見せて引上げまさ、ねえ。そのくれえの事ああの人はするだがねえ。』

『さうだねえ、辯護人を傭はなくつちや。』とめかし屋も其處にやつて來て、齒を剝き出しながら云つた。『だけんど、あんな辯護人なら、お前さん、千兩より少い金で傭はうとしたら、唾でもひつかけて斷るだよ。』

『お前さんの運が惡かつたと思つて觀念するより外はねえやなあ。』と放火犯の老婆は言葉を挾んだ。『私だつてちつとやそつとの辛さぢやねんだよ、悴の嫁は逃げやがるし、その悴は此處にぶち込まれるし、私は又此の年をしてこんな恥晒し……と來てるんだからねえ——。』

幾度云つたか分らない愚痴を、老婆は又もや繰返した。

『さうしたもんだよ。』と居酒屋の噂は云つて、娘の頭をぢつと見たが、編みかけの靴下を脇に置き、娘を引き寄せて兩膝の間に挾みながら、娘の髪の中を敏速い目と手で探し廻しつつ、『私がブランデエを何故内所で賣つたかつて？　だけんど、さうでもしないぢやあ、どうして子供に食はして行けるだ。』

その言葉でマスロオワはブランデエを思ひ出した。

『一杯だけ飲みたいんだけど。』とコラブレエワに云つて、肌着の袖で涙を拭いたが、急には涙は收まらなかつた。

『あいよ、あげやうとも。』とコラブレエワは云つた。『けんど、お錢があるかえ？　あるならお寄越しよ。』

三二

マスロオワはパンの中より金を取り出し、債券の利札をコラブレエワに渡した。コラブレエワは夫れを手に取つて眺めながら、自分は讀めなかつたが物識りのめかし屋に夫れは二ルウブル五十コペエケンの値のあるものだと聞いたので、煖爐の後ろの穴に隱してゐるブランデエの壜を取りに行つた。女達はそれを見ると、めいめい自分の寢床へ戻つた。その間にマスロオワは獄衣と胸當ての埃を拂ひ、寢床に上つて白パンを食べ始めた。

『私あなたにお茶をしまつといたわ、冷くなつちやつたかも知れないけれど。』と云つてフェドッシアは足卷きの布に包んでおいたブリキの茶瓶と茶碗を棚から出した。

茶はすつかり冷めてしまつて居て、茶よりも寧ろブリキの味がした。けれどもマスロオワは茶碗になみなみ注いで、パンを食べては飲み飲みした。

『フィナアシュカ、おあがり。』と云つて彼女はパンを少し割り、彼女の口元のみ一心に見やつてゐた子供にやつた。

するとコラブレエワはブラシデエの壜と猪口を持つて來た。マスロオワはコラブレエワとめかし屋にも振舞つた。此の三人が此の檻房内で金も幾らか持ち、又何か持つた物を分け合つたりするので、此處での上流社會といふわけになつてゐた。

程なくマスロオワは元氣になつて、裁判所での事を話し、副檢事の論告振りを眞似てみせたり、其他目に付いた事を云つて聞かしたりした。殊に彼女は到る處で男達に從いて來られた事が最もよく頭に殘つてゐた。法廷でも皆が彼女ばかり見てゐた事、被告控室に居ると何かと口實を設けて色々な男が入つて來た事などを彼女は話した。

『見張番の兵隊さんもさう云つたのよ。皆私を見に來るんだつて。それはね、紙か何か探しに來たといふやうな恰好なのさ。でもねえ、紙なんぞに誰も用はないのよ、そして私を矢鱈に見るぢやないの、それが私にようく分つたんだもの。』と彼女は笑ひ乍ら云つて、さうされたのが如何にも腑に落ちかねるとでも云ひさうに頭を振つたりした。

『えゝ、えゝ、そりやねえ、男つて者は皆そんな者なのさ。』と踏切番は相槌を打つて、直ぐ例の綾澤たつぷりの調子で喋り立てた。『甘い物に集る蠅みたいなものでねえ、甘くない物に寄りつきもしないのさ、だけど其の甘い物を餌にすれば捕れるんだからいゝのよ。質實なパンなんかやらなくつて好いんだしねえ。』

『此處でもさうなのよ。』とマスロオワは言葉を引取つて、『私が裁判所から戻つて來ると、大勢の男囚と入口の處で一緒になつたのさ。すると皆私のまはりに寄つて來てね、私拔けて來られなくなつた位さ。やつとの事にお役人が來て男達を追つ拂つて呉れたわ。一人なんかは餘り圖々しくするから、私うんと肘で突き退けてやつたわ。』

『そりやどんな男だつたえ？』

『少し色の黑い、髭のある男だつたわ。』

『ぢやあ彼だわ。』

『あれつて誰？』

『シュチェグロフさ、今先き此處の前を通つた男よ。』

『シュチェグロフつてどんな男なの？』

『シュチェグロフを知らねえ？　シュチェグロフは二度も懲役から逃げ出した男ぢやねえか、そして又捕つたのさ。だけど又逃げるに違えねえよ。看守達もあの男には怖がつてるだからねえ。』とめかし屋は男囚達に手紙の取次ぎなどする事があるので、監獄内での出來事をよく知

うてゐるのである。』逃げ出すとも、屹度逃げ出すわ。

『逃げ出すんなら、こちとら達も一緒に連れ出して呉んねえかなあ。』とコラブレエワは云つたが、又マスロオワに向つて、『だけんどお願えの書付の事は辯護人はお前さんに云はなかつたかえ、今が丁度それ出す時だらうがねえ。』

マスロオワはそんな事は少しも聞かなかつたと答へた。

赤髪の女は雀斑の一ぱいある兩手を蓬々と亂れた豐かな赤い髪へやつて、頭を指で搔きながら、ブランデエを飲んでゐる上流社會の方へやつて來た。

『私すつかり知つてるんだよ、カタリイナ、教へてやるわねえ。何よりもお前さんが其のお審きに承知出來ねえつて事を書いてさ、その譯を檢事つてえのに云はなきやなんねえのさ。』

『お前さんが何うしたつてんだい。』とコラブレエワは、がみがみした調子のバスで云つた。

『酒の匂ひを嗅いでやつて來たんだろが、他人の頭痛を氣に病むまいぜ、お前なんぞに用はねえよ。お前なんぞに知惠を借りねえたつて、どうしなきやなんねえつて事は、ちやあんとこちとらで御承知なんだい。』

『お前なんぞに云つてるんぢやねえよ、何を吠えくさるんだい。』

『ブランが一杯飲み度えのだらう。それでやつて來たんぢやねえか。』

『それぢやあ此の人にも一杯おやりよ。』と、自分の持つてゐる物は何に限らず人に分けてやりたがるマスロオワはさう云つた。

『やる物は別にあら、拳固でも食はしてやら。』

『何だと、拳固を食はすなら食はしてみねえか。』と云つて髪の赤い女はコラブレエワの方へ寄つて來た。『手前なんぞにびくびくすると思つてるのか。』

『この、牢屋の餓鬼め。』

『そりや手前の事た。』

『引摺りの穀潰しめ。』

『何だと？　穀潰しだと？　ぢあや手前は極道め、卦印附、毒蟲奴。』と髪の赤いのも怒鳴つた。

『行けつたら、失せろつたらさ。』とコラブレエワは我鳴つた。

が髪の赤いのは却つて尙ほと詰め寄つて來た。するとコラブレエワは彼女の肥つた胸が襟開きの間に見えてゐる所をぐんと突いた。髪の赤いのは待構へてゐたらしく、ひらりと身を跳らして片手でコラブレエワの髪を掴み、片手で其顏を撲らうとした。がコラブレエワは其手を抑へた。マスロオワとめかし屋は赤髪の女の兩腕を抑へて引離さうとしたが、赤髪はさ

うはさせなかつた。コラブレエワの組髪をしかと握つて放さなかつた。一寸の間弛めたかと思ふと、さうでなく、拳に卷きつけて一層強く引くのであつた。コラブレエワは頭を引きつけられながらも、片手で相手を頻りと撲り、なほ相手の今一方の手に食ひ付かうとした。檻房内の女は殘らず寄つて來て二人を引き分けようと騷いだ。肺病病みさへ近くやつて來て頻りに咳をした。子供達は互に抱き合つて泣き叫んだ。

騷ぎを聞きつけて女看守は男看守をつれて入つて來た。掴み合つた二人は引分けられた。コラブレエワは白くなつた組髪を解いて、引拔かれただけの髪を取り除けた。赤髪の女は滅茶滅茶に破れた肌着の胸を共黄色い肌にしかと抑へてゐた。二人は喚き罵つて互に罪を着せ合ひ、自分は惡くないと主張し合つた。

『ちやんと譯は分つてるよ、ブランデエの爲ぢやないか。明日さう看守長さんに云ひ付けてやるよ。看守長さんにひどい目に逢つてみるがいゝ。ブランデエの匂ひがするぢやないか。』と女看守は云つた。『殘らず棄てゝおしまひ、でないとひどい罰に逢はされるよ。さアみんな自分の席に着くがいゝ、そしておとなしくしなけりやいけない。』

それでも急には靜まらなかつた。なほ暫くの間二人は罵り合ひ、何が元で掴み合つた、自分は惡くない、彼奴が惡いと、互に劣らず云ひ爭つた。やつとの事で男女の看守が出て行く事になり、女囚一同も靜まつて、めいめい寢る段になつた。放火犯の老婆は聖像の前に立つて祈禱を上げた。

『懲役女がよう二人出來上つたもんだ。』と髪の赤いのは室の反對な端の寢床の上で急に嗄れ聲を上げた、そして尙ほ選りに選つて惡口雜言を列べ立てた。

『何でえ、手前の方はまだ一通りの懲役女ぢやねえぢやねえか。』とコラブレエワも直ぐそれに答へて、なほ負けず劣らず惡口をついた。それから二人とも默つた。

『とめる者が無かつたら、もつともつと甚い目に逢はしてやるだつたに。』と髪の赤いのは又云ひ出した。するとコラブレエワも直ぐ又相手になつて惡口を叩いた。

又靜かになつた、それから又罵り合つた。そんな風に間を措いては暫く云ひ合つたが、次第に其の間の方が長くなつて、しまひにはすつかり靜まり返つた。

もう皆寢てゐた、鼾をかく者もあつた。ただ放火犯の老婆は尙ほ祈禱を續けて、聖像の前に幾度も禮拜をした。それから役僧の娘も女看守が出て行くと直ぐ起上つて、再び室内を行つたり來たりし始めた。

マスロオワも睡れなかつた、そしてもう二度も人に云はれたやうに自分は懲役女であるのかと、たゞ其事のみを考へた。前にはボオチュコワにさう云はれ、今は又髪の赤いのに罵ら

れたのである。併しマスロオワは自分をそんな女だと思ふ事は出來なかつた。彼女は隣のコラブレエワは、彼女の方へ背を向けて寢てゐたが、くるりと彼女の方へ向き返つた。

『こんなにされやうと私思つてやしなかつたわ。』とマスロオワは低い聲で云つた。『惡い事をして何ともされない者が澤山あるのに、私は何もしないで苦しまなくちやならないのだもの。』

『心配しねえが好えよ、西比利亞だつて人間が住んでらあね、西比利亞に行つたからつて、お前さん、死ぬ事はあんめえし、くよくよ考へねえが好え。』とコラブレエワは慰めた。

『そりや私、死ぬ事はないと思ふわ。でもね、怖ろしいわ、私こんな破目になつたなんて、私贅澤な暮しをしつけて來たのに。』

『神樣にや逆ふ事は出來ねえのさ。』とコラブレエワは溜息をついて云つた。『何でも神樣のお考だあね、神樣に手向ひする事は出來ねえやな。』

『そりや私知つてるわ、でもねえ、あんまりなんだもの。』

そして二人は默つた。

『ほら、聞えるかえ?』とコラブレエワは又マスロオワに囁いて、反對の端の寢床の方から聞える一種の妙な聲に注意させた。

それは髪の赤い女が我慢しいしい洩してゐる泣聲であつた。彼女は欲しくて堪らなかつたブランデエは一滴だつて飲まして貰へないで、散々に惡口されたりぶたれたりした事を思つて泣いた。それから又今迄の生涯に、罵られたり笑はれたり辱しめられたり撲り飛ばされたりしたより外には、何一つ好い目に逢はなかつた事を思つて泣いた。せめて初戀の思出を辿つて自分を慰めてみようとした。けれども夫れを思つてみると、又その戀の淺間しかつた怖ろしかつた終りを思はずにはゐられなかつた。それは戀の相手のフェオドオル・モロディオンコフといふ職工が、醉つ拂つて娛みに彼女を硫酸をひつかけたのであつた、そして彼女が痛さにのた打ち轉んで苦むのを仲間と二人で見て笑つたのである。彼女はそれを思つて自分の身が味氣なくて堪らなかつた、そして誰一人自分の云ふ事など耳にも入れて呉れないものと思つて泣いた、呻くやうに噎ぶやうに、鼻を鳴らしたり涙を飲み込んだりして、子供のやうに泣きに泣いた。

『あの人も氣の毒だわねえ。』とマスロオワは思ひやつた。

『そりや、さうさ、氣の毒ぢやあるよ。でも今少し柔順しうならねえぢやあねえ。』

翌日ネクリュウドフが目覺めて直ぐの感じは、何だか自分は今迄の自分でないといふ意識であつた、そして其の變化の何であるかを思ひやる前に、兎に角それが極く重大な良い變化である事を直覺した。「カテュウシヤ。裁判。さうだ。そして一切の虚僞と不正の終焉だ。自分は一切の眞實を云ふのだ。」

それにしても何といふ不思議な廻り合はせになつてゐるのだらう、今の彼に取つて特に重要な貴族頭の妻君マリア・ウッシリエフナよりの手紙、長いこと待ちに待つた其手紙が、やつとの事で恰も此の朝着いたのである。もはや彼女は彼と切れる事を全然承諾したのである、そして目前に迫つて居るミッシイとの結婚の幸福を祈る旨を書いて寄越したのである。

「ミッシイとの結婚か、」とネクリュウドフは自ら嘲つた。「そんな事はもういつの世の事だか。」

彼は昨日の考へを思ひ出して、彼女の良人に一切を白狀し、慚愧悔恨の意中を聞いて貰ひ、そしてどんな酬をも快く受けようと決めた昨日の考を思ひ出した。けれども今朝になつてみると、それも昨日のやうに雜作なく考へるわけには行かなかつた。「まだ何も知らないでゐるあの良人を、自分は何の爲めに不幸な男にせねばならないのだ。向うから尋ねて來たら、何でも一切白狀しよう。併し自分から行つて話す？　そりや不必要なことだ。」

ミッシイに一切の眞實を話すといふ事も、今朝になつて考へると矢張り無雜作にはやれない事であつた。彼の方からそんな事を話し出すのは、どうしても彼女を傷つける事のやうであつた。だから世間によくあるやうに、此方から云はないで向うで感付いて呉れるやうにする方がよいのだ。併し心の底では此朝、しかと決心した、もうコルチャアギン家を訪問する事は止めよう、そして譯を問はれたら有りの儘の事を云はうと。

けれどもカチュウシヤに對しては今後は最早彼は少しでも自分の態度を默つておくわけには行かないのであつた、曖昧にしておくわけには行かないのであつた。

「おれは監獄へ行かう、彼女に會つて話をしよう、そしておれの罪を許して貰はう、もし必要ならば、――いや必要どころの沙汰ではない、彼女さへ承知するならおれは彼女と結婚しよう。」と彼は思つた。

さう思ふと彼は自分ながら感激した、自分の道義的感情を滿足させる爲めには何事をも犧牲に供しよう、そして彼女と結婚しよう、するとも、何事でもする、と思つて彼は此の朝は非常に愉快に昂奮した。

もう隨分長い間、彼は今日のやうに身内に生命の躍動するのを覺えた事はなかつた。アグラフェナ・ペトロフナが入つて來ると、彼は自分乍ら解しかねる位ゐの決然たる態度で云ひ聞

かした、自分にはもはやこんな大きな邸などは不必要である、又彼女に勤めて貰ふ事も要らなくなると云つた。彼が此の大きな高價な住宅を構へてゐるのは此家で結婚をする爲めであるといふ事は、誰も口には出さないが一般に知られてゐた事であつた。それで今此住居をやめるといふ事は、何か特別な事情があるのだらうと思はれたので、アグラフェエナは愕いて彼を見つめた。

『アグラフェエナ・ペトロフナさん、私はあなたが私の爲めによく氣を付けて働いて呉れたのを感謝します。』と彼は云つた。『だが、もうこんな大きな住居や傭人達は要らないのです。だから若しあなたが私に手傳つて呉れるのなら、母の時のやうに何うか色々な道具など當分何處かへやつて貰ひませう。ナタアシヤも來てそれぞれ處置をつけて呉れるでせう。』ナタアシヤとはネクリュウドフの姉であつた。

アグラフェエナは頭を打振つた。『處置を付けるつて何樣にでございます。何だつて皆一切要るぢやございませんか。』

『いや、何も要りません、アグラフェエナ・ペトロフナさん、全く要らないんです。』とネクリュウドフは、彼女が頭を打振つて强く反對したのに答へる爲めに斯う念を押した。『コルネエ君にも何うか云つて貰ひませう、あの男の給料二ケ月分をやる事にしよう、そして今後もうあの人も要らないんだから。』

『どうしてそんな事をなさいますのでございます？　ドゥミトリイ・イワノオヰッチュ樣。』と彼女は尋ねた。『外國へでも御旅行なさいますのでございますか、それにしても鄉里の御家はちやんと別にお有りにならなくちや。』

『そんな事とはあなたも思つちやゐないのだらう、ね、アグラフェエナ・ペトロフナさん。私は外國へ旅行するんぢやない、若し旅行しなけりやならないとすれば、外國でなくて全く別な處です。』

さう云つて彼は急に顏を赤くした。

「さうだ、云はなくちやならない、」と彼は思つた、「ちつともびくびくする事はない、愚圖愚圖する事はない、誰にだつて云はなくちやならないのだ。」

『私には昨日非常に不思議な重大な事が起つたんです。あなたは思ひ出せますか、カテュウシヤと云つてマリア・イワノフナの叔母の所に居た娘をさ？』

『えゝ、えゝ、覺えてますわ。私お針を少し敎へてやりましたのでございます。』

『そのカテュウシヤが昨日陪審裁判の判決を受けたのです、そして私は陪審員の一人だつたのです。』

『まあ、そんな、何て可哀さうな。』とアグラフェナ・ペトロフナは愕き悲しんだ。『一體何をしたのでございます、あの子が？』

『人殺しの判決を受けたのです、――併し、一切私のした事です。』

『どうしてあなた様にそんな事が出來るのでございませう。あなた様は今日は本當に不思議な事ばかり仰しやるのでございますわねえ。』さう云つたアグラフェナの老いた目は一寸輝いた。彼女は彼とカテュウシャとの關係をかねて聞いた事があつたのである。

『さうです、みんな私が悪かつたのです、それで今後の方針もすつかり變へたのです。』

『そんな事で何うして方針をお變へにならなければならないのでございます。』とアグラフェナは微笑を押し隱しながら尋ねた。

『變へなくちやなりませんとも、あの娘がこんな事になつたのは、私に罪があるんだから、又彼女を救ふためには、どんな事でもしなくちやならないんです。』

『それはあなた様のお心次第でございますけれど、だつてあなた様の方に特別に罪がおありになるわけではございませんわ。そんな事は世間によくある事ではございませんか、ですから好うくお考へになつてお取計らひなさいますれば、巧く片付いて行きますし、人も直ぐ忘れてしまひませう。それは、何事もなく濟んで行くに決つて居ります。』

とアグラフェナ・ペトロフナは確りした調子で云つた。『それに、あなた様が其事を御自分の爲にしておしまひになる必要が何處にございませう。私は疾うにあの娘が墮落してるつて事は聞いて居るのでございます。それだのに今になつて誰があの子に對して罪がありませう。』

『私に罪があるのです、ですから彼女の罪を消してやるのです。』

『そんな事出來ますかしら。』

『出來ても出來ないでも私の爲ねばならない事です。だがあなたの身の今後に就いては、私は母がかねて望んでゐたやうに……。』

『いゝえ、私自分の事は思ひませんわ。お殁くなりなさいました御母様には、それはそれは御恩になつて居りますから、もう私望む事ございませんわ。片付いて居りまする姪のリザンカが疾うから私に來い來いつて云つて寄越すのでございます。でございますから御邸に御入用がございませんでしたら。姪の方へ參ります。けれども、本當にあなた様は餘りな事をなさいますではございませんか。そんな事、あなた様、世間には幾らもある事で御座いますのに。』

『いや、その事に就いての私の考は違つてゐます。どうか此家を片付ける事に手傳つて貰ひます、そして悪く思はないで下さい、私はあなたに萬事につけて御世話にばかりなりまし

た。』

不思議な事には、ネクリュウドフは自分をやくざな者忌々しい人間と思ふやうになつてからは、他人を忌々しいとは何うしても思へなくなつた。むしろ其の反對に、アグラフェナ・ペトロフナにも又コルネエにも却つて優しく丁寧にするやうになつた。コルネエにも彼は今迄自分の驕慢であつた事などを悔いて詫びようと思つた、けれども夫れはコルネエの餘りな謙遜な態度の爲めについさうも云はなかつた。

昨日と同じ馬車屋を雇つて同じ道を裁判所へと行きながら、彼は自分が今日はもう全くの別人になつてゐる事に自分乍ら愕いた。

昨日迄はミッシイとの結婚が直ぐ目前に迫つてゐる事のやうに思はれてゐたのに、今はもう全く不可能な事としか思はれないのであつた。昨日自分の立場を考へてみた時迄は、彼は自分がミッシイと結婚をすれば夫れがミッシイに取つて幸福な事は云ふ迄もないと思つてゐた。併し今日は自分はミッシイと結婚をする資格のないのみか、ミッシイの傍に寄るだけの値打もない人間としか思はれなかつた。

「おれと云ふ者がどんな人間であるか、それを彼女が知るならば、どうしておれと結婚などをしやうぞ。いつだつたつけ、彼女が何處かの紳士と親密さうにしてゐたのを、おれが咎めた事もあつたつけな。ふん。又よしんば彼女がおれと結婚するとした所で、――勿論おれがそれで幸福な筈はないが、少くともだ――それでおれは平氣で居れるだらうか、一方の監獄では何うしてゐる、明日か明後日には西比利亞へ懲役にあのカテュウシヤがやられるのではないか、それを知りながらおれがぢつとして居れるだらうか。おれの爲めに墮落のどん底へ投げ込まれたあの女は懲役に行く！　そしておれは婚禮の悦びを方々から受け、又新婚の女と一緒に挨拶に廻る！　又はあの巧々とおれに騙された貴族頭と一緒に、郡會に行つて學校問題の投票に參與する、そして蔭ではその妻と逢引の約束を取交はす！　ふん、何といふ破廉恥だ。それともあの見込のない繪畫の道を今後も辿つて行くとしようか。そんな下らない事をしておれは居られるだらうか。決して決しておれは最早そんな事をしはしない。」

さう彼は自分の心に云つて、自分で確認した自分の彼の變化を悦んだ。

「何よりも先きにあの辯護士と話さなくちやならない、そして其の決心を聞かなくちやならない。それから、――それから監獄に行つて彼女に一切の事を云はう。」

そして彼は、彼女と再び會ふ時の氣持がどうあるであらうか、彼女に一切の事を話す時は何うあるであらうか、そして悔いた心を何うして見せたらよからうか、出來る限りの事は何でもすると覺悟してゐる心の程を何うして見せたらよからうか、彼女と結婚して一切を昔の

通りに良くなしたいと思つてゐる心の中を何うして見せたらよからうか、――それを思つて彼は又もや感激に驅られ、涙が切りに湧いて來た。

三四

ネクリュウドフは裁判所に來ると、廊下で昨日の法廷取締に會つたので、昨日の被告は何處に入れられてゐるか、又その被告に會ふには誰に許可を受ければいゝかを尋ねた。法廷取締は、昨日の被告は三人共皆別々な所に入れられてゐる事、そしてあの判決が愈實行の形式を具へて宣告される迄は檢事の許可を得れば面會出來るといふ事を答へた。

『閉廷になりましたら私が檢事局へ御案内致しませう。今は檢事局にはお出でになりません。何れ濟みましてからですな。どうかもう彼方へおいで下さい。直ぐ開廷になりますので。』

ネクリュウドフは法廷取締の悄然(しょんぼり)とした樣子を氣の毒に思ひながら、其の親切な好意を謝して陪審員室へ行つた。

彼が陪審員室に入らうとすると、はや集つて居た彼以外の陪審員連は丁度法廷に出ようとする所であつた。商人は昨日のやうに矢張にこにこして朝の食事を終つて少し醉心地で居た。彼はネクリュウドフに古くからの友達のやうに挨拶した。ペエテル・ゲラッシモヰッチュも今は其のざつくばらんに打解けた、無遠慮な所が少しもネクリュウドフに不愉快な感じを與へなかつた。

ネクリュウドフは自分と昨日の被告との關係を陪審員一同に話す方がよかつたかとも思はれた。「本當はおれは昨日裁判中に起立して公然とおれの罪惡を白狀する方がよかつたなあ」と彼は思つた。

けれども他の陪審員と一緒に彼も再び法廷に臨み、昨日の通りな手續が再び始まり、『開廷！』といふ呼聲が響き、襟に金線入りの服を着けた三人の裁判官が又もや高壇に現はれ、又もや靜肅な合間(あひま)が挾まり、靠れの高い椅子に陪審員一同が着席し、憲兵や牧師が又もや入つて來たりすると、――彼は昨日と同じに白狀はしなければならないとは思つたが、此の嚴肅な調子を破る事が出來なかつた。

裁判進行の準備は昨日の通りだつた、たゞ陪審員一同の誓約式と、裁判長より陪審員一同への訓示が略されたのみであつた。

此日取扱はれたのは家宅侵入の竊盜事件であつた。拔劍の憲兵二人を護衛に付けられてゐる今日の被告は鼠色の獄衣を着た二十前後の肩巾の狹い痩せ細つた若者で、顏には血の氣がなくて土のやうな色をしてゐた。彼は唯一人ぽつんと被告席に腰かけて、入つて來る人々を

そつと見てゐた。彼が告發されたのは、今一人の仲間と共謀して或る物置小屋に入り、三ルウブル六十七コペエケンの値打ある敷物を盗み出したといふのであつた。そして彼は仲間と二人で其の敷物を引擔いで行く所を巡査に捕まつたといふ事、それから二人は直ぐ白狀して監獄に入れられたといふ事が、告訴狀に書いてあつた。仲間の男は錠前屋であつたが監獄内で死んだので、彼一人今この法廷に呼出されたのである。證據品として古い敷物が卓の上にのせてあつた。

裁判は昨日の通り證據調べ、情況吟味、犯罪の告知、證人調べ、その誓約、審問、鑑定、論告、辯難といふ具合に進行した。證人として立つた巡査は裁判長や副檢事や辯護人の問に應じて夫れ夫れ、『其通りでございます』とか、『それは私は知りません』とか、又『相違ございません』とか、活氣のない、型に嵌つた調子で答へた。巡査として彼は器械のやうに形式的であり愚直であつたか、併し被告の若者を心では氣の毒に思つて、厭々ながら事實だけを申立てゝゐる事は、その樣子でよく分つた。

今一人の證人たる古敷物の所有者で又其の物置小屋の持主である虚弱らしい氣短かの老人は、その敷物に見覺えがあるかと問はれて、如何にも厭さうにさうと答へた。その敷物を何に使ふ積りであつたか、又その敷物は非常に必要なものであるかと副檢事に尋ねられると、老人はぷりぷりして、

『忌々しい敷物ですわい、失くなつてでもしまやがりや好かつたに、あんな物が何しに要りやせうぞ。こんな面倒臭え事になるんだと知つたら、私あ訴へなんぞしねえんでしたに、それよか赤札（十ルウブルの赤色紙幣）一枚でも投げ出してやるんでしたに、いやいや、こんな審問なんぞに引張り出されねえ爲めなら、仕方ねえ、二枚でも投げ出してやつたんですぜ。此の事で私あ馬車屋に五ルウブル拂ひやしたぜ。それに病身で、ヘルニヤにも僂麻質にも惱んでる私でさあ。』

證人二人の述べる所は右の通りであつた。被告は一切白狀して罪に服した、そして捕まつた鼠か何ぞのやうにおどおどして左右を見ながら、不安らしい聲で顚末を語つた。で事件は明白であつた、けれども副檢事は昨日のやうに肩を聳やかし、擦れつ枯らしの姦惡な犯罪者に一大痛棒を喰はしてやるとでも云つたやうな機敏警拔な積りの質問をかけたりした。

彼の論告では、此の犯罪は住宅に侵入して行はれたものである、であるから被告は最も重い刑に處せられねばならない、といふのであつた。

裁判所側より選定された辯護人は、この竊盗は決して住宅に於て行はれたものではない、そして被告は其犯罪を否定する事は出來ないけれども、併し副檢事君の言のやうに此の社會

に取つて非常に危險な人物とは云へない、と辯駁した。

裁判長は今日も昨日のやうに公明正大な不偏不黨な態度を見せた、そして詳細に顚末も報告し、なほ陪審員一同に彼等が既に知つてゐる事柄、知るまいと思つても知らずにゐられない明白な事柄に對する注意を乞うた。昨日の通り中休みが幾度かあつた、休みの時は誰もよく莫を吸つた。又もや法廷取締の『開廷！』の布れがあつた、相變らず二人の憲兵は睡いのでふらふらする體を持てあましてゐた。

調べは段々と進行して、被告の過去の境遇なども分つた。彼は其父親の爲めに或る莫工場に入れられ、其處に五年を過した。五年目に其處の職工一同と工場主側との間に衝突があつて、それに係り合つて彼も罷めさせられた。無職になつた彼は、何も爲す事なく町中をぶらぶら歩き廻つて、少し許りの持金は直ぐ飲んでしまつた。彼と同樣に併し彼より早く職を失つた一人の錠前屋と、彼はある居酒屋で落合つた、そして二人でうんと飲んだ。其夜二人の醉つ拂ひは件の小屋の錠前を破つて、たゞ先きに目に觸れた物を取つた。二人は捕まり、一切を白狀し、そして牢に入れられ、裁判開始前に錠前屋は死んだ。彼だけは法廷に引出され、今は社會を脅かす危險人物として峻嚴に處罰されねばならないといふ事になつたのである。

「昨日のカテュウシヤと同樣に今此の男も危險人物といふわけなんだな！」とネクリュウドフ

は事件の進行を聽取りながら思つた。「此男も彼女も危險だと云はれてゐる。ところで我々は何うだ、我々は危險でないのか？……おれは、劣惡至極の人間たる此のおれは、彼女を墮落させた張本の此のおれは何うだ、それからおれの實際を知つてゐ乍ら輕蔑もしなければ懲罰もしないのみならず、却つて尊敬してゐる皆の者は何うだ！」

「此男が決して特別の惡人でなく、誰も皆見てゐる通り極く尋常普通な人間な事は、はつきり分つてゐるではないか、又此男が今のやうな事を爲たのは四周の事情にさせられたからではないか、それも十分分つてゐる筈ではないか。それならば、此男のやうな事をする者の出ない爲めには、こんな不幸な人物を作つて行く四圍の事情を艾除することこそ最も必要な事ではないか、それも分りきつた事ではないか。」そしてネクリュウドフは被告の怖れ戰いてゐる病弱な顏を見やりながら思ひ續けた。「此の男が貧故に村から町へ稼ぎにやられる時分に、誰か此男に同情を寄せる者があつて其貧乏を救つてやつたとしたら、こんな事にはなつてゐないのに、――。でなければ此男が町に來てからでもいゝから、十二時間の勞働の後故參の職工連に誘惑されて一緒に飲みに行かうとする時、行くな、ワアニヤ、お前の爲めにならないから、と親切に云つて呉れる者があつたとしたら、恐らく此男も行きはしなかつたらう、そして邪道に陷ちもしなかつたらう、惡い事もしなかつたらう。」

「けれども此男にさういふ同情を持つた者がゐなかつた、五年の間に唯の一人さへ居なかつた、そして此男は大切な修養時代を町中に年若い生物として過した、そして虱の湧かないやうに髪を刈り櫛を當てゝ故參の仲間等の買物の使ひ走りに日を送つた。有益な訓戒など云つて聞かせる者は一人もなかつた。むしろ其反對で、此男が町に居る間に仲間や其他の周圍から聞く事は、嘘をついたり飲んだり醉つぱらつたり、口汚く言ひ合つたり喧嘩をしたりして、放蕩無頼に身を持ち崩すのが氣の利いた若者のえらい所だと云ふのであつた。」

「そして此男が營養不良と健康に良くない勞働と酒と女に身を持崩し、疲れ弱つて睡つたやうに半ばは無意識に無感覺に、當てもなく町中をぶらつき廻つた揚句、小屋だか物置だかに分別もなく入り込み、誰も要りもしないがらくたを盗み出したといふので、それで我々は今此男をこんなにした原因を除いてやる事は氣にも留めないで、たゞ此男に嚴罰を加へて、それで事を善くして行くと云ふのか、――何といふ殘忍だ。」

さう思つて來るとネクリュウドフは最早自分の目の前に進行してゐる辯論などは耳にも入らなかつた、彼は自分の心が今前に控へてゐる深淵を臨み見て慄然とした。そして自分は今まで何うしてこれに氣付かずにゐたのであらう、又自分以外の彼等も何うして氣付かないでゐるのであらうと愕いた。

最初の休み時間が來るや否やネクリュウドフは立つて廊下に出た、そして最早再び法廷に戻るまいと思つた。あの可哀さうな男を、何となりとも氣の向くまゝにするがよからう、おれはもう此上あんな芝居に加はる事は出來ない、と思つた。

彼は檢事局が何處であるかを尋ねて其處に行つた。廷丁は今檢事は忙しいからと云つて其室に通さなかつた。けれどもネクリュウドフは夫れには耳も傾けずずんずん行つて、丁度向うからやつて來る一吏員に、自分は陪審員の一人であるが極めて緊要な或る事件に就いて是非共檢事と話をせねばならない事があるから、さう云つて取次いで貰ひ度いと賴んだ。公爵といふ稱號と立派な服裝のお蔭に彼は其旨副檢事に取次いで貰つた、そして副檢事の前に通された。副檢事は立つて彼を迎へた、併し彼が強つても話をし度いと言つた由を聞いて、その執拗さを如何にも忌々しげに思つてゐるらしかつた。

『どういふ用件です。』と副檢事は屹とした顏付で尋ねた。

『私は陪審員です、ネクリュウドフと云ひます。私は是非共昨日のマスロオワと云ふ被告と話をしなければなりません。』口早に又きつぱりとさう云つて彼は少し顏を赤くしたが、これ

で愈自分の將來を決定的に確立する第一歩を踏み出したのだと明かに意識した。

副檢事は色の黑い小柄の男で、はや白くなり出した髪を短く刈りこみ、出張つた左右の頬の下部にも密な頰髯を短く刈つて蓄へてゐた、輝いた目にはいつも落着きはなかつた。

『マスロオワですと？　あ、知つて居ります、毒殺の件で告訴されたあの女ですな。』と副檢事は靜かに云つた。『何の爲めにあなたがあの女にお會ひになりたいのです？』それからさう云つたのが餘りに突慳貪のやうな氣がしたので、なほ付け加へて、『何の爲めといふ事を私が知らないではお許しするわけには行かないのですから。』と和らげるやうに云つた。

『私の身に取つて特別に重大な或事の爲めです。』と云つてネクリュウドフはひどく顏を赤めた。

『成る程、』と云つて副檢事はネクリュウドフを仔細に見詰めた。『ところであの事件は既に判決になりましたね、ね、さうでせう。』

『さやう、四年の懲役といふ事に昨日判決されました、併しあの判決は全然不當なものです。彼女は無罪です。』

『で昨日判決された許りですから、』と副檢事は、ネクリュウドフがマスロオワを無罪と主張するのなどには少しも頓着しないかのやうに、『その判決を愈最後の形式に由つて宣告される迄は彼女はまだ未決檻に居る筈です。彼處では一定の日にだけ面會が許される事になつて居ります。彼處へお出かけになつたらいゝでせう、監獄へおいでになつたらいゝでせう、そして面會日をお尋ねになるがいゝでせう。』

『併し私は出來るだけ早く會つて話さなければならないのです。』さう云つたネクリュウドフの下顎は慄えた。彼は刻々に危急の瞬間が迫り來るのを感じた。

『どうしてそんなにまで必要なんです？』と副檢事は稍不安らしく眉を上げて尋ねた。

『罪が無いのに懲役の判決を受けたからです。一切の罪は私にあるのです。』とネクリュウドフは聲を慄はした、併し自分の云はねばならない事を云ふのだと確信してゐた。

『何うしてそんな事が？』

『私が彼女を誘惑して今のやうな境涯に墮落さしたからです。私が彼女を今のやうな身分にさへしなかつたら、今度のやうな事が彼女の身に起る譯はなかつたのです。

『併しそれが何うして彼女と御面會なさらうといふ事に關係があります、私にはまだ分りませんね。』

『關係が何うして無いでせう、私は彼女と運命を共にするのです、……彼女と結婚するのです。』と云つてネクリュウドフの目には涙が湧いた、その事を云ふ時の彼はいつもさうであつ

た。

『何ですつて？　本當にそんな？』と副檢事は愕いた。『迚も常識で考へられる事ではありませんね。私の思違ひぢや決してないと思ひますが、あなたは、あの、名門の御相續人ぢやありませんか。』と云つて副檢事は、自分が嘗てネクリュウドフに就いて聞いた事を思ひやつてみるらしかつた。その同じネクリュウドフが今彼にこんな途轍もない決心を語るのであつた。

『私が何でありませうとも、それが今お願ひする事に何の關係があるんです。』とネクリュウドフは憤激した。

『勿論それはありません。』と副檢事は、さう憤激されたからとて少しもそれを惡くなどは思はないと云つたやうな、極く微かな笑ひを隱すやうな調子で、『併しあなたのお願ひは大變普通から離れて居ります、そして正式な尋常な手續きから外れてゐるのです。』

『それで、何うなのです、許可は下さるのですか。』

『許可ですか。えゝ、それはお許しします。今直ぐ認可書を書いて上げませう。まあお掛けなさい。』

そして彼は卓に向つて椅子に腰かけ、認可書を書き始めた。

『さ、どうかお掛けなさい。』

併しネクリュウドフは立ち通した。

副檢事は書いて終ふと、それをネクリュウドフに渡しながら、切りに好奇心を募らして彼を見た。

『それから尙一つ申上げなくちやならない事は、』とネクリュウドフは、『私はもはや是以上法廷に出てゐる事は出來ないのです。』

『御存じでもありませうが、夫れでは夫れと確たる理由を御申出にならなくてはなりません。』

『その理由は、どの裁判もどの裁判も私は嘗に不必要と思ふばかりでなく、實に道義に背いてゐると思ふからです。』

『よろしい。』と副檢事は、又もや有るか無きかの微笑を浮べて云つた、その微笑は、そんな理由にもならない事を理由として申出た所で夫れは自分には新らしくも珍らしくもなく、誰も知つてゐる愚劣な滑稽な空言に過ぎないではないか、と云つてゐるやうであつた。『よろしい。併しあなたも私が檢事としてあなたに同意の出來ない事はお分りでせう、ですから私はあなたにお勸めしますが、今仰しやつた事を法廷で御申立なさい。裁判に由つて夫れも決定されるでせう、そして御申立を正當だとか不正當だとか言ひ渡されるでせう、不正當でし

たらあなたに罰が加へられるんです。で、法廷に御申出なさるがいゝ。』
『これ以上法廷に出てゐる事は出來ないと只今申上げた通りです、これ以上何もしません。』
とネクリュウドフは憤然として云つた。
『では、私は失禮します。』と云つて副檢事は頭を輕く下げた、それはこんな妙な客は一刻も早くお斷りだといふ意味をありありと見せたのであつた。
『今のは誰でした？』ネクリュウドフが行つてからはひつて來た裁判官の一人は斯う尋ねた。
『ネクリュウドフと云ふんです。そら、あれでさ、過日のクラスノペルスクの郡會で色々な途方途轍もないことを喋つたあの先生でさあ。それに又何うでせう、先生今は陪審員になつてるんですがね、昨日判決を受けた囚人の中に、人の女房だか淫賣だか　そこはまあいゝとして兎に角懲役の刑になつた女が一人ゐたのです。それに就いて先生が云ふには、その女は自分が墮落さしたのだから、これから自分は其女と結婚するんだとさ。』
『何ですと？　そんな話があるもんですか。』
『先生が直接に私に云つたんです。そして其昂奮のしかたと來たら、いやはや驚くばかりでしたね。』
『どうも今の若い者には兎角妙な變挺な所がありますね。』

『けれども今の先生はもう若くはないんですよ。』
『併し、あなたがよく云ふ、例のイワッセンコフ先生にも、隨分弱らせられましたねえ。先生どうも、喋るわ、喋るわ、てんで際限なしですからね。』
『あんな連中は本當に何うか取締らないと、全く議事妨害になります上。』

三六

ネクリュウドフは檢事局から直ぐ其足で未決囚の監獄へ行つた。けれどもマスロオワは其處ではなかつた、典獄の云ふには、西比利亞徒刑囚の皆入れられる舊の徒刑囚監獄だらうとの事であつた。
それでネクリュウドフは直ぐ其處へ行つた。矢張マスロオワは其處であつた。
未決囚の監獄から徒刑囚の監獄までの距離は大したものので、ネクリュウドフが行き着いたのは夕方近くにもなつてからであつた。彼は直ぐその怖ろしく大きい陰氣な建物の門を入つて行かうとしたが、門衛は彼を差止めた、そして鈴の綱を引いた。すると直ぐ看守が一人出て來た。ネクリュウドフは認可書を見せると、看守は典獄の許を得なくては誰だつて入れるわけには行かないと云つた。でネクリュウドフは又もや典獄の宅に行つた。そして其處の玄

關先きの階段を上る時、彼はピアノで强いてゐる或る込み入つた勇壯曲の音が戸口から洩れ出るのを耳にした。片方の目に繃帶した氣短か者らしい小間使が內から戸を開けて現はれると、ピアノの音は或る一室の方から尙ほ强く響き來て彼を愕かした。それは知れ渡つてゐるリストの史詩の一節で、彈き方は巧かつたが、或る處まで行くと直ぐぴたりと止まるのであつた。それから又直ぐ前から繰返された。ネクリュウドフは小間使に典獄は在宅かと尋ねた。

小間使は不在と答へた。

『直ぐお歸りでせうかね？』

史詩は又もやぴたりと止まり、それから又直ぐ賑やかに始まるのであつた。

『お尋ね致して參りませう。』と云つて小間使は入つた。

始まつたかと思はれた史詩の一節は、その妙域に來ない前に急にぴたりと止んだ、そして女の聲が聞えた、『直ぐは歸りませんとさうお云ひ、今日は歸りませんつてね。お客に行つてらつしやるんだよ。どうして人は私を邪魔ばかりするんだらう。』それから直ぐ又史詩は始まつた。が又直ぐ止んだ、そして椅子を後ろへ滑らす音が聞えた。氣の焦れたピアニストは、何處の誰だか知らないが時も構はず訪ねて來た人に自分でさう云つてやらうと思つたらしかつた。

血色の惡い、髮の解け亂れた、目の下の靑く半月形に暈取つた、病身らしい顏をした娘が出て來て、『お父さんは宅ぢやあないわ。』と意地惡さうに云つた。けれども立派な服裝をした若い男を見ると、彼女の樣子は直ぐ少し和らいだ。『どうぞおはひりなさい。どんな御用で？』

『私は或る女囚に面會がしたいのです。檢事の認可書を持つて居ります。』

『それは私存じませんわ。でも父は不在でございますの。ですけど何うかおはひり下さいましし。』さう云つて彼女は彼を內へ請招するやうな恰好をした。『副典獄さんにお話しなさいましし。あのお方は今お役所でございますわ、本當にそれが好うございますわ。あなた樣のお名前は？』

『いや、有難う。』とネクリュウドフは女には答へないでさう云つて、直ぐ辭して行つた。

出て行く彼の後ろに戸が閉つたかと思ふ間もなく、再び同じ陽氣な活潑な樂の音は始まつた。それは場所が場所だけに不調和でもあつたが、それを又熱心に稽古してゐる娘の病人らしい顏にも釣合はないものであつた。

外でネクリュウドフは上髭をりんと反らしてゐる年若い士官に逢つて、副典獄は何處に居るかと尋ねると、その士官が當人であつた。副典獄は認可書を讀んだが、それは未決囚監獄の事にしてあつて此の徒刑囚監獄の事となつてゐなかつたので、自分の一存では許し兼ねる

と云つた。その上又時が遲くもなつてゐるから、どうか明日來るやうにと云つた。

『明日の十時になると一般に面會が許されます。ですから明日お出でなさい、明日ですと典獄も在宅でございませう。すると一般囚人の面會室でも御面會出來ますし、典獄さへ許可しますと事務室でも出來ますから。』

そんな具合でネクリュウドフは其日は目的を達する譯に行かなかつたので、馬車を雇つて空しく家へ歸つた。マスロオワに再會するといふ思に昂奮して彼は町々を通つて行きながら、もはや裁判所の事などは少しも考へなかつたが、たゞ檢事だの其他の役人だのと言葉を交へたことを思ひ出してみた。愈々彼女との再會を計つた事、副檢事に自分の決心を云つて聞かした事、今度こそは會へやう會へやうと思つて監獄を二個所まで訪ねた事、そんな事を思ひ續けて氣が昂つて彼は長い間落ちつけなかつた 家に歸ると彼は久しく放棄(ほ)つておいた日記を取り出し、所々拾ひ讀みをした上で、そのさきに次のやうに書き加へた。

『二年このかた少しもおれは日記をつけなかつた、そしてこんな子供じみた事は決して二度と再びしないと決(き)めてゐた。けれども日記をつける事は決して子供じみた事ではない、自己の內省である、人間全部の具有してゐる神的自我の開發である。然るに此の滿二年といふものおれは全く睡つてゐた、自己の內省など、思つてみた事もなかつた。それを思はせたのは此の四月二十八日、おれが陪審員として臨席した法廷での異常な出來事である。嘗ておれに誘惑され墮落させられたカテュウシヤが、獄衣を着けて被告席に引かれて來て居てゐるのをおれは其時見たのである。法廷の奇怪な誤解と謬見とおれの手落ちは、つひに彼女を懲役と判決したのである。おれは直ぐ副檢事に逢ひ、監獄にも行つた。監獄は今日はおれに面會を許さなかつた、併しおれは彼女に面會せずにはおかない、そしておれの悔恨と慚愧の此心を見せずにはおかない、そしておれの罪を償ふためにはおれはどんな事でもする、結婚が其一方法なら夫れもする、おれは固く心を決してゐる。あゝ、神樣、手傳つて下さい。この決心を思ふとおれの心は光明に醉ふ、おれは嬉しい、嬉しい。』

三七

其夜マスロオワは長いこと睡れなかつた。横にはなつたが、目は冴え〳〵して、戸の方を眺めやつたり、役僧の娘の往つたり來たりするのを見たりしながら、樣々な事を思ひ暮らした。

自分はどんな事があらうとも決してサガレン半島の罪人などと結婚はしない、どうかして別に暮しを立てよう、何かの役人とか書記とか、又は取締とか其助手とかいふやうな男とで

も一緒にならう、と彼女は考へた。「女と云へば西比利亞では皆に歡迎される。けれども痩せない工夫が肝腎だ、痩せて了ふと、もうおしまひ」といふ事は平常彼女がよく聞いてゐた事であつた。今日法廷で辯護人が彼女を見た樣子、裁判長が彼女を見た目付き、其他彼女に逢つたすべての男、殊に何のかのと口實を設けて彼女の前を通つた男が皆彼女を見た事を今彼女は思ひ出した。朋輩のベルタが彼女を監獄に訪ねて、まだ彼女がキタイエワの家に居る時分頻りに彼女に通つて來てゐた大學生が其後又やつて來て、彼女が云々の譯で監獄に入つたと聞いて非常に氣の毒がつたと話した事も思ひ出した。又彼女はつい今しがたコラブレエワと髮の赤い女とが嗔嘩した事をも思ひやり、赤髮の女の方をもしみじみ可哀さうに思つた。白パンを買つて貰つた時パン屋が錢以上に澤山よこした深切をも思ひ出した。彼女はありとあらゆる事を思ひ出した。

たゞ併しネクリュウドフの事は思ひ出さなかつた。子供の折の事、娘時分の事、殊にネクリュウドフを戀しく思つた時の事、それだけは彼女は決して思ひ出さなかつた。それを思ふのは餘りに悲痛で堪へられないのであつた。その思出は彼女の心の底深くぢつと其儘靜かに沈んでゐるのであつた。夢にもネクリュウドフを見た事などは一度もなかつた。今日法廷でも彼女は彼を少しも夫れと知らなかつた。それは彼女が彼を最後に見た時は彼は軍服を着け

髭は鼻の下だけに生やしてゐたきりで髮も短くはあるが密に房々としてゐたのに引きかへ、今は一體にもはや青年とは見えない風采であり鬚も顎から頰の下へかけて生やしてゐると云ふ外部の變り方の爲め許りではなかつた、寧ろ主として彼女は彼の事を思つてもみないからであつた。彼女の彼に對する一切の思出は、彼が出征地より引上げて歸る際に、叔母達の家には寄らないで通り拔けて行つたあの怖ろしかつた暗の夜に、彼女はすつかり葬り去つてしまつたのであつた。

其夜までは彼女はまだ彼に捨てられたとは思つてゐなかつた、で彼が必ず寄るものと思つて望みをかけてゐた。腹の兒も少しも苦にならない許りでなく、その柔かに、時としては不意に動くやうな事があるのさへ物珍らしくもあり嬉しくもあつた。けれども其夜以來一切が變つた、生れやうといふ子供は最早彼女に取つてたゞ苦痛の種であるばかりとなつた。

彼の叔母二人も其時彼が寄る事と思つてゐた、さう云つて手紙を出しもした。しかしネクリュウドフは彼得斯堡に歸らねばならない期限がきまつてゐるからさうするわけに行かないといふ電報を打つた。それを聞いたカテュウシヤは自分が停車場まで行つて彼に逢はうと決心した。彼の乘つた列車が其驛を通るのは夜の二時であつた。カテュウシヤは女主人二人を寢かしてから、料理女の娘のマアシュカに一緒に來て呉れるやうに賴み、古い長靴を穿き肩

掛に體を包んで急いで行つた。

荒れ模様の暗い雨夜であつた。大粒な溫い雨粒がさうぐ〜しい音を立てゝ降り頻るかと思へば、また急に止んだりした。野良を行く時も足元が見分けられない位であつたが、森に入ると宛で煖爐のうちのやうに眞黑で、平生よく心得てゐたカテュウシヤも道を失つた。三分しか停車しない小さい驛なので着く前に行つて待つてゐようと思つてゐた豫定が外れ、其驛に來た時は發車の鈴の二度目が鳴つてからであつた。カテュウシヤはプラットフォムに來ると直ぐ一等車内にネクリュウドフを見付けた。車内は特別に明るくて、彼と今一人の士官とが二人向合ひに天鵞絨張の椅子にかゝつてトランプをやつてゐた。窓際の小さい卓には大きい蠟燭がずつと下まで燃え下つてゐた。ネクリュウドフは肌をしつくり引緊める乘馬ズボンを穿き白い胴着を着け椅子の手摺に馬乘りに跨り乍ら何やら笑つてゐた。彼女は彼を見付けるや否や、びしよ濡れの手で直ぐ其窓をこつこつと叩いた。其時併し三度目の鈴が鳴り、列車は其の重い圖う體でづしんと搖ぎ出した、最初は反對に後ろへ動いたが直ぐ又前へ一車宛次第に歩み出した。今一人の士官は身を起してトランプを手にしながら窓越しに此方を見た。彼女は又こつこつ叩き乍ら顏を窓際に寄せたが、はや其車は通り過ぎようとするので、彼女も窓の内へ目をやり乍ら又それに從いて行かねばならなかつた。今一人の士官は窓をあけようとしたが、何うしたのか巧く其窓があかなかつた。ネクリュウドフが代つて其窓はあけたが、其時は列車の足は可なり早くなつてゐた。そして尙ほそれが早くなると窓は又閉められた。と思ふと車掌が彼女を突き除けて列車に飛び乘つた。彼女はたぢたぢとしたが、直ぐ又プラットフォオムの濡れた床板の上を走りつづけた。プラットフォオムが急に盡きると彼女は少し用心して其處の段を降りねばならなかつたが、尙ほも從いて走つた。併しはや一等車はずつと先きに行つてしまひ、二等車が彼女の脇になつたが、それもますます迅くなつて直ぐと三等車になり、それは又迅く、瞬く間に過ぎた。それでも彼女も走りに走つた。球燈のついた最後の車輛が行つてしまふ時は、彼女は柵外の貯水槽より先きまで行つて居た。風はひゆうと彼女を襲つて頭の布片を吹き上げ、足には着物の裾を絡みつけた。布片は攫はれた、それでも彼女は走りに走つた。

『ミハイロフナの小母さん。』と小娘は息を切らしながら彼女のやうには走れないで呼びかけた。『布片が飛んぢまつてよ。』

カテュウシヤは止つた、頭をがつかり後ろへ投げやつた、そして兩手にそれを抱へて泣き出した、

『あゝ、行つちまつたわ！』

「あの人は明るい車室の中で天鵞絨の褥に腰かけて、冗談を云つたり酒を飲んだりしてゐるのに。自分は此處で泥塗れになつて、嵐の暗夜に泣いてゐる。」彼女は大地にどうと倒れ、さう思つて聲も憚らず歔欷り上げた。小娘は愕いて走り寄り、濡れた彼女の服の上から緊と抱いた。

『小母さん、歸りませう。』

「次の列車が來たら、私は線路に飛び込むわ、それで萬事お終ひさ。」さう思つたカテュウシヤは何とも娘に答へなかつた。

彼女はさう決心してゐた。けれども激しい昂奮の後でよくあるやうに、彼女は急に胎内の子供のびくびく動くのを感じた、彼女の腹に宿つた彼の子供は慄へるやうに又は延びたり縮んだりするやうに動いた。すると一時に一切の物は消えてしまつた、一刻前までは最早今後生きてはゐられないと思つた程の苦しい思、彼に對する怨恨の極み、死んでなりとも彼に思ひ知らせてやりたかつた切ない心、それ等のすべてが一時に急に消え去せてしまつた。彼女は氣を落着けて身を起し、着物を直し、小娘の渡した布片に頭を包み、そして家へ歸つた。

雨に濡れ泥に塗れ、がつかりして彼女は家に歸つたが、其日から彼女の心は最早その時までの心でなくなり、その心は彼女をつひに今の彼女となしてしまつたのであつた。怖ろしい

其夜以來、彼女はもはや神をも善をも信じなくなつた。前には自分も素より神を信じて居り、自分以外のすべての人も皆實際さう信じてゐるものと許り思つてゐた。併し其夜以來、もはや彼女は誰もそんな信仰などは持つては居ない、神だの神の掟だのと云ふ事は皆作り事である嘘である僞りである、と思ふやうになつてしまつた。彼女自らも知つてゐた愛し愛された仲の彼が、彼女を棄て、彼女の感情を弄んだのであつた。彼女の知つてゐる中で一等好い人間であつた彼がさうであつた。他のすべての者が尙一層いけない事は云ふ迄もなかつた。そして彼女の心に映ずる一切の事は事毎にそれを彼女に證明した。神信心の深かつた彼の二人の叔母は、もはや彼女が以前のやうに働けないので暇をやり、多くの女は彼女の接する男のすべてより彼女を餌に金を取り、男はあの田舍の年老いた警察官より監獄の看守に至るまで彼女をたゞ好い娯み物として貪り眺めた。誰一人として此世の中で變つた所のある者はなかつた。そして彼女の墮落生活の第二年目に少しの間同棲したあの年取つた文學者は、彼女に尙ほ一層その考を强めてやつた。卽ち彼は彼女に丁度誂へ向きに云つて聞かした、さういふ放縱生活が取りも直さず人生の全幸福である、それが詩でもあり美でもある、と。

人は皆誰も自分の爲めにのみ、自分の快樂の爲めにのみ生きてゐるのであつた、神だの善だのといふ一切の云ひ草は皆悉く嘘の皮であつた。時稀彼女の心の底に疑問が起り、何故此

世の事は何もかも皆斯う悪く出來上つてゐるのだらう、誰も互に悪い事をし合ひ而して互に苦しむやうに出來上つてゐるのだらう、それは何故だらうと思ふ事があつても、それは彼女は考へないがましであつた。氣が鬱いで來ると、彼女はいつも酒か莫に慰みを求めた、すると考へ事などは直ぐと何處かへ飛んで行つた。

三八

明けて日曜の朝の五時、監獄の女囚部の廊下に例刻の笛が鳴つた時、カテュウシヤ・マスロオワは其前に目覺めてゐたコラブレエワに起された。

「私は懲役女なのかしら。」目を擦りながらむつとする厭な空氣を吸ひつゝ、彼女はさう思つて悚然とした。寧ろ又睡つて忘却の世界に戻りたかつた。併し鬪を受ける怖ろしさに睡氣は全く消えてしまつた。彼女は身を起し、延べてゐた足を引寄せ、顏を上げて周りを見やつた。他の女達も皆起きてゐた、子供だけはまだ皆睡つてゐた。眠れぼつたい目をした居酒屋の嚊は子供達の頭の下に敷いてゐた獄衣の端を、子供達の目を覺さないやうに用心してそつと拔いた。新兵の徵發に反抗した、美人の俤を殘してゐる四十女は襤褸の襁褓を煖爐の傍に吊してゐた。その子供はひどく泣きながら、凉しい碧い目のフェドッシアに抱かれて、優しい聲で切りとあやされたり賺されたりした。肺病女は血走つた目をして手で胸を抑へ、强く咳き入り、その間々には喘ぐやうに叫びさうに息をついてゐた。今目を覺ました許りの髪の赤い女は、まだ上向きに臥たまゝで其の肥えた膝を山の形に折りながら、昨夜見た夢を高い聲で面白さうに話し出した。放火犯の老婆は又しても聖像の前に立つて、同じ言葉を繰返しながら十字を切つたり腰を屈めたりした。役僧の娘は寢床の上に身動きもせずぽかんと坐つて、ぼんやりした目で當てもなく前の方を見つめて居り、めかし屋は脂で光澤をつけた黑い髪を切りと指尖でいぢつてゐた。

廊下に引摺るやうな足音がして、錠前がかちりと鳴ると、極く短い鼠色のズボンの上に短い上衣を着た意地悪さうな顏の二人の男囚が入つて來て、悪臭を放つてゐる汚物の桶を天秤棒にさして擔いで行つた。女囚は皆廊下に出て、水管の栓をあけて顏など洗つた。其處で又髪の赤い女は別の檻房から出て來た女囚と喧嘩をやり出した。悪口雜言に次いで怒鳴り合ひ喚き合ひ、それから罪の塗りつけ合ひをした。

『分檻にはひりたいのか。』と看守は怒鳴つて、赤い髪の女の肪ぎつた太つた背中をうんと突いた。女は廊下に倒れさうにのめつた。『お前の聲は二度と聞き度くない。』

『まあ、此人は巫山戯てばつかりゐるんだよ、爺の癖に。』と髪の赤い女は戯れられたと思

つてさう云つた。

『さ、さ、早くしないか、禮拜所へ行くんだぞ。』

カテュウシヤはまだ髪に櫛をあてないでゐたが、はや典獄は下役を連れてやつて來た。

『檢査だ。』と看守は叫んだ。

又別の檻房からも女囚の一團が出て來た。そして囚人一同は二列になつて廊下に整列した。後列の女囚等は片手を前列の者の肩の上に差出さねばならなかつた。そして一同は數へられた。

檢査が濟むと女看守が來て、皆を禮拜所へ率いて行つた。

カテュウシヤとフェドッシアは、あらゆる檻房から出て來た百人以上の女の列の中程になつて並んで行つた。皆白い胴衣に白い上衣を着け、頭にも白布を纏うてゐた、たゞ其中の幾人かゞ色のある各自の服をつけてゐた。それは皆良人に從いて子供をつれて西比利亞へ行かうといふ女であつた。長い階段も行列で一ぱいに埋まつた。草履樣の囚人靴の柔い音、べちやべちやと喋り合ふ聲、時としてはげらげらと笑ふ聲などが聞えた。ある曲り角の前でカテュウシヤは敵のボオチュコワが毒々しい顏をしてずつと前になつて行つてるのを見つけ、フェドッシアに夫れと云つて指した。皆が階段を降りてしまふと皆急に話をやめ、空に十字を切り上

半身を少し屈め、そしてまだ空つぽな金色眩しい禮拜所の開いてゐる戸口から入つた。女囚の席は右側なので、皆其方へ靜かに雪崩れ行き、犇々と詰め寄つて整列した。それから鼠色の獄衣を着けた普通の男囚の群と、西比利亞徒刑の確定した男囚の群とが引續いて入つて來た。彼等は高い咳拂ひなどしながら左側より中央へかけてぎつしり詰め合つて並んで立つた。唱歌隊の席の上には、既に西比利亞徒刑の宣告を受けて頭の半分を剃られてゐるのが鎖の音をぢやらぢやら鳴らして一方に立つて居り、剃られても居らず鎖をつけられてもゐない豫審中の男囚は其の反對の側に並んでゐた。

この監獄禮拜所はつい其頃或る富裕な一商人の寄進して建てたもので、その費用は數萬ルウブルに上り、金色眩しく七彩目を奪ふといふやうな粧飾であつた。

暫くの間は堂内しんと靜まつて、ただ咳拂ひの音や子供の泣聲や稀に鎖の音や、そんなのが聞える許りであつた。が急に堂内の囚人一同が少し動搖めくかと思ふと、左右へ少し避けて眞中に道を一筋あけ、その道よりつかつかと典獄が入つて來て堂の中央に立止つた。

それから禮拜が始まつた。

ネクリュウドウは朝早く家を出て馬車に乘つた。まだ或る裏通りには妙な調子をけつて牛乳を賣り歩いてゐる百姓男の聲が聞える時刻であつた、『やあ、牛乳や、牛乳。』

最初の春雨が昨夜溫かに降つて、芝地は一面に綠の色を增し、方々の庭の白樺には鈍い綠の澤が出てクロカンバや白楊は香氣のある其長い葉をひろげてゐた。どの家もどの店も二重窓の外部の戸は取り除けられ、內側のは綺麗に洗はれてゐた。ネクリュウドフが通つて行つた古物市には多勢の人が其處に設けられた店々の邊りにうようよしてゐた、長靴を小披に抱へ熨斗をかけたズボン下や胴着などを肩に打掛けた襤褸服の男などが幾らも行つたり來たりしてゐた。

飲食店の邊りには、今日が日曜で休みといふので工場から出て來た男達は上衣もさつぱりしたのを着け靴もぴかぴか磨き立てたのを穿いてどやどやして居り、明るい色の絹布を頭にかけ大きい玻璃玉の飾りのついた外套を着た若い娘や年增女なども混つてゐた。巡査は黃色い革紐に拳銃を吊して處々に見張つてゐた。散歩道には芝地の上にも道の上にも子供や犬が走り廻つて遊び、ベンチには子守娘などが腰かけて何やら互に面白さうに話し合つたり笑たりしてゐた。

左の片側は猶ほ蔭になつてゐるが眞中ははや乾いてゐる冷い往來を、重さうな荷車や輕快な貸馬車や又は軌道馬車などが引續き絕えず通つた。方々より響いて來る鐘の音に空氣は微妙に慄ひ漂うた。鐘の音は皆今監獄で始まつたと同じやうな禮拜祈禱に人々を呼び集めてゐるのであつた。ネクリュウドフの雇つて乘つた馬車は監獄の直ぐ前までは行かず、監獄へ行く道に曲る所までで止つた。

其處から監獄の門まで百歩許りの間は、大抵包みなどを小脇に抱へた男や女がぞろぞろ歩いて行つた。右側には低い木造の家が三四軒並び、左側には看板を揭げた二階家があつた。大きい石造の監獄の建物は其のさきに蹲つてゐて、まだ一人の面會人をも入れないのであつた。銃を持つた見張が其前をぶらぶら歩きながら、門に近づきさうな者があると、荒らかに怒鳴りつけてゐた。見張の邊りと向き合つた右側の木造の家の入口の傍には正服の看守が一冊の帳簿を手にして腰掛けにかゝつてゐた。面會人は皆その看守の前に行つて面會したいと思ふ囚人の名を云ふ事になつて居り、その看守はそれを帳簿に記入するのであつた。ネクリュウドフも其前に行つてカテュウシヤ・マスロオワといふ名を云つた。看守は其通り書き留めた。

『なぜまだ誰も入れないんです？』とネクリュウドフは尋ねた。

『禮拜式があるんです。濟めば直ぐ入つていゝんです。』

ネクリュウドフは待つてゐる面會人の群の方へ行つて混つた。襤褸を着てくちやくちやになつた帽子を被り靴下も穿かずに破れ靴をつゝかけた、顏一ぱいに赤い筋の走つてゐる男が一人、群から離れて監獄の建物の方へ近寄つて行つた。

『何處へ潛り込む積りだッ？』と銃を持つた見張は怒鳴りつけた。

『何だと、何を怒鳴りやがるんでい。』襤褸の男は少しもびくつかず、再び群の方へ戻りながら、『まだ入れねえてんなら待つてやらあな。だが彼奴大將みてえに氣取りやがつて、叱り付けたりなんかしやがるぢやねえか。』

一群は襤褸の男に味方してどつと笑つた。

面會人は男も女も大部分粗末な服裝をしてゐて、襤褸を着てゐる者も少くはなかつた。併し稀には相當立派にしてゐる者もあつて、ネクリュウドフの傍には服も綺麗だし顏にも丁寧に剃刀を當てた頰の赤い體格のいゝ男が一人、洗濯物を入れてるらしい包みを矢張り小脇へ抱へて立つてゐた。ネクリュウドフは其男に其處には初めて來たのかと尋ねると、いや自分は毎日曜に來るのだと其男は答へた。それからネクリュウドフと其男は何やかと話し合つた。その男は或る銀行の門衛であるが、詐欺取財で刑に落ちた兄の爲めに來るのであつた。人の好い其男は自分の身の上話しや兄の事を殘らず話して、それからネクリュウドフの事も尋ねようとしたが、丁度其時逞しい黑馬を着けた護謨輪の輕らかな馬車が一人の大學生と面紗をかけた一人の貴婦人とを乘せて着いたので、ネクリュウドフ等の注意は其方へ奪はれた。その大學生は大きい包みを兩手に抱へてネクリュウドフの前に來て、施し物をするには何うすればよいかを尋ねた。包みの中には白パンを入れてあつた。

『私の許嫁の望みで來たのですが、』と其大學生は云つた、『これが許嫁です、それに此人の兩親も囚人等に白パンを施して來るやうにと勸めますものですから。』

『私も初めて來たのですから、一向樣子を知りません、しかしあの男に尋ねたら其手續も分るでせう。』と云つてネクリュウドフは帳簿を持つて小さい腰掛にかゝつてゐる看守を指した。

さう云つてゐる時、覗き窓のついた太きい鐵の扉はあいた。すると看守が又一人其處に出て來て、內へ入つて行く面會人を『一、二、三、……十六、十七、……』と數へて行つた。內側にも又看守が一人居て、これも亦次の門を入つて行く面會人を矢張り數へるのであつたが、これは一人一人を手で觸つて數を檢べ乍ら內へ入れた、又一人でも襤房の方へなど行かないやうに又囚人の一人でも紛れて外へ出ないやうにと氣を配つてさうするのであつた。彼はネクリュウドフをも矢張りさうして入れて、其の誰であつたかを素より見もしなかつたが、

さうされた瞬間はネクリュウドフも憤然とした。併し直ぐ又自分は何をしに來たかを思つて、さう腹を立てたりした事を恥ぢた。

其處を入つて最初の溜りは鐵格子をつけた小さい窓の幾つもある大きな室であつた。「溜り」と名の付いてゐる其室の壁の凹みには十字架上の基督を大きく描いだのがあるのをネクリュウドフは見た。

ネクリュウドフは後より來る面會人をも先きにやり、自分は種々錯綜した氣持を味はひ乍ら遲々として歩いて行つた。斯うした處に入れられてゐる本當な惡人どもの怖ろしさも思ひやられ、又昨日裁判所で見た若者や、カテュウシヤのやうな正直な者共が可哀さうにもあり、又目の前に迫つてゐる再會を思へば胸もわくわくして波立ち騷いだ。其室の出端れの所で一人の看守が何とか云つたけれども、ネクリュウドフは思に耽つてゐてそれと氣がつかず、面會人の大多數が流れ行く方へ從いて、女囚部へ行かねばならなかつたのを男囚部へ行つてしまつた。

そして後は自分が一等後になつて、面會室としてある間に入つた。其處に入るや否や直ぐ彼の愕いたのは、耳を襲するやうな數百人のわいわい喚ぶ聲であつた。彼はずつと近く傍へ行つて、面會人等が皆、砂糖に集つた蠅のやうに金網に縋りついてゐるのを見て、始めて譯

が分つた。其處は天井から床へ窓を後ろにして二重に金網を張り詰めて三つに區切つてあつて、網と網との中間を看守等が行つたり來たりし、其の彼方に囚人が出て來て居り、面會人は此方に犇々と詰めかけてゐるのであつた。網と網との間は三アルシン位の幅であるから、此方から彼方へ網の目を潜らして何か物をやる事などは勿論出來ないが、それよりも近視の者などは彼方の顏をもよく見分ける事が出來なかつた。話を交へるのも非常に困難であつた。だから誰でも聲を限りに叫ばなければならないのであつた。それで彼方の網の向うから、此方の網の此方からとは、男、女、父親、母親、息子、娘といふやうな樣々な顏が犇犇と網に縋りついて、云ひ度い見度い心々を互に出來るだけ傳へ合はうと苛つてゐた。併し誰も自分の云ふのを出來るだけよく彼方に聞かせ度いと思ひ、隣の者や後ろの者も亦矢張りさう思ふので、多勢の聲が入雜りもするし、又他人より高く高くと叫び出すのであつた。ネクリュウドフが入つて來がけに直ぐ愕いた叫び聲はさうして起るのであつた。で取交はされてゐる話が何であるやら、分るわけはなかつた、せいぜい顏色や樣子で、相互に何を云はうと思つてゐるのか、又相互が何ういふ心持をしてゐるかを讀み合ふ外はなかつた。

ネクリュウドフの直ぐ傍に立つてゐた布を頭にかけた老婆は網に縋りついて顎をがくがく慄はしてゐた。頭を半分だけ剃られた顏色の惡い若い男に何やら叫びかけてゐるのだつた

が、その男は眉を釣り上げたり額に皺を寄せたりして一心に聞いてゐた。老婆の隣には袖無しの上衣を着た小男が、網の彼方から又よく似た病者らしい顔に白くなりかゝつた髯を生やした囚人の何か云ふのに、頭を振りながら耳を傾けてゐた。その少し先きには襤褸を着た男が何やら切りと顔つき手つきをして高い聲で叫んだり笑つたりした。その傍には良い綿服を着せた子供を抱へた女が床に蹲んで泣いてゐた。それは向ひ側に頭を半分剃られ手に鎖をつけて來てゐる年の老つた良人を初めて訪ねて來たものらしかつた。先程ネクリュウドフと話を交へた銀行の門衛は其女の上から、頭の禿げて目の光つた囚人に聲の限りを出して何やら叫びかけてゐた。

ネクリュウドフは五分計りも其處に居て、一種異様な悲痛の感に襲はれ、又自分の身も心もがつかりしたやうな、自分は此世と共に潰滅して終ひさうな弱々しさを覺えた。船がひどく揺れ傾いた時のやうな氣持と同じであつた。

「だがおれは訪ねて來ただけの事をせねばならない。」と彼は自ら勵ました。「どうすればいいのだ？」

彼は誰か役人もがなと邊りを見廻すと、監獄吏の正服を着て上髭を生やした痩せぎすの小男が面會人の後ろの邊りを歩いてゐたので、彼は其傍へ歩み寄つて、努めて丁寧な調子を出して尋ねた。

『もしもし、少しお尋ね致します。女囚は何處に居るんでございませう、何處で面會が出來るでございませう。』

『ぢやああなたは女囚部へ行らつしやるお積りなんでせう。』

『さうです、私は或る女囚に面會したいのです。』とネクリュウドフは同樣に努めて丁寧な調子で答へた。

『では、あの溜りの室であなたは然う仰しやらなくちやならなかつたんです。女囚の誰にお會ひなさるのですか。』

『カタリイナ・マスロオワに面會したいのです。』

『あの判決のあつた女にですか。』

『さうです、彼女は一昨日判決になりました。』とネクリュウドフは、自分に好意を持つて呉れてゐるらしい其獄吏の氣分を少しでも傷けないやうに丁寧に下手から出て答へた。

『女囚部の方へおいでになりますのでしたら、どうか此方の方へ』と監獄吏もネクリュウドフの服裝其他の恰好を見て、尊敬を拂はねばならない人物として扱つた。それで何かの徽章をつけた髯のある下役を顧み、『シドロフ君、此のお方を女囚部の方へ御案内して呉れ給へ。』

『畏りました。』

その時金網の方で人の心を刺すやうな泣聲がした。

一切がネクリュウドフに取つては奇怪であつた、併し一番奇怪なのは彼自身が監獄吏等に對して從順であり殊に感謝の心持を持つて居なければならない事であつた。

下役の獄吏はネクリュウドフを案内して男囚部の面會室から廊下へ出、其の直ぐ彼方の戸口を入つて女囚部面會室へ連れて行つた。

四〇

其室も矢張り金網で三つに區切りがしてあつたが、全體の面積はずつと狹く、其處に來てゐる女囚も面會人も少かつた。叫び喚く聲は男囚部のそれと變りがなかつた。金網と金網との間を獄吏が往つたり來たりしてゐるのも男囚部と同樣であつた。たゞ此處では其獄吏は女看守で、袖には笹緣のついた又青い腕章のついた制服を着て、男看守の緊めてゐると同じ帶をしてゐた。男囚部の面會室と同樣に二重の金網の兩側には矢張り犇々と詰めかけてゐた、一方には種々樣々な服裝をした町の者や田舍者らしい男女の面會人が押しかけて居り、他の方には女囚が白い服や又は各自の色のある着物を着て縋りついて居た。金網一ぱいに人が着いてゐた。爪立つて他人の頭の上から相手の話を聞いてゐるのもあれば、床に坐つて向うへ云ひやつてゐるのもあつた。

女囚の中で一番人目に着いたのは髪の非常に多いジプシイの女が頭の布も引きずらして其の蓬々と亂れ縮れた髪も其儘にして、其處の殆ど中央の柱に凭りかゝりながら消魂しい聲を出してゐるのであつた。それは青い長い上衣に帶を低く強く締めた同じジプシイの男に矢鱈と顏つき手つきをして叫びかけて話してゐたのである。ジプシイの男の傍には兵卒が一人蹲つて向うの女囚の一人と話してゐたが、立上つて金網に寄りかゝつた。それは樹皮の靴を穿いた髭のブロンドな田舍出の若い男で、涙の溢れさうなのを無理に耐へてゐるらしく顏は赤くなつてゐた。その男を凉しい碧い目で懷しげに見ながら話してゐるのは髪のブロンドな可愛い女囚で、此の男女は取りも直さずフェドッシアと其夫であつた。その隣には襤褸を着た男が顏の大きい髪を振り亂した女と話して居り、それから尙ほ二人の女と一人の男と、又一人の男とが面會に來て居り、その四人の彼方には何れにも一人づゝの女囚が話相手をしてゐた。そしてカテュウシヤは其中には見えなかつた。

だが夫等の女囚等の後ろに今一人女囚が來てゐた。ネクリュウドフはそれが彼女だと直ぐ思つた、そして心臟が急にどきどきと鳴り、喉はつかへて氣がわくわくした。決定的な刹那

が來たのである。彼は金網の傍へ寄つて行つた、そして直ぐカテュウシヤをそれと見わけた。カテュウシヤは目の碧いフェドッシアの後ろに立つて、フェドッシアの云ふのを微笑しながら聞いてゐた。カテュウシヤは昨日のやうに獄衣をば着ずに、白い上衣の腰の所をきちんと帶で締めて、胸にふつくりと巧く丸みを持たせてゐた。頭の布の下からは、法廷で見た時のやうに黑い縮れたほつれ髪が少し溢れてゐた。

「愈決定的な場合になつた。」とネクリュウドフは思つた。「おれはどんなに呼びかけたらいゝか、それとも彼女は自分から寄つて來るかも知れない。」

しかし彼女は自ら寄つては來なかつた。彼女は朋輩のクララが面會に來るのを待つてゐた、風采の立派な其男が自分に會ひに來たとは思つてゐなかつたのである。

『誰にあなたは御面會なさりますのでございます？』と、往つたり來たりしてゐた女看守はネクリュウドフの傍近く寄つて來て尋ねた。

『カタリイナ・マスロオワにですが。』とネクリュウドフはやつとの思ひで夫れだけ口から出した。

『マスロオワ、お前に面會人があるよ。』と女看守は中を繼いでやつた。

カテュウシヤは云はれた方を見返つて頭を上げ、胸を柔かに張り出しながら、ネクリュウドフのよく知つてゐるいそいそした調子で、二人の百姓女の囚人の間の金網の前に來た。そしてネクリュウドフを見たが、誰とも見分けえないので切りに訝り怪しんだ。

けれども兎に角彼の立派な服裝で判斷して富裕な男と觀て取つたので、直ぐ嬌とした。

『どんな御用？』と彼女は持前の少し斜視の目をした顏を微笑みながら金網に近く寄せて尋ねた。

『私は、あの……』

ネクリュウドフは「お前」と呼びかけたがいいか「あなた」と云ふ方がいゝか分らなかつた、で一寸迷つたが「あなた」と呼ぶ事に決めた。そして平常の聲より高くは云はなかつた。『私はあなたに會ひに……私は……。』

『お前おれに齒痛みなんか話さねえでもいいや。』とネクリュウドフの傍で襤褸を着た男は怒鳴つた。『云つたな分つたけえ。』

『屹度死ぬんだよ。大變弱つてゐるんだからねえ。』と女囚側の方からも誰だか叫んだ。

カテュウシヤはネクリュウドフが何を云つてゐるのやら少しも聞き分けえなかつた、併し彼が何やらさう頻りと云つてゐる顏付は、彼女がもはや思ふまいと決めてゐた過去を彼女に思ひ出させた。微笑は彼女の顏に消えた、額には悲しみの皺が寄つた。

『ちつとも分りませんわ、何をあなたが仰しやつてるんだか。』と彼女は目を屢叩いて叫んだ、その額は尙一層曇つた。

『私が來たのは、あなたに……』さう云つて彼は尙ほ云ひ續けようと思つた、私は私の爲ねばならない事を何でもする、私は悔いてゐる、償ひをする……。

けれどもさう思ふより口く涙が目に一ぱいになつて來た。胸には切なさが込み上げて來て言葉も出なかつた。彼は金網に縋りついて何も云はずに耐へた、泣きはしないぞと懸命に努力した。

『手前が丈夫だと知つてりやあ、會ひになんぞ來るんぢやなかつたんだあ。』と叫ぶ聲がした。

『信心を忘れちやいけないよ。私は何も知らないんだからね。』と答へる女囚の聲もあつた。

カテュウシャはネクリュウドフの感激に氣付くと、それは又カテュウシャ自身にも傳はつた。彼女の目は熱し、肥えた白い頰には血が上つた。けれども其顏付は嚴として、少しの柔かさをも示さなかつた。

『何だか見覺えがあるやうですけれど、あなたは私知りません。』

『私はお前に許して貰ひ度い爲めに來た。』彼は高い聲で一律に、諳誦した文句を繰返すやうに云つた。

そして彼は恥かしくなつて四邊をちらりと見廻した。けれども自分は斯うも恥しいのだなと思ふと、どんな恥をも忍ばねばならない身は、どれだけでも尙ほ恥かしい思をするのが當然だと自ら叱つて、なほ高い聲で云ひ續けた。

『私は惡かつた、何とも言へないさもしい行ひをした、許してお呉れ。』

彼女は身動きもせず、ぢつとネクリュウドフを見つめた。

彼は尙ほ云ひ續ける事は出來なかつた、網より少し退り乍ら込み上げ込み上げする胸を抑へた。

ネクリュウドフに好意を持つて彼を女囚部へ案内させてやつた典獄が、此時此處に入つて來た。彼はネクリュウドフが金網の傍に立つてゐないのを見て、その會ひ度いといふ女囚は來てゐるのに、何故話をしないのかを尋ねた。ネクリュウドフは鼻をくんと鳴らして努めて平靜を裝ひながら答へた。

『どうも金網越しには私は話が出來ないのです、云ふ事が少しも分りません。』

典獄は考へた。

『では、一寸の間あの女囚を出させませう。マリア・カルロフナさん。』と彼は女看守に呼び

かけた。『マスロオワを出して下さい。』

四一

間もなく横の戸口からカテュウシヤは出て來た。つかつかとネクリュウドフの前にやつて來て立止り彼の顏を見上げた。一昨日と同樣に黑い縮れたほつれ毛は頭かけの布の下からこぼれてゐた。その蒼白い肥えた可愛らしい顏はすつかり平靜に落着いてゐた、垂れた睫毛の下に見えてゐる黑い目だけが妙な輝きを持つてゐた。

『此處でお話なさつていゝんです。』と副典獄が云つて、自分は少し退つた。ネクリュウドフは壁際にある腰掛の方へ行つた。

カテュウシヤは自分も腰掛けていゝかと尋ねるかのやうに副典獄を見てから、どうも合點の行かないらしく兩肩をちよいと上げたが、ネクリュウドフに續いて其腰掛についた。

『私に許すといふ事は、そりやあなたに出來にくいでせう、それは私もさうだらうと思ひます。』とネクリュウドフは口を切つた、が又涙が出て來たので途切らした。『けれども、昔の事を再び善くする事は出來ないとしても、私は私に出來る一切の事をする積りです。ですからどうぞ私に……。』

『どうして私をお見出しになりまして？』と彼女は彼の言葉には頓着なく尋ねた。

『あゝ、神樣、私はどうすればよいか、敎へて下さい。』とネクリュウドフは心で叫びながら、如何にも變つて見える彼女の顏をしげしげと見やつた。

『一昨日私は陪審員だつたのです、あなたに判決が下される時。あなたは私を知らなかつたのですか。』

『知りませんでした。どうして私があなたを見分けませう。又私、あなた方の方を見も致しませんでしたもの。』

『子供が生れたのですか。』さう尋ねて彼は自ら顏の熱るのを感じた。

『あの時直ぐ死くなりまして仕合せでしたのよ。』と彼女は手短かに險のある調子で云つて目を外らした。

『何、何ですと？　どうしてです？』

『當人の私が病氣をしましてね、死にさうでございましたの。』と彼女は目は上げないで答へた。

『私の叔母達があなたに暇をやつたといふのは、どういふ譯でした？』

『子供持ちの女中を誰が家に置きませう。叔母さん達がそれとお氣付きになりますと、すぐ

私は追出されてしまひましたの。それを何のかのと何うして云へませう。もう私何も想ひ出しやしませんのよ、すつかり忘れちまつたわ。それで一切お終ひになりましたのよ。』

『否、お終ひではありません。私は此の儘にしては置けません。私は私の罪を償ふのです。』

『何も償ふ事はない事よ。あつた事はあつた事、それで過ぎてしまつてゐますわ。』と云つて彼女は彼を蕩し込みさうな微笑を浮べてちらと彼を見た、そんな態度など彼は素より露程も思ひ設けてはゐなかつた。

彼女は今迄彼に會はうとは、殊に今こんな處で會はうとは夢にも思つてゐなかつた、それで今出し抜けに彼の姿を見ると、彼女はすつかり面喰つた、そして再び決して思ふまいときめてゐた事を、我ともなしに思ひ出した。最初の瞬間には彼女はあの美しかつた新たな感情と思想との世界を朧げながら思ひ出した、その世界は愛し愛された元氣の潑溂たる高潔な青年によつて見せて貰つたものであつた。それから其の夢のやうに美しかつた幸福に直ぐ續いて起つた青年の不思議な程の殘酷と、以來絶えず嘗めて來た苦惱と屈辱の連鎖を思ひ出した。そんな事を思ひ出して彼女は或る重苦しい氣持に襲はれた。併し彼女はそんな氣持を何うする事も出來ないので、昨日も今日も何日も慣れて居る心の持方に直ぐ戻つて、そんな思出など追拂ひ、無恥放縱な醜惡な生活の靄の中へと歸るのであつた。今自分の目の前に立つてゐる紳士を、最初の瞬間には彼女は自分の嘗て愛したあの高潔な立派な青年と結び付けて考へやうとした、併しさうする事は餘りに堪へ難い悲痛であつたので、それは直ぐやめた。髭にも香油を塗つて立派な服裝をしてゐる營養佳良な眼前の紳士は、彼女に取つては最早彼女が既に忘れた昔のネクリュウドフ其人ではなく、純然たる世間一般の富裕な遊蕩兒の一人に過ぎなかつた。彼等は氣の向くまゝに彼女等を買ひに來、彼女等は出來るだけ彼等の金を絞り取つてさへやればそれでいゝのであつた。それで彼女は今彼に蕩し込みさうな微笑を見せたのであつた。

彼女は默つて考へた、どう彼を利用してやらうか、何を何うして卷き上げてやらうかと考へた。

『みんな過ぎちやつた事だわ。』と彼女は云つた。『私、懲役の判決を受けましてよ。』

懲役といふ怖ろしい言葉を使つてみると、彼女の脣は我ながら慄へた。

『私は疾くに……私は疾くに信じてゐた、あなたに罪はないと信じてゐた。』とネクリュウドフは云つた。

『勿論よ、罪はないわ。私、女泥棒とでもいふのか知ら、それとも女强盜ででもあるのか知ら。私達の間では、何でも辯護人次第だつて云つてますわ。私もお願ひの書き付けを出すが

いゝとかつて、さう人が云つてますの。でも大變お金がかゝるさうですものねえ。』
『勿論、どんな事があらうとも控訴はしますとも。』とネクリュウドフは云つた。『或る辯護士に頼んで置きました。』
『でも良い辯護人を雇ふにはお金を惜しんぢや駄目ですつてね。』
『私は出來るだけの事は何んでもします。』
沈默が間に挾まつた。
又もや彼女は以前のやうに蕩し込みさうな微笑を見せた。『私あなたに、ちつと許り……お錢をね、御都合がおよろしかつたら、少しでいゝんですから、……十ルウブルでも、』
『えゝ、えゝ、上げるとも。』ネクリュウドフはどぎまぎしてさう云ひながら紙入を手に取つた。
カテュウシヤは往つたり來たりしてゐる典獄をちらと素早く見た。
『あの役人が此方を見てる時はいけないことよ、見てない時下さいな。でないと取上げられるからさ。』
ネクリュウドフは典獄が向うへ向いた時直ぐ紙入を取り出したが、又直ぐ此方を向いたので彼女に渡す事は出來なかつた、で紙入より出した十ルウブル證券を自分の掌に握り隱した。
「あゝもう此の女は死んでしまつてゐるのか。」とネクリュウドフは思つた、さう思ひながら彼は彼女の嘗ては又なく愛らしかつた、今は併しがつがつとさもしい根性の輝きを見せてゐる黑い目を持つた嫌に脹れぼつたい顏をつくづくと見た。彼女の其目は唯もう典獄と銀行券を持つてゐる彼の手とを見てゐる許りであつた。一寸の間ネクリュウドフは何うしやうかと迷つた。
今迄の自分の過去と今後自分が辿り行かうとする未來との間の溝渠の餘りに大きいのに呆れて、迚も本當に新生涯に入る事は自分には出來ないと、再び自棄の生活に戻らうとした一昨夜の束の間の思が、此時又ネクリュウドフの心にちよいと頭を擡げた。「誰もする事だ、お前ばかりぢやないではないか。」と云つた囁きが、此時又彼の心に囁いた。此女に對して何うしなければならないかなどゝ考へるよりも、さうしたら今後どんな自分の迷惑を作り出すかも知れない事を考へるがよい、そして目前の氣の利いた必要なやり方を考へるがよい、とさう彼に思はせやうとした。
「お前は此女を今更どうしやうといふんだ、もう駄目になつてしまつてゐる女ぢやないか。」と其囁きは彼に云つた。「自分の首に石を縛りつけると云ふもんだぜ、そして他人の爲めにな

どなれないやうに、自分で自分に邪魔をすると云ふもんだぜ。」

ではおれは此女に金をやつて、金のみならず持つてゐる財産は何でもいゝ、それを遣つて綺麗に分れやうか、そして此の厄介な事から永久に離れて終はうか、それで解決をつけてしまはうか、と彼は思つた。

けれども彼は今が極く重大な時であるのを感じた、自分の魂が或る重大な分岐點にあるのを知つた、自分の內部生活が或る秤の上に載つてゐる事を意識した。その秤は何方に傾くともなくぐらついてゐて、極く微少な力でも其片方に加へれば其方に傾くやうになつてゐた。彼は一昨日心の中に感じ得た神を呼びかけて其助けを求めた。神は彼の願ひを容れた。彼は一切殘らずカテュウシヤに云ふ事に決心した。

『カテュウシヤ、私はお前に許して貰ふ爲めに來た。けれどもお前は今許すとも、又今後許すともまだ云つて呉れない。』と彼は急に親密な昔の語法に移つて云つた。

彼女は彼の云ふ事には耳を貸さず、銀行券を持つてゐる彼の手と典獄の方とを交る交る見た。典獄が彼方へ向くと、彼女は素早く彼の方へ手を差し延べて、銀行券を取つて自分の帶の間に入れた。

『妙な事を仰しやるわねえ。』と彼女は云つた、それはネクリュウドフには嘲笑としか思はれ

なかつた。

ネクリュウドフは彼女の心の奥に彼に烈しく敵對する何物かが萠した事を感じた、それは彼女が自分の今の生活を彼に對して防ぎ護らうとするものであつた、そして夫れは彼が彼女の心の中に進み入らうと迫るのを遮り止めた。

けれども不思議な事には彼は其爲めに押戻されはせず、却て一種特異な新たな力によつて惹付けられるのを覺えた。彼は彼女を精神的に覺醒させねばならない自分の義務を意識した。それが又とない困難である事は彼は知つた、併し恰も其困難が彼に尙ほ強く其義務を行はせねば止まないものであつた。まだ彼は今迄に彼女に對して一度も今のやうな感じを持つた事はなかつた、他の何事に對しても斯樣な熱烈な誠意を持つた事はなかつた、卽ち何等毫末の利己的な分子も含まれない感想であつた。彼は彼女が今迄の生涯を捨てゝ覺醒して呉れる事より外には、そして昔のカテュウシヤになつて呉れる事より外には、何一つ彼女に願はないのであつた。

『カテュウシヤ、お前は何故そんなに云ふのだ。私はお前といふ人をようく知つてゐる、お前がパノオヲに居た時分は……。』

けれどもカテュウシヤは服しなかつた、服しやうとも思はなかつた。

『そんな昔の事なんぞ考へて何うしませう。』さう冷かに彼女は云つた。その額には尙一層の曇りが出た。

『私は昔の事を云ふよ、カテュウシヤ、そして私の罪を償はうと思ふ。』そして自分は彼女と結婚しようと思ふ事を云はうとしたが、其時彼女の視線と行會つて、それに或る怖ろしい荒々しく惡虐な色を讀んだ彼は、それ以上云ふ事が出來なかつた。

面會人は歸りかけた。典獄はネクリュウドフの傍へやつて來て、面會時間が過ぎたと云つた。カテュウシヤは立上つて、連れて行かれるのを待つた。

『さよなら。私はあなたにまだ色々云はねばならない事がある、しかし今はもう此の通り時が過ぎたから、それは出來ない。』と云つてネクリュウドフは手を差し出した。『又來ます。』

『もう何もすつかり仰しやつたやうですけどねえ。』

彼女は彼に手を差し延べた、併し自分から握りはしなかつた。

『否、まだです。ですから又面會出來るやうに工夫します、そして夫れも何處か斯う話の十分出來る處で。そして私は或る極く大切な事を云はなくちやならないのです。』

『いゝわ、ぢやあ來らつしやい。』と彼女は客に媚びる時の微笑を湛へて云つた。

『あなたは私に取つては妹よりも近しいものです。』とネクリュウドフは云つた。

『變だわねえ。』と云つて彼女は頭を振つた、そして金網の彼方へ行つてしまつた。

四二

ネクリュウドフはカテュウシヤが自分と會つて自分を夫れと見知つたならば、そして自分が彼女の爲めに盡さうと思つてゐる事を聞いたならば、そして自分の悔いを述べるのを聞いたならば、嘸悅ぶであらう、どんなに感激するであらう、そして直ぐ昔のカテュウシヤになるであらう、と思ひ設けてゐた。併し彼女が昔のカテュウシヤでなく矢張り今のマスロオワに過ぎないのを見た彼の悲みは、決して些少なものではなかつた。彼は愕きもした、呆れもした、怖れもした。

殊に彼が最も悲痛に堪へないのは、彼女が少しも自分の境涯を恥と思つてゐない事であつた、寧ろそれに滿足してそれを殆ど誇とさへしてゐるらしい事であつた。併し實はそれは不思議でも何でもなかつた。人は誰でも自分の仕事をして行くには、其仕事が此世に有用であり良い事であるといふ信念を有つてゐる事が肝要であつた。であるからどんな境涯にある者とても、さういふ信念の持てるやうな人生觀を自分で組立てゝゐる事は間違のない事實であつた。

強盜や人殺しが自分の行爲を良いと公言しない以上、それを恥ぢてゐるのは當然だとは、一般に信ぜられてゐる事であるが、事實は正反對である。人は誰でも、境遇によつて又は先天的な罪惡性によつて良からぬ境涯に落ちて居やうとも、その境涯を良いと思はれるやうな人生觀を作る事は、それは誤りではあるが事實なのである。そして其人生觀を擁護して行く爲めに、人は皆本能的に同類の社會に身を置くのである、其處には人生について又人生に於ける自分等の地位に就いて彼等自らの作つた見解が勢力を逞くしてゐるのである。我々は泥棒が泥棒仲間で其の狡智を自慢し合ふのを不思議に思ひ、又は人殺しが人殺し仲間で其殘酷を誇り合ふのを怪しむが、併しそれは泥棒や人殺しの社會が極めて限られたものであり、そして我々が其の社會以外に居るからに過ぎないのである。

マスロオワも亦それと同樣な人生觀處世觀を築いてゐたのである。懲役の刑は課せられたが、それに拘らず彼女は自分を良いと思ふ事も出來、尙ほ又同じ境涯の多くの者に對して誇る事さへも出來る人生觀を自分で築いたのである。

その人生觀とは外でもなかつた、男といふ男は、老いも、若いも、學生も、將軍も、學者も、無學者も、一人の例外なく皆たゞ誘惑に富む女と交る事によつて最大の幸福を得るのである。よしんば中には其樣な事ではない他の何事かに興味を持つて從事してゐるかのやうに見える者があらうとも、さういふ男等とても實を質せばたゞさういふ女性に對してのみ最大の慾望を持つてゐるのである。そして最も誘惑に富む女性の一人たる彼女は、さういふ慾望を滿足させてやる事も出來れば刎ね付けてやる事も出來るのである、であるから彼女は大切な緊要な人間である、といふ人生觀であつた。彼女の今迄の全生涯も又今の生涯も彼女には其人生觀の確實な所以を常に證明して居るのであつた。

過去の十年間に彼女が到る處で見た男といふ男は、ネクリュウドフや田舍の警察官から監獄の看守に到るまで、皆彼女によつて慾望の滿足を得たいと思ふ者許りであつた。さうでない男には彼女は今迄會つた事がなかつた、會つても氣が付かなかつた。であるから此全世界はたゞ彼女を手に入れ度がつてゐる男達で一ぱいになつてゐるものと彼女は思つてゐた。さういふ男達は四方八方より絕えず彼女を覘つて居て、嘘でも暴力でも金づくでも策略でも何でも構はずありとあらゆる手段を講じて、彼女を所有にしてやらうとかゝつてゐる筈であつた。

マスロオワは人生をさうしたものだと思つてゐた、そして其人生觀に從へば當に彼女はさういふ人生に於ける劣等なものでない許りか、實に極めて優秀な重要な一員なのであつた。彼女は其人生觀を此世に於ける何物よりも尊重してゐた、尊重せざるを得なかつた。彼女に

して若し其人生觀を變更するならば、それは彼女自ら此世に於ける自分の存在の意義を失ふ所以であつた、彼女が其意義を十分に認めてゐるのは前の人生觀があればこそであつた。そして彼女は其意義を失はない爲めに自分と同じ考を持つてゐる者共の社會に本能的に伍してゐた。それで彼女がネクリュウドフの爲めに或る他の世界へ連れ行かれさうに感じた時は自づと反抗心を覺えた、其の新しい世界では彼女自ら安心し滿足して居られる人生の地位が失はれねばならないのであつた。その理由から彼女は幼時の一切の記憶を葬つてゐた、ネクリュウドフに對する樂しい思出を心の奥深く閉ぢ込めてしまつてゐた。夫等の思出一切は彼女の今の人生觀には少しも適合しないものであつた、夫れ故それ等の思出は彼女の記憶から全然消え去つてしまつてゐた、否、記憶のどん底に其の儘そつと祕つてあつた、しかも堅く鎖して塗り固めて密封してあつた、蜂が幼蟲を巢の中に閉ぢ込め塗り塞いで、蜂全體の生活の邪魔をされないやうにして置いたのと變りはなかつた。それ故今のネクリュウドフは彼女が昔純潔な愛を注いで戀した其人ではなく、宜しく彼女に金を捲き上げらる可き富裕な一紳士に過ぎなかつた、その紳士に對するやり方は他の多くの男を操すやり方の外にはなかつた。

「いや、おれは一番大切な事を云ふ事が出來なかつた、」とネクリュウドフは押し合ひへし合ひしながら出口の方へ行きつゝ考へた。「結婚したいと思つてゐる事を云はなかつたのだ、しかし此次に云はう、此次には云ふとも。」

出口に立つてゐる看守は又もや數へながら面會人を出した、どうかして面會人でない者が出て行つたり、面會人があとに殘つたりしないやうに檢めて出してやつた。ネクリュウドフは又もや背中をこつりと叩かれたが、もはや彼はそれを憤らなかつた、それに氣付きもしなかつた。

四三

ネクリュウドフは外部の生活を變更しようと思つた、今の大きな住ひも止め、雇人達には暇をやり、自分は旅宿に下宿住ひをしようと思つた。併しアグラフェナ・ペトロフナが切りに反對して、冬にならない前にそんな風に暮し方を變へるのは決して分別のある仕事でないといふ事、夏中は家は貸さうとしても借り手がないといふ事、又何處にもしろ何うせ住つては居なければならず、加之家具調度の置場もなくてはならないといふ事などを並べ立てた。ネクリュウドフは學生時代のやうな簡易な生活をしたいと思つたが、さう反對されてみると強ひて無理にもといふ譯にも行かず、萬事從來の通りで行くやうになつた。そして土用干し

の忙しい騒々しい仕事が始まつて、種々樣々の衣類やら敷物類やら毛皮類やらが、日に干されたり叩かれたりした。執事も其手傳ひも料理女も又コルネエまでも一緒に働いた。

一度も着た事も使つた事もない古い種々の制服だの古風な毛皮製の道具だのが最初に取出されて、綱にかけて外氣に曝され、それから敷物とか種々の家具とかゞ運び出された。そして執事や其手傳ひは袖をまくり上げて其の逞しい腕つぶしを出しながら、ぽとぽと打いたり拂つたりした。そこら中にナフタリンの匂ひがぷんぷんした。ネクリュウドフは中庭などを歩いたり窓から眺めたりしながら、今は全く不用な其樣な古い調度や衣類が長い年月の間に夫れ程澤山に蓄つてゐたのに愕いた。使はうと思つても使ひ途のない其樣な道具一切は、たゞアグラフェエナ・ペトロフナやコルネエや執事や其手傳ひの男や又は料理女などに仕事をさせる爲めに用がある位ゐなものであつた。

「さうだ、カテュウシャの事がまだ決定しない間は、どんな具合に暮し方を變更せねばならないか、今の中はまだ分らない。」とネクリュウドフは思つた。「彼女が放免になるか、それとも徒刑になるか、從つておれも亦此地に止つて居るか西比利亞へ行くか、其の決定によつて萬事變更せねばならないのだ。」

約束の日に彼は辯護士のファナアリンを訪ねた。ファナアリンの家は立派な構へで、大きな裝飾用の鉢植だの大仰な窓掛だの其他高價な種々のしつらへが目につき、如何にも勞せずして俄か分限者になつた者の住ひに適はしかつた。ネクリュウドフは控室で既に彼より前に來て順番の廻り來るのを待つてゐる依頼人の多くに會つた。繪入雜誌類を備へてある卓に着いて、大抵心配さうな顏をしてゐる者許りだつた。

高い書記用卓に着いてゐた助手の男は、ネクリュウドフをそれと見分けてつかつかと彼の前に進み寄つて挨拶をし、では直ぐ主人に通じますと云つて向うへ行つた。がその助手が未だ事務室の入口まで行かない中に其入口の戸は彼方から開いて、ファナアリンと今一人どつぐつと骨ばつた男との高い聲が聞えた。骨ばつた其男は赤ら顏に濃い上髭を生やして極く新しい服を着てゐたが、決して若い年ではなかつた。二人の樣子恰好は、今何か極く金儲けになる併し餘り感服は出來ない何事かを相談したらしいそれであつた。

『そりやあなた御自身が惡いのさ。』とファナアリンは微笑しながら云つた。

『私だつて極樂には行きたいんですとも、だが彼方がやらないんですからな。』

『まあ、まあ、ぢきに分る事でさあ。』

そして二人は不自然な無理な笑ひ方をした。

『やあ、公爵でしたか、さ、どうぞ御はいり下さい。』とファナアリンはネクリュウドフを見

ると直ぐ云つた。それから彼は出て行く商人に尙ほ一度領いて、そしてネクリュウドフを事務室に請じた。

『さ、どうぞ煙草でも。』と云つて辯護士はネクリュウドフと向き合つて腰をかけながら、今さきの商人との有利い話を思つてにこにこした。

『有り難う。私はマスロオワの件で參上したのです。』

『え、え、直ぐお話致しませう。――何といふ甚い成金連だらう。』と彼は今出て行つた男等の事を云つて、『今出て行つたあの男を御覽になつたでせうがね。彼奴は大約千二百萬の身代なんですよ、それであつて碌な話はしませんからね。そんな身代であり乍ら、二十三十の目腐れ金でも取れるとなると、彼奴、嚙みついても取るつて奴でしてねえ。』

「彼奴も碌な話をしないだらうが、君もあんまり碌な話をする方でもなささうぢやないか。」とネクリュウドフは思つた。ネクリュウドフはファナアリンが、私は今控室に待つてゐる多くの依頼人や其他の者に對しては普通の冷かな態度を取りますが、あなたとは一味同心ですから、とでも云ひさうな鐵面皮な調子をするのを又なく惡み嫌つた。

『本當に彼奴に忌々しい時間潰しをさせられました。やつと追つ拂つて氣が清々した。』と辯護士は直ぐ用件に取りかゝらなかつた辯解をするかのやうに云つた上で、『で、御用件に移りませう。一件書類は殘らず篤と讀んでみました、併しツルゲニエフが云つた通り、どうも感服出來ませんね。味方の辯護人が何分にもまだ嘴の黃色い困つた先生で、控訴の理由を皆取り逃がしてしまつてゐるんですよ。』

『それで、あなたは何うする事にきめて下さいました。』

『一寸お待ち下さい。――あのね、』と辯護士は其時入つて來た助手に向き直つて、『それは私が云つた通りだと云つて呉れ給へ。それで向うがさうすれば好し、さうしないなら爲ないで放つとくがいゝさ。とさう云つて呉れ給へな。』

『しないつて云ふんですよ。』

『ぢやあ放つとくだけさ。』と辯護士は雜作無げに云つたが、つい今さきまでにこにこしてゐた其顏は直ぐ曇つて意地惡さうになつた。

『何うも實に斯うですからね。辯護士といふ者は資本無しで碌な仕事もしないで金ばかり取ると世間で云つてるんですからね、やりきれませんよ。』とファナアリンは再び以前の親切めいた表情を出す事を努めながら、『私が前に一度或る破産した商人を不當な告訴に對して辯護してやつた事があるのです、だもんですから又方々から賴みに來るんですよ。所が斯樣な事は皆非常に骨の折れる事でしてね。誰でしたつけ、ある文學者の云つたやうに、私どもが

書く書類には全く心血が濺がれてゐるんですよ。――それはまあ何うでもいゝが、時に、あなたの事件ですがね、と云ふよりもあなたが興味を持つておゐでになる例の事件ですがね。』と彼は云ひ續けた、『どうも拙い事にして行つたものです。確かな控訴理由が一つも無いんです。それでも試つてみられない事はありません。で私は斯の通り書いたんです。』

さう云つて彼は一枚の紙を取り出して讀んで聞かした、形式的な定り文句などは早速と通過して、重要な箇所に力を入れて次のやうに、

『……元老院控訴部ニ控訴ス、云々。評決ニ基ヅキ決定シタル所ヲ見ルニ云々、マスロオワハ商人スメルコフヲ毒藥ニ依テ殺害セシ者トシテ、刑法一千四百五十四條云々ヲ以テ懲役ノ判決ヲ受ケ、云々……。』

そして彼は一寸息を繼いだ。彼は如何にも自分の精神的勞作に多大の感興と滿足とを覺えて自ら耳を傾けるらしかつた。

『……「此ノ判決ハ重大ナル爭訟上ノ錯誤ニ基ヅクモノニシテ、當然變更セラレザル可カラザルモノナリ。」……と彼は力を籠め、……「第一、スメルコフノ內臟解剖ニ關スル報告書ノ朗讀ハ裁判進行中ニ於テ裁判長ニ依リ中止セラレタリ。」……此點が一つです。』

『それは檢事の側から其朗讀は請求したのですよ。』とネクリュウドフは怪しんだ。

『構ひません、辯護人側からもそれを請求出來た筈ですからね。』

『それは請求したつて何の役にも立たなかつたんです。』

『それでも控訴の一理由になるんですよ。それから、……「第二、辯護人ハマスロオワノ性格ヲ說明センガ爲メニ其ノ墮落ノ內部的諸原因ヲ述ベントセシニ、裁判長ハ事件ニ直接關係ナシトノ理由ヲ以テ之ヲ中止セシメタリ。サレドモ裁判中ニ被告ノ性格ヲ說明シ殊ニ其ノ道德觀ヲ開陳スルハ極メテ重要ノ事ニシテ、元老院ノ再參訓示セシ所タルノミナラズ、刑ヲ正當ニ測定センガ爲メニモ決シテ等閑ニ附ス可カラザル所トス。」……これが第二ですよ。』と彼はネクリュウドフの顏を見て云つた。

『さうです、そこはあの辯護人は非常に拙く云ひました、何を云つてるのだか少しも分らない位でした。』とネクリュウドフは尙ほ一層怪しんだ。

『無論あの頓馬な先生が氣の利いた事を云へる筈はありません。』とファナアリンは笑つて云つた。『しかし是が又一理由ですからね。それから、なほ先きに行きますが……「第三、裁判長ハ刑事訴訟法第八百一條ノ趣旨ヲ顧ミズ、其結論ニ於テ今回ノ犯罪ガ如何ナル法律上ノ諸要點ヨリ構成サルヽカヲ陪審員ニ陳述スル事ヲ閑却シ、又陪審員ハマスロオワガ商人スメルコフニ毒ヲ與ヘタル事ヲ承認スルモ、被告ニ殺害ノ意志ナカリシガ故ニ殺害ノ有罪ナル所以

ヲ認メザル旨主張スベキ權利アル事ヲ云フヲ怠リタリ。故ニ被告ハ刑事上ノ犯罪者トシテ謗メラルベキモノニアラズ、單ニ不注意ノ廉ヲ以テ譴責サルベキモノニシテ、其不注意ニヨリ商人スメルコフノ死ヲ惹起シタルモノトス。」……ね、どうです、これが一番肝腎な點ですよ。』

『さうです、其點は我々自身が承知してゐなくちやならなかつた事なんです。我々の失策でした。』

『それから最後に第四です、』と辯護士は讀み續けた……「陪審員ハマスロオワノ犯罪ニ關スルノ法廷諮問ニ對シ明白ナル矛盾ヲ包有スル答書ヲ與ヘタリ。マスロオワノ嫌疑ハ純然タル金品盗取ノ目的ヲ以テ豫メ謀リテスメルコフヲ毒殺シタルモノニシテ、其目的ヲ以テ殺害ノ唯一動機ト認ムト云フニ係レリ。然ルニ陪審員ハ其答書ニ於テマスロオワノ金品盗取ノ目的ヲ否定シ又其ノ盗取ニ關與セシ事ヲ否定シタリ、コレ明カニ被告ノ殺害目的ヲ否定セントシタルモノニシテ、タダ裁判長ノ結論ノ不完全ニ基キタル錯誤ノ結果、答書中ニ其否定ヲ適切明白ナル方法ヲ以テ表示セザリシモノニ過ギズ。故ニ斯ノ如キ答書ハ刑事訴訟法第八百八條及ビ同八百十六條ヲ對體ニ適用スベキモノニシテ、裁判長ハ陪審員ノ錯誤ヲ指摘說明シ、以テ被告ノ犯罪ヲ再審ニ附セザルベカラザルモノナリ。」……』とファナアリンは讀んだ。

『でも裁判長は何うして其の注意をしなかつたでせう？』

『さあ、どうしてですか、私も知りたいと思ひますがね。』とファナアリンは笑ひながら云つた。

『その誤謬は元老院で訂正しさうなものですね。』

『それは其時の係官次第です。ですから尙ほ斯う書き足して置くんです。……「斯ノ如キ決定ハマスロオワヲ犯罪者トシテ處罰スルノ權能ヲ法廷ニ與ヘズ、之ニ刑法第七百七十一條ヲ適用スルハ是レ明カニ我ガ刑法ノ根本精神ヲ無視スルモノトス。以上ノ理由ニヨリ刑事訴訟法第九百九條、同第九百十條、同第九百十二條及ビ同九百二十八條ニ基ク變改ヲ要請シ、云々、本件ヲ同裁判所ノ他部ニ於テ再審ニ附セシメラレン事ヲ乞フモノナリ。云々。」……と斯うです。これで云へる限りの事は云ひ盡したのです。併し有態な話がですね、どうも成功の見込は極く少いと云はねばなりませんよ。併し一切元老院控訴部のやり方次第です。ですから貴緣がお有りでしたら、其方に運動なさるといゝですねえ。』

『少しはあります。』

『ぢやあ、早く其方をなさるがいゝんです。でないと元老院の連中、もう直ぐ休暇の旅行に出かけますからね、すると尙ほ三ケ月お待ちにならなければなりませんよ。そして若し此方

法で不成功でしたら、最後の手段としては皇帝陛下に上奏するんですね。さうなりましたら又其の上奏文を書く御相談を致しませうよ。』

『有り難うございます。すると報酬は？』

『助手が控訴狀の淨書を差上げますから、そして其際何もかも申上げるでせうから。』

『尙ほ一つお尋ねしたい事があります。私は今の事件の被告に面會する爲めに檢事の認可書を貰つたんですが、一定の面會日以外に、又面會所以外で面會するには尙ほ縣知事の許可が必要だと監獄で聞きました。矢張りさうでせうか。』

『えゝ、そりやさうでせう。ところが今は縣知事は不在ですよ、それで副知事が代つて事務を執つてゐますがね、これが又無類飛切の愚物でしてね、なか〳〵あなたの御用に立ちますまいよ。』

『マスレンニコフでせう。』

『さうです。』

『あの男は私知つてるんです。』さう云つてネクリュウドフは立上らうとした。

その時急ぎ足に入つて來たのは鼻の低い、骨張つた、顏色の黃ばんだ小柄の非常な醜婦であつた。それは辯護士の妻君であつたが、妻君自らは其の醜貌を少しもそれとは思つてゐないらしかつた。鮮かな黃色だとか又は綠だとかの絹や天鵞絨の服を着て、それに笹緣を飾つた並外れな派手な服裝で、薄い髪を矢鱈に細工して捲き縮らしてゐた。そしてさも得意さうにはひつて來たが、尙ほ又絹裏のフロックを着て白のネクタイをはめた顏色の土のやうなひよろ長い男がにやにや笑ひながら續いて入つて來た。それは或る文士で、ネクリュウドフは一度何處かで見た覺えがあつた。

『アナトオル、』と女は辯護士に呼びかけた、『私の室にいらつしやいな。セミオン・イワノオキッチュさんがいらしつたのよ、此の方が御自作の詩をお歌ひになりますのよ、あなたも何かガルシンの物でも是非歌はなくつちやいけないわ。』

ネクリュウドフは出て行かうとすると、辯護士の妻君は良人に何か囁いたかと思ふと、直ぐネクリュドフの方へ向いて、

『あの、御免下さいまし、公爵樣、私あなた樣をようく存じ上げて居りますわ、ですから紹介は要りませんね。――どうか私どものマティネエにお出下さいまし、大變面白うございますわ。アナトオルの朗讀もそりや巧いんですよ。』

『どうも、御寬の通りでしてね、私には實に多種多樣な用事があんですよ。』とファナアリンは微笑みながら云つて、妙な恰好に手を妻の方へ延ばしつゝ、こんな魅力の强い女にはどう

も逆ふわけには行かないとでも云ひさうな具合を見せた。

ネクリュウドフは極く丁寧な調子で其の招待の禮を云つて、併し自分は何うも餘暇がないからと斷つた。そして扣室の方へ行つた。

『何て變屈な男でせうねえ。』と辯護士の妻君は彼が其室を出てから云つた。

助手は應接室でネクリュウドフに控訴狀の淨書を渡し、謝金はと問はれて千ルウブルとファナアリンよりきめられてゐる旨を答へた。それから尙ほ、アナトオル・ペトロヰッチュ・ファナアリンは一體ならこんな事件は取扱はないのであるが、公爵の爲めだから特に例外として引受けたといふ事を代つて云ひ添へた。

『此の控訴狀には誰が署名すればいゝんです。』とネクリュウドフは尋ねた。

『本當は被告自身でするのが一等いゝんです、併しそれが面倒でしたら、被告に全權の委托を得た上で、先生が署名なさつてもいゝんです。』

『いや、私が監獄へ行かう、そして本人の署名を得て來ませう。』さう云つてネクリュウドフは、規定の面會日より前に又カテュウシヤに逢へる機會の出來たのを悅んだ。

起床の例刻になると監獄の廊下には看守の吹き鳴らす號笛の音が響き渡つた。錠前の音ががちやがちや鳴り、各檻房の戸口が開き、跣足で踏む柔かい音だの汚物取りの木皮の靴音だのが聞えた。汚物取りは鼻持ちのならぬ惡臭を其邊中に漲らせながら廊下を拔けて運んで行つた。男囚も女囚も顏や手を洗つたり、着物を着更へたりした。檢査が濟むと皆熱い湯を持つて來て茶を入れた。

茶を飲みながら何の檻房でも、其日笞刑を受ける事になつてゐる二人の男囚の話がはずんだ。其中の一人は多少教育のある若い男で、ワッシリエフと云ひ、何處かの商店員をしてゐたのであるが、或時嫉妬の發作に驅られて自分の戀人を打殺したのである。彼の同檻房の仲間は彼がきさくで鷹揚で、而して役人等に對して少しもびくびくしないので、皆彼を愛してゐた。そして彼は法律の心得があるので、滅多な事は役人等にもさせなかつた。三週間許り前に或る看守が汚物取りに、不圖した粗忽で汚い汁を新らしい制服にひつかけられたので、其汚物取りを打擲した事があつた。ワッシリエフは汚物取りの肩を持つて、囚人だといつて撲つていゝといふ規則はないと抗辯した。

『規則か、規則はおれが貴樣に見せてやらあ。』と云つて其看守は、なほ烈しくワッシリエフに毒づいた。ワッシリエフも負けないで罵つた。看守は彼を撲り倒さうとした、と彼は看守

の其手をぎゆつと握つて、三分間許りも放さなかつた、そしてぐいと捻ぢつけて戸口から外へ突き出した。看守は上役に訴へた、典獄はワッシリエフを分檻に投り込めと命じた。

分檻といふのは一列に隣り合つて並んでゐる暗い室で、外から閉められるやうになつてゐた。寒い暗い其分檻には、寝床も腰掛も臺もなく、其内に打ち込まれた囚人は穢い床の上にどろりと寝てゐるより外はなかつた。すると分檻の名物の鼠は其邊中をたゞ走り廻る許りでなく、その圖々しさは、暗い中とてパンを攫はれまいと思つても駄目なくらゐであつた。手に持つてゐるのを攫つて行くこともあれば、其人が動かないでゐると其のからだをさへ襲撃することが珍しくなかつた。ワッシリエフは自分は悪くないから分檻などには入らないと云つた、けれども暴力で連れ行かれた。彼は振り捥ぎつて飛び退かうとした、他からも二人の囚人が彼に加勢して彼を放してやらうとした。すると看守が又多勢やつて來た、中には腕力の強いので有名なペトロフと云ふのもゐた。三人の囚人は打負けて分檻に投り込まれ、知事には一揆が起つたかのやうな上申が行つた。すると書付けが下つて來て、ワッシリエフと今一人のネポオムニャシュチイといふ浮浪者とは、各三十づゝの笞を喰ふべく命令が傳へられたのである。

その處罰は女囚部の面會室で行はれるといふ事になつた。

前日の夕方頃になると其事は監獄内の皆の者に知れ渡つたのである。どの檻房でも頻りと其話がはずんだ。

コラブレエワとめかし屋とフェドッシアとマスロオワの四人は、ブランデエを飲んで眞赤になつた顔をして一隅に陣取つてゐた。今はマスロオワは金があるのでブランデエに不自由はせず、仲間の誰彼にも惜氣もなく振舞つてやつた。四人は茶を飲みながら矢張り同じ今日の罰の話をし合つた。

『あの男が騒動をやらかしたんだつて？』とコラブレエワはワッシリエフナを辯護しながら、茶を飲む一方に小さい堅い砂糖の塊りを強い齒で嚙み割つた。『仲間の爲めに肩を持つてやつたきりぢやねえか、だのに其爲めに打擲られなけあならねえだつて？ へん。』

『あの人いゝ人だわねえ。』長い組髪を下げてゐるフェドッシアはさう云つた。フェドッシアは茶瓶の載つてゐる寝床の向うに腰かけて居た。

『お前さん、これはあのお方に云つつけてやるがいゝさ、ねえ、ミハイロフナ。』と踏切番はマスロオワの方へ向いて行つた。「あのお方」とは無論ネクリュウドフを指したのである。

『云つつけてやるわ。あの人、何でも私の云ふ事は聞いて呉れるんだから。』と云つてマスロオワは自慢さうに微笑した。

『だつて何日あの人來るの？　もう面會室の方へどやどや行くやうだわ。まあ、怖いこと！』

とフェドッシアは深い息をして云つた。

『私、一度ね、田舍で百姓が一人撲られるのを見た事があるんだよ。私が舅にね、村長さんの所へ使にやられたんさ、で、私其處に行つてみるとだあれ、其處で私見たんだよ……。』と踏切番は長い話をし出した。

面會室に近い廊下の方に足音や聲がしたので、その話は途切れた。

女達は皆默つた、そして耳を欹てた。

『引つ張つて行つたわ、屹度、あの野郎ども。罰當り奴が。』とめかし屋も憤つた。『どんなに撲るんだか分りやしない。看守の野郎ども、あの男の爲めに自儘な事が出來ないもんだから、ふだんあの男を憎んでゐたんだものね。』

面會室の方の騷々しさは程なく靜まつて、又しんとなつた。それで踏切番は又話の絲口を拾つて、自分が其處の物置で百姓の撲られるのを見た時の怖ろしかつた事、撲られて叫ぶのを聞いた時は自分の心は顚倒りさうであつた事を話した。めかし屋はシュチェグロフが矢つ張り笞で撲られた事があるが、痛いのいの字も口に出さなかつたといふ話をした。

それからフェドッシアは茶の道具を片付け、コラブレエワと踏切番は又縫ひ物を取り上げた。マスロオワは寢床に腰かけ、兩手を膝にのせて何をするでもなく、ぼんやりして退屈がつた。横になつて眠らうかと思つた、と女看守が彼女に誰か面會人があるから事務室まで來るやうにと呼びに來た。

『私共の事を其お方樣に是非とも云うて呉んなせえよ。』と年の老つたメンショオワは、マスロオワが水銀箔の半分は脫落した鏡に向つて肩掛の具合を直してゐるのに向いて云つた。

『火を放けたのは私共でねえからねえ、彼奴が自分で爲た事ですよ、あの惡黨めが爲た事ですよ、そりや人足もちやんと見てたんだからね。だから其お方が悴のミトリイに逢つてやつて呉んなさるやうに、お前さんからお願えして呉んなせえ。ミトリイが何にも一切お話ししますだよ、事をわけて瞭然と話しますだよ。それだにさ、何にも知んねえ私共は此樣な處に打ち込まれて、あの惡黨の野郎は他人の女房を盜んだ上に、大きい顏して贅澤三昧をきめ込んでやがる。何ちふ事たろ。』

『本當に良くねえ事たなあ。』とコラブレエワも味方した。

『云ひますとも、屹度云つてやるわ。』とマスロオワは引受けて、『でも、今ほんのちよつぴり頂戴な、元氣をつけるからさ。』と目を屢叩きながらコラブレエワに云つた。

コラブレエワは猪口に半分だけ注いでやると、マスロオワはぐいと一息に飲み干し、口を

拭きながら陽氣な調子になつて『元氣がついた、』と又繰返した。そして頭を振り振り笑ひ乍ら女看守の後に從いて廊下へ出た。

四五

ネクリュウドフは長らく玄關に待たされた。

監獄に來ると彼は入口際の鈴を鳴らし、見張の看守に檢事の認可書を示した。

『誰に御用ですか。』

『女囚のマスロオワに會ひたいのです。』

『今は駄目です、典獄が忙しがつて居られます。』

『事務室でですか。』

『いえ、此方で、面會室でです。』さう云つた看守の樣子を何だか落着のないものとネクリュウドフは見た。

『今日は面會日なんですか。』

『いえ、少し別な仕事がありまして。』

『では典獄さんに面會したいが何うすればいゝんです。』

『もう直ぐ來られます、その上でお話なさるがいゝでせう。少しの間お待ち下さい。』

その時側面の戸口から、金筋の肩章を光らしたかつかと熱つた顏をした曹長が入つて來た。曹長は煙草の煙に燻つた其上髭を看守の方へ向けながら嚴として云つた。

『何故此處に人を通した。』

『典獄が此處に居られると私が聞いたんです。』と云つてネクリュウドフは、その曹長も不安さうにしてゐるのを怪しんだ。

奥の戸があいて、ペトロフが亦すつかり昂奮して入つて來た。

『今度は懲々しやがつたらう。』とペトロフは曹長に云つた。曹長はペトロフに目でネクリュウドフが來てゐる事を注意した。するとペトロフは直ぐ口を噤んだ、そして顏を曇らして後ろの戸口から出て行つてしまつた。

「今度は懲々しやがつたらう？　何故皆が斯う昂奮してゐるのだらう。曹長はなぜ今の男に妙な目くばせをしたのだらう。」とネクリュウドフは考へた。

『此處では待つてゐられないでせう。どうぞ事務室の方へお出で下さい。』と曹長はネクリュウドフに云つたので、云はれるまゝにネクリュウドフは其處を出て行かうとすると、丁度其時奥の戸口から典獄がはひつて來た。典獄は下役一同より尙一層強く昂奮してゐた。はつは

と息さへ切らしてゐた。彼はネクリュウドフを見ると、看守に向つて、

『フェドオトフ、第五檻房のマスロオワを事務室に呼んで來い。』と云ひつけた。

『さ、どうぞ彼方へ。』と云つて典獄はネクリュウドフを案内して行つた。二人は傾斜の急な階段を登つて小さい室に入つた。其室には窓が一つと卓が一つ、それに椅子が二三脚具へてあつた。

『あゝ、あゝ、どうも辛い役目だ。』さう云つて典獄は腰かけながら卷莫を一本抜いた。

『大へんお疲れのやうですね。』とネクリュウドフは云つた。

『何から何まで辛い職掌でしてねえ。疲れますよ、全く。奴等の境涯を何うなりとも樂にしてやり度いと思ふんですがね、うつかりすると却つて反對になるんですからね。私は何うしたら此の職掌がやめられるだらうかと、それ許り考へてゐるんです。どうも辛い厭な役目です。』

ネクリュウドフは典獄が何をさう特に辛がつてゐるかを知らなかつた、が今日は其の特別にがつかりして弱つてゐるのを見て、漫ろに同情を覺えた。

『さうでせうねえ、嘸つらいお役目でせう、お察しします。』と彼は云つた。『どうして又こんな職業に就いてゐらつしやるんです。』

『どうしてつて、あなた、財産は無し、家族は多しだもんですから。』

『でも、あなたが辛いなら……。』

『辛くはありますが、出來るだけの事はやつてゐますよ、出來るだけは樂にしてやつてゐますよ。私でなく誰か別な人でしたら、隨分甚い取扱ひをするでせう。二千人位の取締りが何だと、一口に云つて仕舞へば雜作はないやうですけれど、實際やつてみるとさうは行きませんからね。囚人などといふ者を取扱ふには、よく其呼吸を飲み込んでゐませんとね。囚人だつて矢つ張り人間ですからね。だから思遣りが肝腎ですよ、と云つて餘り寛大にすると又いけませんし。』

それから典獄はつい近頃囚人どもが喧嘩をやらかして、その中の一人はとうとう死んだといふ話をした。

そこにマスロオワが看守の一人に連れられてはひつて來たので、其話はそれで切れた。

彼女はまだ室の閾を跨がない中に、典獄よりもネクリュウドフを先きに見つけた。彼女は赤い顏をしてゐた。絶えずにこにこして頭を輕く振りながら看守に從いて入つて來た。典獄が居たのに目が留ると、彼女ははつと怖れを顏に出して立止つたが、直ぐ又心を確と取り直していそいそとネクリュウドフの傍へ行つた。

『今日は。』と彼女は笑ひ乍ら甘えるやうに云つて、強く彼の手を握つた、前の時のやうにはしなかつた。

『私は控訴狀にあなたの署名をして貰ひに來たんです。』さう云つてネクリュウドフは、今日自分に元氣よい態度を見せるマスロオワを訝しんだ。『辯護士が控訴狀を書いたから、それにあなたが署名をしなければならない、それが出來てから彼得斯堡へ送るんです。』

『結構だわねえ、私書くわ、私何だつて行りますとも。』さう云つて彼女は片方の目を瞑つたり瞬いたりして微笑んだ。

ネクリュウドフは衣嚢から疊んだ一枚の紙を出して卓の傍へ行つた。

『此處で署名をさしていゝでせうね？』と彼は典獄に尋ねた。

『此方へおいで、そして卓の傍に腰かけるがいゝ。』と典獄はマスロオワに云つた。『そこにペンがある。書けるかね。』

『以前は書いたりした事よくありますわ。』さう云つて彼女は上衣の裾だの袖口だのを取りつくろひ、にこにこしながら卓に着いて腰かけた。そして肉のよく引緊つた小さい手に稍不恰好にペンを持つて、微笑を湛へながらネクリュウドフを見た。

ネクリュウドフは署名すべき位置を敎へた。

彼女は用意周到にペンをインキ壺の中に浸し、多過ぎた丈けのインキを滴め落し、そして自分の名を署した。

『これつきりでいゝんですか。』と尋ねて、彼女はネクリュウドフを見たり、典獄を見やつたりした。それからペンをインキ壺のペン掛けの上に載せたり、又紙の上に置いたりした。

『それから私は尙ほ少しあなたに話さなければならない事がある。』とネクリュウドフはペンを彼女より取り乍ら云つた。

『いゝわ、お話しなさいまし。』さう云つて彼女は急に眞面目になつた、恰かも何事かを熟考するか、若くは全く寢入てしまはうとでもするやうに。

典獄は立上つて、其場を外して出て行つた。ネクリュウドフは彼女と二人つきりになつた。

四六

マスロオワを連れて來た看守は、卓のある處から可なり離れた窓際の腰掛にかゝつてゐた。ネクリュウドフには愈々或る決定的の場合が來た。

彼は彼女に最初面會した時最も大切な事を云はなかつたのを、其後絕えず何よりの遺憾に思つてゐた。それは云ふ迄もなく、彼女と結婚したいと思つてゐる心を知らせる事である。

それで今度こそは必ず云ふと彼は心を決めてゐるのであつた。彼は彼女と卓を中に挾んで向き合つて腰掛けてゐた。室内は明るかつた、それでネクリュウドフは今始めて極く近くに彼女の顔を鮮かに見る事が出來た、――目と脣の邊りには小さい皺が出來て居り、目の下は少し脹れぼつたく太つてゐた、それを見ると彼は尙ほ一層傷ましさ可哀さを覺えた。

曰くなりかゝつた頰鬚のあるヘブライ型の看守に聞えないやうに、たゞカテュウシヤにのみ聞えるやうに、彼は前の卓に少し凭りかゝりながら云つた。『此の控訴狀を出しても駄目だつたら、皇帝陛下に上奏する積りです、兎に角出來るだけの事は何でもしますよ。』

『私がいゝ辯護士を賴んでゐたらよかつたんですけど。』と彼女は彼の言葉を途切らして云つた。『けれど、あの、私の辯護人になつた人は、本當に丸つきり譯の分らない人ですわね。そして誰も皆私にお世辭を云ふばかりなんだもの。』笑ひ乍らさう云ふのであつたが、なほ云ひ繼いだ、『あなたと私の仲が以前に知れてゐたら何うだつたでせうねえ、さうだつたら屹度又何とか違つた事になつてゝよ、でも今は仕樣がないわねえ。私達みたいな者は世間で皆が泥棒女位ゐに思つてゐるんだもの。』

「どうして今日は斯う變になつてるのだらう。」とネクリュウドフは訝つた、そして例の大切な事を云はうとしたら、女は又話し出した。

『私あなたにお賴みがあるわ、それは斯うなの。私どもの檻房にお婆さんが一人居ますのよ、それはね、皆で不思議に思つてゐることよ。いゝお婆さんなの、そして何もしないのに監獄に打ち込まれたのよ、息子も一緒にさ。でも其の丸つきり罪のないつて事は誰も皆が知つてますのよ、それだのに放火犯だとか云つて訴へられてさ、今は監獄に入れられてるぢやありませんか。そのお婆さんがね、私があなたに近づきだと聞いたものですから。』と云つてマスロオワは彼の顔を見ながら、『だもんだから私に賴んだのよ、そのお方樣に云つて下さいつてね、悴に逢つてやつて下さるやうにお前さんから賴んで下さいつてね。その息子が何もかも譯を割つて話をするからつてさ。その婆さんはメンショオワつて云ふ名なの。あなた會つてやつて下さる？　そりやね、いゝお婆さんですわ。誰だつて一目逢つてみれば、もうそれだけで其お婆さんの罪のないのは直ぐ知れるのよ。そんな人なの。ね、あなた、力になつて下さいな、何とかしてやつて下さいな、ね？』と彼女は彼の顔を見上げ、笑みを湛へて云つた。

『よろしい、何とかしてみませう、逢つてよく聞いてみやう。』とネクリュウドフは、彼女の氣儘な調子に愕きながら云つた。『だが、私はあなたに自分の事で話をしたいと思つてゐます。この前に面會した時私が云つた事をあなたは覺えてゐるでせうね。』

『何のかの色々な事を仰しやつたわ。何を仰しやつたつけ？』さう云つて彼女は、頭を右に

傾けたり左に倒したりして嬌態を作つて微笑んだ。
『あなたに許して貰ひ度い爲めに來たと云つたんです。』
『えゝ、えゝ、もう何もかも許して許して大許しだわ。そんなつまらない事はもう云ひつこなし。それよりか、あなた、あの……。』
『そして私は私の罪を償ひ度いのです。それも無論口先きばかりでなく、事實によつて償ふんです。私は決心してゐます、あなたと結婚しようと決心してゐます。』
彼女の顏には俄かに險しい恐怖の色が現はれた。斜に見る目は動かなくなつて、空を見詰めるやうに彼の顏を見た。
『何になりますの、そんな事が。』と、稍あつて口を開いて顏を曇らして云つた。
『私は神に對してそれをしなければならない事を感じてゐるのです。』
『何しに神様が入用になりましたの？　あなた方はいつも反對許し云つてるぢやないの。神様ですつて？　へん、どんな神様なの？　それはあの昔あなたが考へるなら考へなきやならなかつた事さ。』さう云つて彼女は口を開いたまゝ急に默つた。
それで始めてネクリュウドフは彼女の口より匂ふブランデェの香を嗅いで、彼女の昂奮の原因を知つた。

『まあ氣を靜かに落着けるがいゝ。』と彼は云つた。
『私はちつとも氣を落着ける必要なんか有りやしないわ。私が醉つ拂つてると思つてるのでせう。さうさ、醉つてはゐるのさ、でもね、私は自分の云つてる事は、みんな丁と知つてるよ。』と彼女は急に滿面に朱を濺いで口早に云つた。『私は淺間しい懲役女　あなたは立派な紳士様、公爵閣下、何の醉興に私風情の者に關りあつて御身分をお穢し遊ばしますの。さつさと姫御前達の傍へ失せるがいゝ……。』
『どんなにお前がひどい事を云ふにしたつて、私が自分で自分を淺間しかつたと思つてゐる程には云へはしないよ。』とネクリュウドフは低い聲を慄はした。『私がお前に對して惡かつたと思つてゐる此の心の程を、お前は考へても呉れないのだ。』
『へん、惡かつたと思つてゐるとさ。』と彼女は意地惡げに鸚鵡返しに云つた。『あの時はさうは思はなかつたぢやないか、そして私に百ルウブルを握らしたぢやないか。あれが私の枕金だつたわねえ……。』
『分つてゐるよ、分つてゐるよ、だが今はどうすればいゝだらう？』とネクリュウドフは云つた。『もう私は決してお前を捨てない決心をしてゐる。そして私の口で云つた事は、屹度行つてみせる。』

『私はちやんと云つときますがね、お前さんなんぞにそんな事が出來るもんですか。』と彼女は答へて高い聲で笑つた。

『カテュウシヤ、……。』

『去つてお呉れ、私は懲役女、お前さんは公爵樣ぢやないの、斯樣な處に用はない筈だわ。』と彼女は叫んだ、憤怒に驅られて別人の樣になつて、彼に握られた手を邪慳に振り放した。

『お前さんは私を踏臺にして自分が助からうと云ふ積りかい。』心の中に起つて來る事を彼女の口は急いで突き出すのであつた。『此世でお前さんは私を嬲み物にして、又あの世でも助からう爲めに私を踏臺にする積りかい。そんな男は私は嫌だ、嫌だ、その眼鏡も、でつぷり肥つた其のしやつつらも、そんなのを見れば身の毛が悚立つ。行つてお呉れ、早速と出て行つてお呉れ。』と叫んで彼女はヒステリイの發作のやうに飛び上つた。

看守が寄つて來た。

『何を騷ぐのだ？　何と心得てゐるのだ……？』

『どうか許してやつて貰ひます、　此儘にして置いて下さい。』とネクリュウドフは看守に取りなした。

『仕度い放題にさせて置くわけには行かないのです。』と看守は云つた。

『いや、さうはしませんよ。まあ、少し待つて下さい。』とネクリュウドフは云つた。

看守は再び窓際へ行つた。

カテュウシヤも又椅子に着いた、目を伏せて兩手の指を堅く組合せた。

ネクリュウドフは其傍に立つて、どうすればいゝか分らずに佇んだ。

『お前は私を信じて呉れないのかい。』

『私と結婚しようといふの？　そんな事があつて堪るもんか。そんな事にでもなるやうなら、私は首でも縊つて死んぢまふが百も優しだわ。さう承知してゐて貰ひませう。』

『それでも併し私はお前の爲めに盡す。』

『それはあなたのお勝手さ。けれども私はあなたにこれんばかしも用はないわ、これは屹と云つて置きます。』と彼女は云つた。——『あゝ、何故私はあの時死ななかつたらう。』と云つて切なげに泣き出した。

ネクリュウドフは何とも云ふ事が出來なかつた。彼自身も泣きたさうな樣子であつた。

彼女は目を擧げて、彼も感動してゐるらしい樣子を訝しげに見た。そして雙頰に傳つて流れた涙を肩掛で拭いた。

看守は又もや傍へ寄つて來て、もう時刻だからと注意した。彼女は立上つた。

『お前は今は昂奮してゐる。都合が出來れば私は又明日訪ねて來る。ようく考へてお呉れ。』とネクリュウドフは云つた。

彼女は何とも答へず、又彼を見もせず、看守に從いて出て行つた。

『お芽出度う。』とコラブレエワはマスロオワが檻房に戻つて來ると云つた。『あの旦那の惚れ込み方は一通りなものぢやねえよ。ぢつとして穩しう又來る時まで待つてゐなせえ、きつとあの旦那が助けて呉れらあ、富者の出來ねえ事つて有りやしねえからね。』

『さうともさ、』と踏切番は綾澤たつぷりの聲を出して、『貧乏人には婚禮なんて容易に出來るもんぢやねえ、だけんど金さへ持つてりやあどんな事でも、一つやらうと氣せえ向けば、おいそれと直きに出來上りまさ。ねえ、お前さん、あんな立派な旦那が出來てりや、もう世話あねえやな。それはさうと、何と云つたえ？　あの旦那がさ。』

『それで、何うなつたかえ。お前さん私の事あ話しておくんなすつたらうねえ？』と放火犯の老婆は尋ねた。

マスロオワは何とも答へなかつた。寢床の上に横になつて、一隅をぢつと見詰めたまゝ、夕方まで其儘でゐた。譬へやうもない悲痛な心の或働きが始まつた。ネクリュウドフの云つた言葉は彼女を彼の精神的な世界へ連れ戻して行つた、彼女はその世界で惱み苦しみ、さうまで苦しまねばならない譯が分らないので、果ては其世界を恨み惡んで逃げ出して來たのであつた。今や彼女は今まで辿つて生きて來た忘却の道を失つてしまつた、そして、まざまざと昔の事を思ひ出して行かねばならないのであつた、それは殆ど耐へ難い悲痛であつた。夜になると彼女は又ブランデエを買つて、女囚仲間と一緒に矢鱈にあふつた。

四七

「かういふ譯になつてゐるんだな。」とネクリュウドフは監獄を出ながら思つた、そして始めて自分の罪惡の深さをつくづく知つた。彼が若し自分の過ちを償はうと骨を折らなかつたとしたら、それなら彼は決して自分の罪業の程を十分認める事は出來なかつたであらう、又彼女も其身に加へられた惡業の程を夫れと知る事は出來なかつたであらう。今にして始めて其の怖ろしさの程がまざまざと思ひやられるのであつた、今にして始めて彼は彼女の純潔な魂を何樣なものになしたかを知つた、彼女も亦自分が何樣なものに成り果ててゐたかを知つた。今まではネクリュウドフはたゞ自分の感情を弄んでゐたに過ぎなかつた、弄んで其處に快感を感じてゐたに過ぎなかつた、悔だの償ひだのと云つて其處に自分の快感を啖つてゐた

に過ぎなかつた。併し今は心の底より悚然とせずにはゐられなかつた。彼女と關係を斷つ!?——そんな事は最早彼に出來る事ではなくなつた、併し彼と彼女との關係が今後どうなつて行く可きかは、彼も想像してみる事が出來なかつた。

出口の所でネクリュウドフは誰かに一通の手紙を渡された。往來に出てから開いてみると、それは鉛筆ですらすらと走り書きしたもので、

『あなたが監獄に屢々お出でになるといふ事を聞きましたから、私は或る豫審犯の事を氣にしてゐますし、どうがあなたにお目にかゝり度いと思つてゐます。どうぞ私に面會をお求めなすつて下さいまし、すぐ許される事は分りきつて居ます。お目にかゝつて色々お話し申上げ度い事がございます、あなたの盡力してお居でになる女囚に就いても、又國事犯の人達の事についても、大切な事をお話し致し度いと思つて居ります。恩義を受けましたエエラ・ボゴドゥウコフスカイやより。』

「ボゴドゥウコフスカイヤ? 誰だらう?」とネクリュウドフはまだ今先きの事に頭を使ひながら考へた。手紙を書いた主の名も、又その筆蹟も、はじめの中は彼は丸つきり思ひ出せなかつた。『あ、さうだ。』と彼は急に思ひ出した、『昔、熊狩をした時逢つた役僧の娘だ。』

エエラ・ボゴドゥウコフスカイヤはノウゴロッド縣の或る片田舎の小學校の女教師であつたが、嘗てネクリュウドフが若干の同僚と共に共地方に熊狩に出かけた時、彼女はなほ暫くの間教員養成所に入つて學問がしたいから、その費用を借り度いと云つて彼を訪ねたのであつた。ネクリュウドフは金をやつて、その後すつかり忘れてゐた。今は彼女は國事犯として恰も同じ監獄に繫がれてゐるのであつたが、其處でネクリュウドフの事を聞いたので、何か彼の爲めに話でもしてやり度いと思つたのであつた。あの頃は一切が何と輕快で單純であつたらう、今は何と紛糾つて重苦しくなつてゐる事だらう、とネクリュドフはボゴドゥウコフスカイヤに初めて逢つた當時の事を、愉快にありありと思ひ出した。それは精進季の前で、鐵道から六十エルスト(我が十七里位)はひつた荒地での事であつた。獵はうまく行つて、熊が二頭捕れた。それから歸らうといふので泊つた百姓の家で出發間際に一同が食事をしてゐると、其家の亭主がやつて來て、役僧の娘がネクリュウドフ公爵にお目に懸り度いと云つて來てゐる事を告げた。

『美い女かね?』と一人は云つた。

『そんな事云ふなよ。』と云つてネクリュウドフは立上つた。彼は何の爲めに役僧の娘が自分に逢ひに來たのかを怪しみながら、別な部屋に入つた。するとソフトハットを被つて外套を着た丈夫さうに發育した娘が其室に立つてゐた、その顏は少し骨張つてゐて美しくは決して

なかつたが、三日月形の眉と目とは立派なものであつた。

『さあ、ヱエラ・エフレモフナさん、これが公爵様だ、お話なさるがえゝだ。』と百姓は云つた。『おら出て行くべえ。』

『どんな用事です？』とネクリュウドフは尋ねた。

『私、……私は……あの、……。あなたはお金持ですのね、あなたはつまらない事に金をおすてになりますのね、狩なんてそんなつまらない娯みの爲めに。私は知つてゐます。』と娘は非常にどぎまぎしながら云ひ出した。『でも、私はたゞ一つ爲たい事があります、私は人間一般の爲めに役に立ちたいと思つてゐます、けれども夫れが出來ません、何も知らないものですから。』

『では私が何うすればいゝのです？』

『私は學校の教員ですの、ですけれど今少し課程を修めたいと思ひます。けれど夫れが出來ません、いえ、それは出來るのですけれど、それには費用が要ります。それをお貸し下さい、課程を終りましたら悉皆お返ししますから。』

少しも不純な調子のない一圖な無邪氣な其の目も、決心と共に如何にも娘らしい小心を見せてゐる全體の其の表情も、皆いぢらしいものであつた。ネクリュウドフは直ぐ娘の氣持が

分つた、そして思ひやつて心の中に憐れんだ。彼の心がそんな調子になる事は往々ある事であつた。

『私は斯う思つて居ります、金持つた人は熊狩なんぞをして、百姓達にはブランデエなど飲ませて、さういふ事をして時を過して居るけれど、そんな事は私は皆悪いと思ひます。何故金持ちは一寸でも良い事をしないのでせう。私はたゞ八十ルウブルだけあればよいのですわ。それでもあなたがお貸しにならなければ、それではたゞ夫れ丈けの事なのですわ、私何ともありません。』と娘はつんとして云つた。ネクリュウドフが彼女をきつと見詰めてゐたので、それを彼女は彼に聞いて貰へないのだと思つたのである。

『正反對です、私はあなたに感謝します、よく云つて下さつた、よく私に機會を與へて下さつた。』

娘は彼に願を聞かれたのだと知ると、顏を赤くして默つてしまつた。

『一寸待つて居て下さい、直ぐ持つて來ますから。』

さう云つて彼は先きの室に戻ると、二人の會話を盗み聞きしてゐた同僚が一人あつた。そんな同僚達の揶揄ふのに頓着なく、彼は財布から金を取り出して娘の方へ持つて行つた。

『さ、どうぞ收めて下さい、お禮なんか私は云はれる譯はありません、私があなたにお禮を

云ひます。』と彼は面はゆさうに云つた。

今それはネクリュウドフに取つて一切愉快な思ひ出であつた。その時それを一人の士官があまりに惡巫山戯にして了はうとしたので、すんでの事に其士官と喧嘩しようとした事、すると今一人の同僚が自分の方に味方をした事、それが元で其同僚とは以來一層親密になつた事、さては狩がうまく行つて面白かつた事だの、夜半に一同が停車場の方へ引揚げる時の氣持よかつた事だの、それを思ふと皆愉快であつた。數臺の橇が一列になつて引續いて狹い森の小徑を音なく走り、何うかすると低い處をずつと下つたり、又雪の一ぱい積んでる處を越えて行つたり、雪の下の縱の枝がぽりぽりと折れる音が聞えたりした。誰か吹かしてゐる卷莨の火が暗の中にぱつと赤く光る事もあつた。下男のオオシップは膝まで雪に埋れながら橇から橇へと走つて行つたり、そして何の橇かに乘つた時は、大鹿が深い雪の中をうろついて食物を探して廻るだの、熊が暖い穴の中に冬籠りをするだのといふ話をしたりした。

ネクリュウドフは夫れ等の一切を思ひ出した、殊に其時の自分の健康と力と氣樂さとを享有してゐた幸福な自意識を思ひやつた。毛皮の服の下にのんびりと張り眼らんでゐる健康な彼の肺は清新な冬の夜の空氣を恣に呼吸し、生き生きと元氣に充ちて赤くなつてゐる顏には雪の塊りを吹きつけられたりしながら、彼は滿身たゞむれ愉快であつた。そして心には何等の心配なく、何等の苛責なく、又怖れも慾も少しもなかつた。あゝ何といふ樂しい時期であつたらう。然るに今は？　今は何といふ苦惱に滿ちた見窄らしい境涯であらう。

四八

翌日の朝目が覺めると、ネクリュウドフは前日遭遇したあらゆる事を思ひ浮べた、そして壓倒されるやうな苦しさ心細さを覺えた。しかし彼は始めた事を行り遂げずにはおかないといふ決心を、一層強く固めてゐた。

その強い義務感を抱いて彼は出かけた。先づ知事代理のマスレンニコフを訪ねてマスロオワ以外にマスロオワの賴んだメンショオワ母子にも監獄で會へる認可を得たいと思つた、それからカテュウシヤの爲めに何とか役に立ちさうに思はれるボゴドゥウコフスカイヤにも逢ふ積りをした。

ネクリュウドフとマスレンニコフとはもうずつと前に二人が聯隊に居る時からの知り合ひであつた。當時マスレンニコフは其聯隊の主計で、極く物事に几帳面な、人物の好い士官であつたが、聯隊以外の世間の事は殆ど何一つ知らず、又知らうと思つてもゐなかつた。其後文官に轉じて今は其地の行政官になつてゐるのにネクリュウドフは會ふのであつた。マスレン

ニコフは或る富裕な元氣な婦人と結婚して、その勸めで身を軍籍より退いたのであつた。

その妻君は良人を手飼ひの狆か何ぞのやうに揶揄つたり可愛がつたりした。前年の冬一度ネクリュウドフは二人の家に客になつて行つた事があつたが、その家庭が他人の彼には少しも面白くなかつたので、その後彼は訪ねた事はなかつたのである。

マスレンニコフはネクリュウドフの顏を見ると、直ぐにこにこして悅んだ。矢張り以前と同樣に脂肪ぎつて肥つた恰幅の良い赤ら顏のマスレンニコフで、軍隊に居た時の通り服裝もきちんとしてゐた。隊に居る時はいつも身の廻りを淸潔にして、彼の制服の着け具合などには一點の批の打ち處もなかつたが、今は又最新式の文官服を、これ又其肉附きの良い體に申し分なく巧く着込んで、その廣い胸を上品に心持高く張つてゐた。今着てゐるのは假制服であつた。主客二人は年の相違にも拘らず(マスレンニコフは四十に近かつた)、互に隔てない親密な言葉で話し合ふのに慣れてゐた。

『よく來て呉れた、よく來て呉れた。家內の處へ行くから來い。まだおれも十分間は暇がある。知事が旅行してるものだから、おれが攝政さ。』と彼は其の得意をさも隱し得ないらしかつた。

『今日はおれは或る用件を帶びて來たんだ。』

『どんな事だい?』とマスレンニコフは尋ねた、氣を附けるかのやうな訝るかのやうな眞面目な調子を見せた。

『監獄に大へんおれの氣にかゝる人物が一人はひつてゐるんだ。』とネクリュウドフは云つた、監獄と聞いてマスレンニコフの顏は尙ほきつとなつた。ネクリュウドフは續けて、『その者に面會し度いんだがね、一般の面會室でなく事務室で、そして一定の面會日だけでなくちよいちよい逢ひ度いんだ。それには君の許可を得なけりやならないつて云ふぢやないか。』

『勿論さ、mon cher(親友)、君の爲めなら何だつて爲てやらあな。』さう云つてマスレンニコフは兩手でネクリュウドフの膝を握つた、それはなる丈け勿體振らないやうに見える爲めらしかつた。『そりや出來るさ、併しね、おれは三日天下のやうなもんだぜ。』

『ぢやあ其囚人に面會出來る書附けを呉れるか。』

『そりや女囚か。』

『うん。』

『どうして監獄に入つたんだ。』

『毒殺でだ。だが不當な判決でさうなつたんだ。』

『それ見ろ、立派な公平な裁判だね。Il n'en font point d'autres(大勢總がゝりでそんな事しきや出來ないぢやないか)、

いつもそんな事ばかりやらかすんだ。』と彼は佛蘭西語で云つた。『君はおれの說に贊成しないだらう、そりや知つてるさ。だつてそんなでは仕樣がないぢやないか。C'est mon opinion bien arrêtée（さうすればさうなると云ふのは、おれのいつも主張してゐる所なんだ。）』そして尙ほ彼は去年から取つてゐる或る反動政策的の保守主義新聞で讀んだ或る意見を述べ立てた。『君は自由主義だあね。』

『おれは自由主義だか何だか知らないさ。』と云つてネクリュウドフは、自分が直ぐ黨派別けにされて自由主義だと云はれるのに愕いた。それは彼が時々、人に判決を下さうとするには豫めよく審問しなければいけない、法廷に於ては萬人皆同等である、人を徒らに苦しめたり撲つたりしてはいけない、殊に豫審中の者をそんなに取扱ふのは許す可からざる事である、とたゞ其位の事を云つてたからであつた。『おれが自由主義だか何だか、それは知らないが、兎も角も今の裁判が、――無論あの通り無茶苦茶なものではあるがさ、――併しそれでも以前の裁判よりは優しだと思つてゐる。』

『辯護士を賴んだかい？』

『ファナアリンにやらしてゐる。』

『なに、ファナアリン。』とマスレンニコフは顏を曇らした。彼は去年法廷に證人として出てファナアリンに質問を受け三十分間も愚弄された事を思ひ出したのである。

『あんな男を相談相手にしちやいけないつて、おれが忠告する所だつたがね。――C'est un homme tare（彼奴はやくざな男だぜ）――全く擦れつからしでね。』

『それから今一つ賴みがある。』とネクリュウドフは彼の言葉に頓着なく、『少し以前の事だがおれは或る女教師を知つてゐるんだ、それは非常に氣の毒な女でね。それが今矢つ張り同じ監獄に入つてゐるのさ、そしておれに面會したいと云つてゐるんだ。だから此女にも面會出來るやうに計らつて呉れ。』

マスレンニコフは頭を少し横に傾けて何か考へた。

『それは國事犯ぢやないか。』

『うん、さうだつて事だ。』

『それだとね、實は國事犯との面會は其親戚だけに限つて許されてるんだがね、だが君にだから誰にも面會出來る特殊認可をやらう。併し濫用しては困るぜ。その御褒負筋は何といふんだ。ボゴドゥウゴフスカイヤとは違ふか。』『Hideuse（醜婦だ）。』『Elle est folie？（別嬪かれ）』

マスレンニコフは感心しないやうに頭を少し振りながら卓の傍に行つて、頭文字だけちやんと刷つてある用紙にさらさらと書いた。

『此狀ノ持參者公爵ドゥミトリイ・イワノオキッチュ・ネクリュウドフニ、監獄事務室ニ於テ町人マスロオワ及ビ看護婦長ボゴドゥウコフスカイヤニ面會スル事ヲ差許ス。』

そして自分の大きい書き判の花文字で結んだ。

『監獄内の秩序がどんな物だか、君にも分るだらうが、立派に秩序を維持して行く事は、一通りの困難ぢやないからね。何しろ囚人が一ぱいだらう、殊に西比利亞行きが大勢ゐるんだからね。君が行つてみりや分るよ、皆よく獄則を守つて滿足してゐるんだ。しかし取扱ひの呼吸はよく飲み込んでゐなけりやならないからね。二三日前にも一寸した忌々しい面白くない事があつたがね、おれでなく誰かゞ監督してゐたとしたら、暴動位ゐに思ひ込んで大勢に酷い目を見せたかも知れんぞ、だが夫れも直ぐ無事に鎭まつて痕跡もなく終つたのさ。一方ではよく氣をつけてやらなきやならないが、他方では又確り威を見せておかなきやならないんだ。』と云つて彼は金のカフス釦のついたホワイトシャツの袖口から土耳古玉入りの指環を嵌めた脂肪肥りの白い拳をずんと突き出した。『つまり肝腎なのは恩威並行といふ事さ。』

『それがおれには分らないんだ。』とネクリュウドフは云つた。『おれは監獄に二度行つてみたが、どうもあれぢやあ酷いと思つたね。』

『それはね、君、何だよ、それなら君はパセック伯爵夫人と近づきになるがいゝ。』と話好きのマスレンニコフは云ひ續けた。『夫人は監獄事業に盡力してね、隨分貢献して呉れたよ。囚人どもが以前のやうな手荒な酷い目に逢つたりしないやうになつて、兎も角もおれの監督の下ではよく懷いて滿足するやうになつたのは、いろいろ變更して改良したからで、それは夫人のお蔭と、それからつまらない謙遜は抜きにして、此のおれのやり方との結果さ。君、行つてみりや分るよ。だが、あのファナアリンと來ては仕様がないね、おれはあの男を個人としては知らないが、又社會的の地位から云つてもおれとあれと接觸する機會は殆ど無いが、併しあれは極印附きの俗物だね、あれは法廷でこんな事を云ふ男だよ、あのね、……。』

『や、どうも有り難う。』と云つてネクリュウドフは認可證を取り、それ以上舊友の話に耳を貸さず、暇を告げた。

『家内の所には行つて呉れないのか。』

『いや、許して呉れ、今日は暇がない。』

『さうか、でもそれぢやあおれは家内に小言を食はされる譯だな。』と云ひながら彼はネクリュウドフを出口の階段の第一段まで送つて來た、それは彼が彼の家に取つて第二流の客を送り出す時のやり方で、彼はネクリュウドフを其第二流に算入してゐるのであつた。『どうだ

い、ほんの一寸でもいゝぢやないか、行つて呉れないか。』

だがネクリュウドフは應じなかつた。玄關番は飛んで來て外套とステッキを渡して扉を開いた。その外には巡査が立つてゐた。今日は何うしても暇がないからとネクリュウドフは云つた。

『さうか、では此の木曜にね、木曜は家内の面會日なんだ、特別接客日さ。ぢやあ彼女にさう云つとくからね。』とマスレンニコフは階段の上から云つた。

四九

マスレンニコフの宅を出たネクリュウドフは其足で直ぐ監獄に行き、はや知つてゐる典獄の住居を訪ねた。又もや安ピアノの音が聞えたが、今度は前の時のやうに史詩でなくムウヴィオ・クレメンティの練習曲であつた。矢張り非常に力の籠つた氣の利いた速い彈き方であつた。扉をあけた女中は矢張り片目に繃帶をした女で、旦那樣はお宅で御ざいますと云つた。ネクリュウドフは其女中に導かれて小さい應接室に通つた。其處には長椅子が一つと卓が一つあつて、卓の上に刺繍をした絹の小さい敷物の上に載せてあるランプは薔薇色の傘が片方だけ焦げてゐた。典獄は辛氣臭げながつかりしたやうな元氣のない顏をして出て來た。

『さ、どうぞお掛け下さいまし。御用向は？』と彼は制服の胸の中程の釦をつめながら尋ねた。

『私は今副知事を訪ねて此の認可證を貰つて參りました。』と云ひ乍らネクリュウドフは其書附を出した。『マスロオワに面會したいのです。』

『マルコオワですか。』と典獄はピアノの音に妨げられて好く聞き取りえなかつたのである。

『マスロオワです。』

『あ、分りました、さうですか。』

典獄は立上つて戸口の方へ行つた、其方からクレメンティの練習曲が聞えて來るのであつた。

『マルウシヤ、一寸少しの間止してくれ。』と彼は其音を聞くと壽命が縮むとでも云ひさうな聲を出した。『ちつとも話が分らない。』

ピアノはぴたと止んだ。意地惡く強く踏みつけるやうな足音がして、誰やら戸口からちらと覗き込んだ者があつた。

樂の音が止んだので典獄は氣が急に清々したらしい樣子で、大きい安葉卷に火をつけ、ネクリュウドフにも一つ勸めたが、彼は辭退した。

『マスロオワですか、……マスロオワには今日は面會出來ませんよ。』
『何故です。』
『それはね、あなた御自身のせゐですよ。』と典獄は輕い微笑を浮べながら云つた。『公爵、彼女に直接に金などやつて下さるな。おやりになりたい時は、私にお渡し下さい、私がちやんと彼女の所有にしておきます。それを昨日はあなたが直接におやりになつたらしいので、直ぐそれで彼女はブランデエを買つたのですよ。――どうも此の惡癖はやめさせられませんでねえ、――それで今日はすつかり醉つ拂ひましてさ、亂暴な眞似を爲でかさうとするぢやありませんか。』
『まさか、そんな？』
『いや、全くの所です。それで私は餘儀なく懲らしめておかなきやなりませんでした。別な檻房に入れておきましたよ。ふだんは柔順しい好い娘ですがね、併しあなた金はやつて下さいますな、それはお願ひしておきます。どうも囚人なんてものは皆酒をのむといけないものですからねえ。』
ネクリュウドフは昨日彼女を訪ねた時のことをひしひしと身に應へる樣子に强く思ひ出した、そして再び壓服されるやうな重苦しさを覺えた。

『それではボゴドゥウコフスカイヤには會へますか、國事犯の女には？　これには會へるでせう？』
『えゝ、そりゃ會へますとも。』と典獄は云つたが、戸口の方へ向つて、『何、どうした？』と聲をかけた。
五つか六つ位の小さい娘の子が入つて來たのである。娘の子は一心にネクリュウドフを見たまゝ父親の方へちよこちよこ歩いて行つた。
『そら、倒れるよ。』と父親は、子供の足元を見ないで敷物の緣に跪づきさうになつたのを、眺めつゝ笑ひ乍らも氣を配つた。
『では差支へなければ私逢ひに行かうと思ひます。』
『えゝ、差支へはないでせう。』と云つて典獄は、矢張りネクリュウドフを見詰めたまゝ傍に來た娘を抱いて、『ぢやあ行きませう、どうぞ此方へ。』
典獄は子供をそつと脇に立たせて立上り玄關の方へ行つた。
そして典獄が女中より渡された外套を着て其處を出る間もあらせず、クレメンティの急進音は再び始まつた。
『あの娘は音樂學校に居たのですがね、どうも音樂學校は締りがついて居りませんのです

よ。あれには音樂の才は十分ありますものですからね。』と典獄は戸口の前の階段を降りながら云つた、『音樂家にならうとして居りますよ。』

典獄とネクリュウドフとは監獄に來た。典獄が入口の前に來ると扉はさつと直ぐ開かつた。看守等は擧手注目の禮をした。頭を半分剃られた四人の男が何やらはひつた桶を擔ぎながら、玄關で二人の前に來かかつたが、典獄を見ると皆直ぐ避けて壁傍へ寄り沿うた、其中の一人などは殊に低く身を屈め、眉を寄せて陰氣な顏を見せ、黑い目だけをぎろぎろ光らした。

『勿論才能があるのは發達させなくちやならないのです、その邪魔をしてはいけません、けれどもねえ、狹い家の中であんなにやられてみると、どうも煩さくて仕方がありませんよ。』と典獄は囚人等には頓着なくさう話しながら、太儀さうな足取でネクリュウドフと一緒に溜りの室に入つた。

『誰でしたつけねえ、あなたの御面會なさりたいのは？』と典獄は又尋ねた。

『ボゴドゥウコフスカイヤです。』

『塔に居るあの女ですか。それでは今少しお待ちにならなければなりませんよ。』

『では其間にメンショオワ母子に面會出來ませんか、放火犯として入つてゐる二人に？』

『第二十一號檻房のですね？　出來ますともさ。呼び出して上げませうか。』

『その檻房内で面會は出來ないでせうか、息子のメンショオフの方に？』

『溜りの室でお會ひになる方が氣がお樂でございますがね。』

『いえ、檻房内での方を私は望むんですが。』

『さうですか。では何か其事に興味をお持ちなんですね。』

丁度その時傍らの戸口から飾した服裝の士官が入つて來た、それは副典獄であつた。

『さ、君、どうぞ此のお方を第廿一號のメンショオフの室へ御案内して下さい。』と典獄は副典獄に云つてから、又ネクリュウドフに、『それから事務室にお來で下さい、その間にあの、何を呼んでおきますから、あの、――何といふ名でしたかねえ？』

『エエラ・ボゴドゥウコフスカイヤです。』とネクリュウドフは又繰返した。

副典獄はブロンドな若い男で、上髭も丁寧に揃へ、香水の匂ひをぷんぷんさしてゐた。

『では、どうぞ此方へ。』と副典獄はネクリュウドフの氣を迎へるやうに笑ひかけて、『公僕は私どもの職務はお氣にかけて下さるので御ざりますか。』

『さうです、殊に全然罪がなくとも斯樣な處に入れられてゐる者もあるさうぢやありませんか、其樣な者には、尙ほ更氣掛りでなりません。』

副典獄は兩肩を一寸搖つた。

『さうです、さういふ事もあります。』と副典獄は靜かに云つて、惡臭の漂うてゐる廣い廊下に入る際に、丁寧にネクリュウドフに先きを讓つた。『併し又囚人等は嘘をいふ事がよくありましてね。さ、どうぞ此方へ。』

檻房の戸は皆あいてゐて、廊下に出てゐる囚人もあつた。副典獄が來るのを見て怖る怖る壁際に寄り沿ふのもあれば、檻房内に引込むのもあり、又は兵卒等のするやうな氣を付けの姿勢を取つて敬意を表するのもあつた。副典獄はそんなのを輕く僅かに見やつたり、又は看守等の敬禮に微かに頷いたりしながら、廊下傳ひにずつとネクリュウドフを案内して行つて、それから左手に鐵の扉で閉めてあつた戸口を入つて又別な廊下を歩んだ。

その廊下は尙ほ一層惡臭が強く、そして暗く又狹かつた。兩側の入口は皆閉めてあつて、大きな錠をかけてあり、「目」といふ名のついてゐる直徑一寸足らずの小さい穴が戸毎にあけてあつた。陰氣臭い皺だらけの顏をした老看守が只一人其廊下には居るきりであつた。

『メンショオフの檻房はどれだね。』と副典獄は其看守に尋ねた。

『左側の八番目です。』と老看守は答へた。

『檻房は皆ふさがつてゐるんですか。』とネクリュウドフは尋ねた。

『たゞ一つ空いてゐるきりです。』

五〇

『内を覗いていゝのですか。』とネクリュウドフは尋ねた。

『どうぞ御自由に。』と副典獄は愛想よく微笑しながら答へて、それから看守に何やら尋ねた。ネクリュウドフは一つの穴から内を覗いた、すると内には下衣だけを着た背の高い若い男が少し許りの黑い髭を蓄へて其檻房内を足早に往つたり來たりしてゐた。その男は戸の外に物音のしたのを耳にすると、陰氣な顏をして一寸見上げたが、直ぐ又前の通り歩き出した。

それからネクリュウドフは又他の穴を覗いた。すると丁度其穴の内から外を覗いてゐた大きな目のはつと愕いたのに衝突つたので、彼も引退つた。三番目の穴を覗くと、極く小柄の男が縮こまつて寢床の上に睡つてゐた、頭には獄衣を引かけてゐた。四番目の檻房内には肩幅の廣い色の青白い男が、膝に肘をついて深く項低れ沈んで寢床に腰かけてゐたが、戸外に足音を聞いて顏を上げて見返つた。その顏には、殊に其大きい目には悲痛な絶望の色が出てゐた。彼は其檻房を誰が外より覗かうとも、それを知らうと思ふ氣も出ないらしかつた。誰

が覗いたにした所で、彼は誰にも何等辜末の良い便りをも期待してはゐないらしかつた。

ネクリュウドフは壓倒されるやうな重苦しい心地に襲はれて、もはや檻房を覗く事を止め、二十一號のメンショオフの檻房へと行つた。老看守が錠を外して戸をあけてやつた。寢床の傍に立つてゐた、髭を少し生やして人の好ささうな圓い目を持つた、筋肉の引締つた、首の細い若い男は、入つて來た彼等を愕いて見ながら、急いで獄衣を身に着けた。何か尋ねさうに彼等を交る交る見やる其の圓い柔和さうな目が、何よりもネクリュウドフの心に止つた。

『此のお方が其方の事件に就いてお尋ねなさらうと仰しやるのだ。』

『有り難うございます。』

『さうです、私はお前の事に就いて話を聞いたので、』と云つてネクリュウドフは其檻房の奥の方へ入つて行き、格子のある汚い窓際に立つた。『それで、當人のお前からも少し聞きたいと思ひましてね。』

メンショオフも窓際に行つて、直ぐ話し出した。始はおづおづして副典獄の方を怖る怖る見やつたりしたが、次第に元氣づいて憚りなく話すやうになつた。副典獄が何か少し云ひつける爲めに廊下へ出て行くと、メンショオフは全く安心した。その話は其調子で察してみても、又其内容によつて考へてみても、全く人の好い單純な百姓息子の話であつた。ネクリュウドフにはそんな正直な話を侮辱此上もない獄衣を着せられた囚人の口から聞く事が奇怪でならなかつた。彼は話を聞き乍らも、蔓蒲團を添へてある低い粗末な寢床やら、大きい鐵の格子を嵌めた窓やら、タアルを塗つた汚いじめじめした四方の壁やら、扨ては此の不仕合せな見窄らしい百姓息子の淺間しい姿や悲しさうな顏などをしみじみと見やつた。ネクリュウドフの心は一刻一刻に切なく堪へ難くなつて來た。彼は人の好ささうな此の男が自分に話す事を本當だと思ふのは辛かつた、けれども又其の如何にも眞實としか思はれない話を嘘である僞りであると思つてみる事は、尙更怖ろしい思であつた。百姓男の話す所によれば、彼は結婚後直ぐ其の嫁を或る居酒屋の亭主に勾引された。彼は裁判に訴へたが、居酒屋の亭主は何時も無罪にばかりなつた。そこで或日彼は力づくで其嫁を取戻して家に連れ歸ると、翌日嫁は又逃げ出した。彼は又取り戻しに行つた。嫁が其居酒屋て入るのを彼はちやんと見たのであるが、居酒屋の亭主は自分の家に彼の女房なんぞが來てはゐないと云ひ張つて、彼に早速と歸れと云つた。彼はそんな言葉に耳を貸さなかつた。亭主は下男と力を合はせて彼を散々に袋叩きにした。すると其翌日居酒屋には火事が起つた。彼と彼の母親とには放火の嫌疑がかゝつた、けれども彼は火を放けたのでない許りか、其時彼は丁度ある親しい知合ひの家に行つてゐたのであつた。

『それではお前は全く火を放けはしないんだな？』
『どう致しやして、其様な事私考えもしやせん、あの悪黨の野郎が自分でしたに違え御ぜえやせん。そのつい少し前にあの野郎何でも彼でも保険をつけたちう話で御ぜえやすだ。だけんど私と阿母がさうして彼奴に脅迫したちう事になりやしただ。成程私は腹が立つて仕様がねえから、彼奴に散々怒鳴りつけてやつた事はやりやした。だけんど火はつけましねえ、火事の起つた時は私は居りましねえだ。それだあにあの野郎、私と阿母と共時居つた云やがりやしただ。彼奴自分で火をつけやしただ、何でも偉え値で保険つけて居りやしたでねえ。さうして夫れを己等に塗りつけやしただ。』
『そんな事があるものだらうか？』
『全く共通りでやす、神様も御存知でやす。旦那様、どうぞ己等を救けて下せえ。』さう云つて百姓息子は彼の足元に平伏さうとした、ネクリュウドフは力を込めてそれを止めなければならなかつた。――『かうして私あ罪がねえのにくたばつて終えますだあ。』そして彼の頬の筋肉が急にぴりぴりと痙攣つたかと思ふと、彼は泣き出した、そして上衣の袖を捲つて汚い肌衣の袖で目を拭き拭きした。
『もうお濟みになりましたか。』と典獄は尋ねた。

『濟みました。ぢやあね、氣落ちをしないで居るがいゝ、出來るだけの手は盡すから。』さう云つてネクリュウドフは其室を出た。メンショオフは戸口まで來たが、看守は扉で押しやつて其處を閉めた。メンショオフは扉の「目」から見送つた。

五一

其うちに晝になつて、副典獄と共にネクリュウドフが再び廣い廊下に來かかつた時は、其邊の檻房の戸口は皆あいて、短いだぶだぶのヅボンの上に黄色い獄衣を着た囚人等が出てゐる前を、二人は彼等の思ひ思ひの視線を浴びながら歩いて來た。ネクリュウドフはそれ等の囚人達の身の上を思ひやつて傷ましさも覺えたが、併し又それでも穩かに見過して通り得る自分が恥かしくもあつて、一種異様な氣持になつた。
或る廊下では誰やら彼の前を通り拔けて或る檻房に走り込んだが、すると其檻房から大勢の囚人がどやどや出て來て彼にぺこぺこ頭を下げた。
『あなた様、どうぞあなた様、何とお名前を申上げてえゝか分りましねえので、へえ、あなた様、どうぞ手前共の事がきまりますやうにお云ひつけ下せえまし。』
『私は役人でもなければ、又何も知つても居ない。』

『構はねえぢや御ぜえませんか、ぢやあ御役人に云つて下せえな。』と不平らしい聲もあつた。『手前共はもうこれで一月以上、何の悪い事もしねえのに苦しめられて居りやすだ。』

『何だと？　どうして其様な？』とネクリュウドフは尋ねた。

『そりやねえ、旦那、手前共は此處に打ち込まれてから、もう二月目で御ぜえやすが、何故打ち込まれたんか、さつぱり譯が分りましねえ。』

『そりや全くです、偶然の事なんです。』と副典獄は云つた。『この連中は旅券がないので捕まつたのです、そして實は直ぐ郷里の方へ送り遣る筈だつたのですが、其地の監獄が焼けましたので、そこの縣廳から我々の監獄に交渉がありまして、送つてやらないやうにとの頼みだつたのです。で、他の縣の者は皆送りましたのですが、この連中だけは爰にしつかり留めて置かなければならないのです。』

『何ですと？　たゞ夫れきりの事で？』と、ネクリュウドフは其戸口の前に立止つて尋ねた。

皆獄衣を着た四十人許りの男がネクリュウドフと副典獄を取圍んで立つた。そして各自が同時に訴へ出した。

『誰か一人で云ふがよい。』と副典獄は叱るやうに云ひつけた。

背の高い見かけのいゝ五十年輩の男が少し前に進み出てネクリュウドフに、自分達はたゞ

旅券を持たなかつた許りに此やうな處に入れられた、いや夫れも持つてはゐたが、たゞ二週間だけ期限が過ぎてゐたのであつた、併し毎年その位は期限が經過したと云つて咎められたりする事はなかつたのに、今年は斯う捕まつて罪人みたいに押し込められ、そしてはや二月目にもなるといふ事を話した。

『手前共は皆同じ職工組合の左官と石工で御ぜえやす。手前共の國で監獄が焼けたちう事で御ぜえやすが、それや手前共の知つた事ぢや御ぜえやせん。どうぞ一つお情けをかけてお呉んなせえ。』

ネクリュウドフはそれに耳を傾けながらも、共男の頰鬚の疎らな間をどす黑い大きい鼻が一つ匍つてゐるのに絶えず氣を取られた。

『どうしたのです？　實際たゞ夫れしきの事でですか。』と彼は副典獄に尋ねた。

『さうです、本當は郷里へ送り遣る方がよかつたのです。』と副典獄は答へた。

さう副典獄が答へ終るか終らないうちに、矢張同じ獄衣を着た小柄の男が仲間の間を押し分けて進み出て、昂奮の餘り口を妙に引歪めながら、自分達一同何の悪い事もしないのに無暗に苦しめられてゐると訴へた。

『犬よりもみじめな目に逢はされて居りやすだ……。』と其小男は云つた。

『こら、こら、もう大概にしておかないか。默つてゐるがいゝ、でないと今に……。』
『何が今にでやす。』と小男は自棄的な調子で云つた。『手前共が何を悪い事しやしただ。』
『默つとれ。』と副典獄は大喝した。小男は默つた。
これは抑も何といふ事だと一人心に考へながらネクリュウドフは此方へ來た。前後左右より注がれる視線を彼は無數の槍を投げられるやうに感じた。
『あんな罪のない人々が無雜作に牢に打ち込まれるなんて、實際あり得べき事なんですか。』と尋ねた。
『でも我々は何うしたらいゝんでせう。あんな手合は隨分嘘もつきますからね。それを一々眞に受けたら、皆無罪になつてしまうでせうよ。』と副典獄は答へた。
『でも今のあの一同は實際無罪ぢやないんですか。』
『えゝ、あれはね、あれはさうかも知れません。併し一體に人民が非常に墮落してゐますからね、嚴格にやらないと治まりが付かないんですよ。中には危險な奴がありましてね、そんなのには迂濶すると却つて此方が酷い目に逢ふんです。ですから昨日も二人に餘儀なく罰を當てておいたんです。』
『どうしたのです、罰といふと？』とネクリュウドフは尋ねた。
『命令によつて笞刑にしたんです。』
『體刑は廢止されてゐるではありませんか。』
『一切の權利を剝脫されてゐる者共には、その廢止は通用しないんですよ。』
ネクリュウドフは昨日監獄に來て玄關で待つてゐる間に見聞した一切の事を思ひ出した、そして副典獄の今云つた笞刑が丁度昨日自分が待つてゐた、あの時刻に行はれたのだなと思ひ合せた。彼は驚愕と悲痛と、殆ど實際の嘔吐に近い道義的な嫌惡との入り混つた惡感に襲はれた、その惡感は前にも彼は一度ならず嘗めたには嘗めたが、今度程深く强く肝に銘じた事は曾てなかつた。
彼は副典獄が何か云ふのに耳も貸さず、又後ろを見返りもしないで、早速と廊下を拔けて事務室の方へ來た。典獄は何か別の用で廊下に來てゐたが、ボゴドゥウコフスカイヤを呼び出す事を忘れてゐた。ネクリュウドフの顏を見て其約束を思ひ出した。
『すぐ呼びにやります。ほんの少しお待ち下さい。』と詫るやうに典獄は云つた。

五二

事務室は二つに區分してあつて、その一方のには出張つた大きい煖爐が一つと、汚い窓が

二つ、それから一隅には囚人の身長計を測る身長が立ててあり、他の隅には大きい基督の像が掛かつてゐた。此處には看守が數人立つてゐた。今一方の區分の中には二十人許りの男や女が、壁に沿うた腰掛に腰かけたり、又は其處に一團此處に一團といふ具合に立つたりして、皆低い聲で何やら話し合つてゐた。窓際には書き物をする卓が据ゑてあつた。

典獄は卓に着いて腰を下ろし、近くにあつた椅子をネクリュウドフに勸めた。ネクリュウドフも椅子に掛かつて男女の人々を眺めやつた。

先づ彼の目に着いたのは短い上衣を着た心地よさゝうな顏をした小柄の男で、その男は獄衣を着た一人の男囚と其隣に腰かけてゐる若い娘との前に立つて、何やら盛に手樣目樣をして熱心に其二人に話してゐた。

その彼方には青い眼鏡をかけた老人が、獄衣を着けた若い娘の手を取つて、其の娘の話すのを身動きもせずぢつと聞いて居り、小學校に行つてる位の男の兒が又心配さうな顏で其老人を一心に見詰めてゐた。その三人から遠くない室の一隅には深い相思の仲らしい男女が腰かけてゐた、女はブロンドな髪を短かく截つて新流行の服裝をしてゐる未だ極く若い娘で、可愛い勝氣らしい顏つきをして居り、男は獄衣を着けてこそ居るが髪の縮れた上品な美しい青年であつた。二人は其隅に腰かけて切りと睦じさうに囁き交はしてゐたが、それは云ふ迄もなく互ひの深い切ない心の中であるらしかつた。

卓の直ぐ先きには髪の白くなりかかつた黑い服の女が腰かけてゐて、その息子らしい護謨引きの上衣を着た肺病のありさうな若い男を一心に見つめながら、何か云はうとはするが涙が溢れて言葉が出ないらしかつた。再三再四云はうとしては口を緘んで。息子らしい若い其男は手に一枚の紙を持つてそれを何うすればいゝのか分らないらしかつたが、やがて少し折り疊んでから癪だと云ひさうな顏つきをして掌の中で揉み潰した。その二人に並んで腰けてゐるのは鼠色の服にショオルをかけた、目の少しぶうと柔かく出てゐる頰の赤い肥えた綺麗な娘で、泣いてゐる隣の母親の肩を軟かに撫でるやうにして思ひ遣り深げに慰めたりしてゐた。その娘はむつちりと太つた白い手も、短かく截つた髪も、品のある整つた鼻も、肉付のよくて引締つた豐かな口元も、一つとして批の打ち處のない、よくも揃つた美人であつた。併し其顏の一番優れた强い魅力は品もあり威もあつて加之も柔和らしい其黑い目であつた。ネクリュウドフが入つて來た時、彼女の其目は泣いてゐる母親の顏より離れて、ふいと彼の視線と行會つた。直ぐ又彼女は其目を外して何やら母親に云ふのであつた。

戀人同志の所から餘り遠くない腰掛には、櫛も當てない粗い髪を蓬々と亂してゐる色の黑い男が襤褸を着て腰かけ、去勢宗らしい髭の無い面會人を相手に、陰氣な顏つきで何やら切

りに早口で話してゐた。戸口の際には護謨引きの上衣を着た若い男が一人立つてゐて、襤褸の男が話してゐる事柄よりも、其粗末な風采で人々の注意を惹いてゐるらしい事を考へてゐる樣子であつた。

ネクリュウドフは典獄の横に腰かけて、珍らしさうに邊りを見廻はした。髪を短く刈り込んだ小さい男の子が彼の前にやつて來て、暫くの間彼の顏を見詰めてから、可愛い聲で尋ねた。『あなたは誰を待つてゐますか。』

ネクリュウドフは出し抜けに問はれて愕いたが、其子供の如何にも分別ありげな屹とした無邪氣な顏と、氣の利いた生々した目を見ると、彼も眞面目に素直に、知り合ひの婦人を待つてゐる由を答へた。

『それはあなたの御姉妹なの？』と子供は又尋ねた。

『いや、私の姉妹ぢやありません。』とネクリュウドフは驚き乍ら答へて、『それでは君は何うして此處に來てゐます？』と問ひ返した。

『僕は母さんと一緒に此處にゐるの。僕の母さんは國事犯なの。』と子供は答へた。

『マリア・パウロフナさん、ニコライ君を其方に呼んで下さい。』と典獄は云つた。ネクリュウドフと今の子供と話をするのを彼は法規に戻ると思つたのである。

マリア・パウロフナといふのは、今先きネクリュウドフの目についた優れた美人の事であつた。彼女はすらりと立上つて、殆ど男の歩くやうな足取でネクリュウドフと子供との傍へやつて來た。

『此子は何をお尋ね致しまして？ お名前でもお尋ねしたのでございませうねえ？』とマリア・パウロフナは其上品な美しい口元に微笑を浮べて尋ねながら、其溫雅な目で臆せず眞向きにネクリュウドフの顏を見た。その單純な自然な調子は、疑ひもなく彼女が此處に居る一同に對して爽然した親切な兄弟交際の感じを持つてゐる印であつた。『この兒は何でも知らなくては承知出來ない氣質でございますの。』さう云つて彼女は又溫雅な愛らしい微笑を浮べて子供を見た、それには子供もネクリュウドフも我知らず笑つて酬いねばならない位ゐな氣持いゝ微笑であつた。

『さうです、誰に私が面會に來たかと坊ちやんは尋ねました。』

『マリア・パウロフナさん、御承知の通り知らない人との會話は禁じてありますから。』と典獄は云つた。

『えゝ、さうですわ。』と云つて彼女はその白い手で子供のニコライを抱へて、肺病青年の母の傍へ戻つた。子供は其間絶えず彼女を見守つてゐた。

『誰の子供ですか。』とネクリュウドフは典獄に尋ねた。

『或る國事犯の女囚の子供です。此の監獄で生れたのですよ。』

『そんな事があるのですか。』

『えゝ、ありますとも。そして今度母と一緒に西比利亞へ行くのです。』

『そしてあの娘は？』

『それはお答へするわけに參りません。』と云つて典獄は兩肩を一寸搖つた。『さあ、ボゴドゥウコフスカイヤが參りましたよ。』

五三

奥の戸口から髪を短く截つた、顏色の黄色い、人の好ささうな大きい目を持つた痩せぎすの小柄なエエラ・エフレモフナはいそいそとはひつて來た。

『まあ、よくお訪ね下さいましたわねえ。』と云つて彼女はネクリュウドフに握手をした。『覺えてゐて下さいまして？さ、かけませう。』

『こんな處でお目にかゝらうなどとは思つて居ませんでした。』

『でもねえ、私は仕合せでございますのよ。滿足して居ますわ、もう此上には願ふ事もございませんの。』と云つてエエラ・エフレモフナは其持前の人の好ささうな大きい圓い目に、幾らか眩しさうな色を漂はしながらネクリュウドフを見た。見窄らしい上衣の皺になつた薄汚い襟の間から、黄色い細い首筋が見えた。

ネクリュウドフは彼女に何うして斯樣な處に來る事になつたかと尋ねると、彼女は非常に元氣よく景氣よく自分の夫れ迄の經歷を話した。その話は主義宣傳だとか、社會組織の改革だとか、さては團體、結社、其の本部、支部などといふものに關する外國語の術語學語で一ぱいで、ネクリュウドフが殆ど未だ嘗て聞いた事のないやうな言葉などをも、彼女は一般世間に知れ渡つてゐるものと十分信じてゐるらしく話すのであつた。そして自分の話してゐる事はネクリュウドフにも非常な感興を與へてゐると思ひ込んでゐる樣子であつた。

ネクリュウドフは彼女の細い首筋や又其薄い髪のほつれて亂れてゐるのなどを眺めやり乍ら、何故彼女がそんな事をしたのか又何故それを得々と話すのかを怪しんだ。彼は彼女を氣の毒に思つた、それはあの百姓息子のメンショオフが全く罪が無いのにあんな惡臭の高い檻房に入れられて、頻と云へば馬鈴薯の芽のやうな色になり手足も病人のやうになつて衰へ弱つてゐるのを氣の毒に思つたそれとは違つてゐた。彼女の頭腦を支配してゐる考の混亂してゐるのが彼には氣の毒であつたのである。彼女は自ら女丈夫を以て任じてゐるらしく、頻り

に彼の前に大言壯語を列べた、それを殊にネクリュウドフは氣の毒に思つた。その大言壯語の調子はネクリュウドフは啻に彼女に就いて認めた許りでなく、其室に居る他の多くの人々にも見た。はじめ彼が其室に入つて來た事は多くの者の注意を惹いたのである。そして彼は自分が來たので多くの者の話し振などが幾らか變つた事を感じた。護謨引きの上衣を着た若い男にも、獄衣を着けた女にも、又戀人同志の二人にさへも其同じ氣取つた調子はあつた。たゞ肺病の青年と、仔羊の目のやうな美しい娘と、それから去勢宗徒らしい髭の無い痩せた男を相手に話してゐる目の凹んだ髪の粗い色黑の男と、その三人にはネクリュウドフはそんな調子を認めなかつた。

エエラ・エフレモフナがネクリュウドフに話したいと思つてゐた事は、シュストワといふ彼女の同輩が、それは彼女と同じ團體ではなかつたのだけれど、預かつて保管してゐた印刷物や書類を押收されたので、シュストワ自身も拘留されたといふ事であつた。そしてエエラ・エフレモフナはシュストワがさう拘留されるに至つたのは幾分は自分の責任でもあるからと云つて、其筋にも緣故の多いネクリュウドフにどうかシュストワ放免の爲めに出來るだけの盡力をして貰ひ度いと賴むのであつた。

自身の事に關してはエエラ・エフレモフナは、産婆學校の課程を終つてから或る政治的團體に加入したといふ事、そして初めの中は萬事好都合に行つたが、其後或る地位の高い人物が一人拘引され、その家宅搜索の際關係書類を發見された結果、一味の者殘らず逮捕の身の上となつたといふ事を話した。

『私も捕まつたのですわ、そしてこれから西比利亞へやられますの。』と彼女は話を結んだ。

『でもこんな事何でもありませんわ、私は氣持が淸々してゐますの。』そして寂しい苦笑を浮べた。

ネクリュウドフは目の殊に優れた美しい娘の事を等ねた。エエラ・エフレモフナが云ふには、彼女は或る將軍の娘であるが、他人の罪を自分に引受けて裁判に服したので、亦同じく懲役に處せられてゐるのであつた。

『あの方は愛他主義でね、そりや本當に優れた人ですわ。』とエエラ・エフレモフナは云つた。

エエラ・エフレモフナが今一つ話したいと思つてゐたのは、マスロオワの事であつた。監獄內には囚人各自の事が直ぐ知れ渡るので、彼女もマスロオワも國事犯の檻房か、それが出來なければ病院の看護方になりとも廻して貰ふやうに願ふがよいとネクリュウドフに勸めた。

ネクリュウドフはシュストワ放免の事について、此土地では自分は何うも盡力が出來兼ねる

と思ふが、彼得斯堡に行つた上で十分運動をしてみると約束した。

五四

一同の會話は典獄の注意によつて途切れた。典獄は立上つて、面會時間は過ぎた、もう皆檻房へ分れて行かねばならないと言つた。ネクリュウドフは立つてエエラ・エフレモフナに別れを告げ、出口の方へと歩んで行つたが、少し其處に立止つて目前の光景を眺めた。

『さあ、皆さん、もう時間が過ぎました。』と典獄は云つた。けれども面會人も囚人達もまだ出て行かうとはしなかつた。

典獄の催告はたゞ一同を尙ほと互に盛に話させるに過ぎないで、誰一人出て行かうと思ふ者もなかつた。立つ者は二三あつたが、それも立ち乍ら尙ほ話し續けてゐるのであつた、他はまだ綫り腰かけながら話し合つた。別れの言葉を取交はすのもあり、泣出すのもあつた。殊に哀れつぽいのは肺病の青年と一緒の母親の樣子であつた。矢張り掌に紙を押し揉んで尙ほ握り潰してゐる青年の顏には、如何にも癪だといふやうな色が現はれ、母の氣持につい釣り込まれて貰ひ泣きなどしないようにと、少からず努めて情を制してゐるのであつた。別れの時刻が來たと聞いた母親は、青年を抱き寄せて泣いた。優れて美しい娘は、泣く母親の前に立つて、切りと勞はり慰めてゐた。ネクリュウドフは我にもあらず其娘の後姿を見てゐた。青い眼鏡をかけた老人は其傍に立つて、自分の娘の手を取りながら其云ふ事に一々頷いてゐた。相思の一組は手と手を深く組み合せながら立ち上り、默つて互にぢつと目と目を見交はした。

『あの二人だけですよ、嬉しい思をしてゐるのは。』ネクリュウドフの傍に立つて矢張同じく其二人を見やつてゐた短い上衣を着た若い男は話しかけた。戀人同志はネクリュウドフ等の視線をそれと知るや、互に組んでゐた腕を解いて少し退り、笑ひ乍らちらと後ろを見返つた。

『今夜あの二人は此の監獄で結婚をするんですよ、そして嫁さんも聟さんに從いて西比利亞へ行くんです。』と短い上衣の青年はネクリュウドフに云つた。

『あの青年はどんな人です。』

『懲役の宣告を受けてゐる男です。あの二人はまあああれで樂しいのですからいゝが、その他は實際皆氣の毒ですよ、可哀さうですよ。』と附け足した。丁度その時青い眼鏡をかけた老人の歔欷(すすりなき)く音が聞えたのである。

『さあ、皆さん、どうぞもう是で退散して下さい。私に嚴重な規則を擔ぎ出させないで退散

して下さい。』と典獄は云つた、そして又同じ言葉を繰返した。『さあ、どうぞもう退散して下さい、どうぞ、願ひますよ。』と弱りきつたやうながつかりしたやうな覺束なげな調子で又促した。『どうしました？』もう時間は疾うに過ぎてるのですよ。いけません、もういけません。もう私云ひませんよ、これで云ひませんよ、さあ、どうぞ。』泣き出しさうに繰返した。そして立つたり、腰かけたり、卷莨に火をつけたり、直ぐ又蹂り消したりして典獄は焦つた。

やつとの事で囚人も面會人もそろそろ退散しかけた、囚人達は奥の戸口から、面會人は表の口から。護謨引きの上着を着た二人、肺病の青年、髪の粗い色黑の男、それからエエラ・エフレモフナ、監獄で生れた子供の手を引いたマリア・パウロフナ、といふやうな順に引續いて奥へ行つた。

面會人も外へ出た。青い眼鏡をかけた老人が足元も覺束なげに出て行く後から、ネクリュウドフも續いて歩んだ。

『實に感心な一體の措置ですね。』と話好きの若い男はネクリュウドフに並んで階段を下りながら、途切らした話の糸口を再び拾ひでもするやうな具合に云ひかけた。『典獄が好い人ですから仕合せですよ、規則を楯に酷薄な取扱ひなどする事がありませんからね。又そんな事は實は良心に咎められて苦しくて出來ないにはは出來ないですね、何しろ皆がどれだけ云つても云ひ盡せないのですからね、その心の中をさらけ出してゐるのですからねえ。』

メディンツェフと自分から名乘つた其男と共にネクリュウドフが玄關に來ると、典獄は草臥れたらしい顏付をして傍に寄り、

『で、あの、何ですよ、あなたがマスロオワに御面會なさりたけりやあ、どうか明日お出下さい。』と云つた。それは云ふ迄もなくネクリュウドフの機嫌を迎へるのであつた。

『どうも有難う。明日參ります。』と云つてネクリュウドフは早速と外へ出た。前に監獄に入つて來る時にも又金網張りの面會室に入つた時にも感じたやうに、同情以外に驚愕嫌惡の感と道義上の嘔吐感とを今又彼は覺えるのであつた。「これは何故だらう？」と彼は自ら尋ねた、併し其答はなかつた。

五五

翌日ネクリュウドフは雇ひ馬車を辯護士の宅へ驅り、メンシェオフの事件を告げ、その辯護を引受けて呉れるように賴んだ。辯護士は注意して聞いた上で、實際事件がネクリュウドフの話す通りならば報酬を受けなくとも其辯護を引受ける事が出來るだらうと云つた。それからネクリュウドフは他の多くの何事よりも、間違ひの爲めに獄に入れられてゐる百三十人の

左官と石工の話をして、それは誰の責任であり誰の決定すべき事であるかを尋ねた。辯護士は答へなかつた、答へるならば何とか立派な決定的な言葉を出さうと思つたのだが、生憎そんな言葉が見付からないらしかつた。

『誰の責任なんです？』

『誰の責任かと仰しやるんですか。誰の責任でもないんです。』と辯護士は答へた。『それを檢事に話して御覽なさい、すると檢事は夫れはマスレンニコフの責任だと云ふでせう、又マスレンニコフに云つて御覽なさい、マスレンニコフはそれは檢事の責任だと云ふにきまつてゐます。つまり誰の責任でもないんです。』

『私はこれから直ぐマスレンニコフを訪ねてそれを云ひませう。』

『なあに、それは何にもなりませんよ。』と辯護士は微笑しながら、『あの男はそりや——まさかあの男があなたの御親戚と云ふわけではないでせうね、又御親友といふ譯でもありますまいね、——あの男はそりや、斯う云ふと大變惡口のやうですが、全くのところ頓馬ですよ、その上尙ほ又狡いやくざ者ですよ。』

ネクリュウドフはマスレンニコフが此辯護士に就いて云つた事を思ひ出した、そして何とも受答へをしなかつた。暇を告げて彼は直ぐマスレンニコフの宅へと馬車を走らせた。

ネクリュウドフはマスレンニコフに、マスロオワを病院に移して貰ふ事と、旅券期限經過の不仕合せな百三十人の爲めに計つてやる事との此の二つを賴まうと思つた。マスレンニコフ如き男に相談をせねばならない、加之賴まねばならないといふ事は、彼には尠からぬ不愉快ではあつた、しかし目的を達しようとする爲めには夫れが唯一の方法である以上仕方はなかつた、そして是非ともマスレンニコフに賴み通りにして貰はねばならないのであつた。

彼はマスレンニコフの家の前に通りかゝると、其入口の邊りに儀式用馬車、輕裝の普通馬車、幌馬車、閉め切つた彈條入馬車等が幾臺もあるのを見かけて、今日が恰かもマスレンニコフの妻の接客日であつた事を思出した、そして夫れには彼は招待されてゐたのであつた。

それから愈々その家に近く來ると、入口の前に一臺の馬車が廻つて、接待服を着た玄關番が、其時恰かも奥から出て來た或る貴婦人の其馬車に乘らうとするのを手傳つてゐる所であつた。貴婦人が裾を褰げて馬車の踏段に乘らうとする時、その小さな靴と華奢な踝とがちらと見えた。儀式馬車の中にはコルチャアギン家の幌馬車もあつた。胡麻鹽頭の頰の赤い御者は、特に馴染の大切な客人に對するといふやうな具合に丁寧に帽子を取つてネクリュウドフに禮をした。

ネクリュウドフが案内を乞はうとしてゐると、主人のマスレンニコフ自身が、敷物を敷い

た階段の上に出て來た。それは階段の上部まででなく、ずつと下まで來て見送るべき第一流の客の一人を送り出して來たのであつた。送られて來た高地位の軍人は、其町で開かれる筈になつてゐる育兒院の爲めのバザアの事を佛蘭西語で喋りながら階段を下りた。バザアは實に貴婦人達に取つては至極好い仕事であるといふのであつた。

『娯しみながら金が儲かるのですからな。娯しんでやるが好えでさあ、さうすると神の祝福がありますわい。――やあ、ネクリュウドフ公爵、お珍らしう。大分御目にかゝりませなんだなあ。』と軍人はネクリュウドフを見付けて親しげに、『さあ、奥へ行つて副知事夫人に御挨拶をなさるが好え。コルチャアギンの嬢さんも來て居なさる、ナディイネ・ブクスヘヴデンの嬢さんも見えてゞさる、Toutes les jolies femmes de la ville!(町中の別嬪さん殘らずお揃ひぢや)。』さう云つて彼は矢張金ぴかの制服を着た從者の掛けて呉れる外套を、肩で受けて着ながら、Au revoir, mon cher!(さよなら)。』そして尙ほ一度マスレンニコフに握手した。

『さ、上らないか。實に嬉しいよ。』マスレンニコフは景氣よく云つてネクリュウドフの腕を捕へ、肥太つたからだにも似合はず早速と連れて行つた。マスレンニコフは如何にも嬉しさうな樣子であつた。ネクリュウドフは漫ろにそれを彼が今の軍人のやうな名望家と交際してゐる事を得々として悅んでゐる爲だと思はざるを得なかつた。顯官などといふものに最負を受け好意を持たれるといふ事はマスレンニコフに取つては實に大きな幸福であつて、さながら小狗が飼主に可愛がられ撫で擦られ甘やかされ揶揄はれ撲られる時のやうな感じを覺えるのであつた。小狗は尾を振つたり戯れ付いたり自分から態と轉がつたり、起直つて耳をつんと立てたり、無性矢鱈にきりきり廻つたりするのである。マスレンニコフも亦殆どそれであつた。ネクリュウドフの屹とした顏付などには氣も付かず、其云ふ事などには耳も貸さず、たゞ遮二無二彼を廣間へ引張つて行つた、ネクリュウドフもそれに逆らふ譯には行かなかつた。

『用事は後さ。何だつて聞いてやるよ。』と云ひ乍ら彼はネクリュウドフと共に客室をずんずん行つた。――『奥方に傳へて呉れ給へ、ネクリュウドフ公爵がお來でになつたと。』と行きずりに彼は一人の給仕に云ひ付けた。給仕は走つて行つた。『何でも君の云ひなり次第だ。併し先づ妻の所に是非顏を出して呉れなくちやいけない。此の前は會はせてやれないで、本當におれは殘念だつたぜ。』

二人が廣間に入つた時は、給仕は早や云ひ付かつた通りに知らしてゐたので、奥方――即ち彼女自ら給仕達に自分の事をさう呼ばせてゐる所の奥方たるアンナ・イグナティエフナは、自分の長椅子の邊りに腰かけてゐる人々の頭越しに、溢るゝ許りの愛嬌を浮べて先づ目でネ

クリュウドフに挨拶した。廣間のずつと奥の方には茶の出た卓の邊りに様々な貴婦人連が腰かけてゐたり、文武官それぞれの制服を着た紳士達が立つてゐたりした。男女の聲が絶えず入り亂れて賑はつた。

『Enfin!(まあ、やつとの事で!)すつかりお忘れにでもなりましたの? 何か失禮な事でも申上げましたのぢやなくつて?』と云つてアンナ・イグナティエフナは新來の客人たるネクリュウドフに挨拶したが、そんな言葉の匂はせるやうな親密さが素より彼女とネクリュウドフとの間にあつたのではなかつた。

『あなた方もう疾うにお知合ひ? このお方はベリヤフスカイヤの奥様、こちらはミハエル・イワノオヰッチュ・チェルノフ様ですわ。さ、どうぞ、もつとお近くお寄り下さいまし。ミッシイ様、Venez donc à notre table! On vous apportera votre thé!(此方の卓へ來つしやいな。お茶は此方へ持つて來させますわ)。』それからミッシイと話してゐた士官にも『あなたもどうぞ此方へお掛け下さいまし。』と云つてから、『公爵様、お茶召上りますか。』

『決して決してそんな事はないわ。私は絶對に否定してよ。だつて、あの方好いてなんかいらつしやらなかつたんですもの。』といふ聲がした。

『でも菓子が大好きなんでしたがね。』

『またあんな人の惡いお洒落ばつかし。』と云つて笑つたのは、前の言葉の主二人の間に腰かけてゐる婦人で、丈け高い帽子に金だの寶石だの絹紐の飾りだのをぴかぴかさしてゐた。

『C'est excellent!(これは上等ですな)、このワッフルは。そして輕いんですね。も一つどうぞ此方へ寄越して下さい。』

『あなた方はもう直ぐお發ちになりますこと?』

『えゝ、えゝ、今日きりですの、ですから今日は二人とも參上りましたの。』

『今年は好い春ですね。これぢやあ田舍の景色は又一倍だなあ。』

帽子をかぶつて黑つぽい縞の服をすらりとした上品なからだつきにしつくり肌に合はせて着てゐるミッシイの姿は、生れ乍らにして其服を着てゐたかのやうに恰好よく美しかつた。ネクリュウドフを見ると彼女は顏を赤めた。

『まあ、あなた御旅行でも遊ばしたのかと思つてましたわ。』とミッシイは云つた。

『旅行も早くしなけりやならないんですが。用事で發てずにゐるんです。此家に今日參上つたのも用事の爲めなんです。』

『でもどうか母を訪ねてやつて下さいな、大へんお目にかかり度がつて居りますわ。』とは云つたが、ミッシイ自ら母を口實に使つた事を思つて顏を又一層赤くした。

『どうもお訪ねなどする時日もなささうです。』とネクリュウドフは陰氣な顏をして答へながら、ミッシイの顏を赤くしたのには氣付かない振りをした。

ミッシイは忌々しさうに額に皺を寄せて肩を幽かに搖つたが、氣を取直すやうにハイカラな士官の方に向き返つた。士官は如何にも彼女の意を迎へるらしく彼女の飲み干した茶碗を早速自分が取つてやつて、劍を椅子の脚などにがちやがちやひつ掛からせながら他の卓の上に載せた。

『あなたも育兒院の爲めに何か少し奮發して下さらなくちやいけませんわ。』といふ聲もあつた。

『えゝ、それは私いやとは云ひませんよ。併し私は籤引までは何も出さない事にして、其日一時に大に奮發して御覽に入れます。』

『よし、ぢやあ屹度よ、そのお言葉確かにお預りしておくわ。』と著しい作り笑ひの聲も聞えた。

そんな鹽梅に接客日は賑はつた。アンナ・イグナティエフナは滿足といふものに醉つた。

『あなたは監獄制度の爲めに大へん御盡力なすつて居らつしやいますつてね、ミイカ(自分の良人)がさう申して居りましたわ。』と彼女はネクリュウドフに言葉を向けて、『そりや私も

あなたの事ですから屹度さうだらうと思ひましたわ。ミイカも他の方面には缺點もいろいろ有るやうですけれど、御承知の通り心は親切な方でございますからねえ。不仕合せな囚人達は皆彼の子供も同然でございますわ、彼もさう云つて居りますの。Il est d'une bonte……(あれの親切は、そりや……)』そして云ひ詰つた、良人の親切を云ひ現はせる適當な言葉を見出さなかつたのである。そして直ぐ又彼女は笑ひながら、丁度その時入つて來た老婦人の方へ向き返つた、老婦人は皺の多い顏をして紐飾のある薄紫の服を着てめかしこんでゐた。

ネクリュウドフは失禮にならない爲めに必要なだけの同じ空虛な言葉を交へてから、立上つてマスレンニコフの傍に行き、

『さ、もういゝだらう、ね、どうか一つおれの用件を聞いて呉れ。』

『あ、さうだつた。よからう、聞くよ。で、どんな用だ。』

『彼方へ來給へ。』

二人は小さい日本風の室に入つて、其處の窓際に腰かけた。

五六

『よし來た、Je suis à vous (何でも仰しやい)。茶を飲むか。おつと待つたり、灰だらけに

なつちやいかん。』と云つてマスレンニコフは灰皿を持つて來た。『それで、どんな用だ？』

『二つある。』

『と云ふと？』

マスレンニコフの顏は曇つた。飼主に撫で擦られ揶揄はれた小狗の悅びは痕跡もなく直ぐ消えた。廣間の方からは樣々な聲が聞えて來た、『Jamais, jamais je ne croirai！（いえ、いえ、私はそんな事決してないと思ふわ）』といふ女の聲、それから少し離れた所からはオロンツォフ伯爵夫人とキクトオル・アプラクシイネといふ名を頻りに使つて話してゐる男の聲、又少し違つた方角からは何だか薩張り聞取れないたゞがやがや云つてゐる話し聲や笑ひ聲が洩れて來た。マスレンニコフは廣間の方へも耳を傾け、ネクリュウドフの言葉をも聞いた。

『あの女囚の事で又來たのだ。』

『うむ、あの無實の罪で判決されたといふ女だね、よし、知つてる、知つてる。』

『おれはあの女を病院部の使役に移して呉れるやうに君に賴み度いのだ。それは出來るとおれは聞いてゐる。』

マスレンニコフは脣を堅く結んで考へた。

『そりや六ケ敷さうだね。併し聞質して調べてはみよう、そして明日電報で君に返事をしよう。』

『病院には今は患者が澤山で、手が足りないといふぢやないか。』

『うん、よし、よし。兎に角調べた上で知らせてやるよ。』

『どうぞ確り賴んでおく。』

廣間の方では何やら一同がどつと笑つた。

『又あのキクトオル君だな。』とマスレンニコフは自分もそれに調子を合はせるやうに笑ひながら、『あの男は機嫌がいゝと仲々巧い警句を吐くからね。』

『それからまだ一つある。』とネクリュウドフは、『あの監獄にはたゞ旅券の期限がきれただけの事で押込められてゐる者が百三十人居るんだね。そしてもう一ケ月以上になると云ふではないか。』

さう云つて彼は其事を知つただけ話した。

『どうして君はそんな事を知つたんだ。』とマスレンニコフは尋ねて、直ぐ不安と不快の色を顏に浮べた。

『おれは或る囚人に面會に行つたんだ、すると廊下で其不幸な一團に包圍されたんだ、そして嘆されたんだ……。』

『どんな囚人に面會に行つたね？』

『無實の罪で押込められてゐる或る百姓息子を訪ねたのだ。そしておれは其男の爲めに辯護士を頼んでおいた。しかし其事は爰には無關係だ。たゞ旅券の期限が切れただけの事で、外には全く何の罪も無いあの一群を、一體どうして監獄なんぞに打ち込んでおけるんだね？加之……』

『そりや檢事の責任だよ。』とマスレンニコフは不平らしく云ひ遮つた。『どうだい、君等の所謂早く裁ける公平な裁判制度の弊害はさ。副檢事たる者は監獄にも行つて、萬事が規則通りに行はれてゐるか何うかを臨檢すべき職責があるんだ。然るにそんな事はそち除けにしてカルタ遊びなんかに夢中になつてゐるんだからね。』

『それでは君では此事は何うにも仕樣がないと云ふんだね。』とネクリュウドフは情け無かつた。知事は其責任を檢事に背負はせるにきまつてゐると云つたファナアリンの言葉が思ひ出された。

『いや、そりや盡力はするさ、屹度取調べてみるよ。』

『あの方には愈々お氣の毒だわねえ。C'est un souffre-douleur.（一人で惡い事を引受けてさ）。』

といふ女の聲が廣間の方から聞えた、其調子はちつとも氣の毒さうではなく、むしろ平靜であり冷淡であつた。

『愈々結構、私だつて引受けますよ。』と少し遠つた方から男の聲が聞え、それから其男に何か物をやるまいとするらしい女の氣取つた笑聲がした。

『いえ、いえ、上げるもんですか。』と其女の聲は云つた。

『よろしい、どの事件も承知した、出來るだけの事は手を盡すよ。』とマスレンニコフは繰返して、土耳古玉の入つてゐる指環をさした白い手で卷莨の火を消した。『さ、ぢやあ又婦人連の所へ行かうよ。』

『今一つ少し尋ね度い事がある。』とネクリュウドフは戸口に立止つて、『昨日囚人に體刑を加へたといふ事を聞いたが、本當かね？』

マスレンニコフは顏を赤めた。

『いや、それを云はれちや閉口だ。どうも君に面會認可證なんぞやつたのは惡かつた、何もかも喙き廻はされては堪らないや。さ、彼方へ行かう、さ、行かう、妻が呼んでるよ。』と云つて彼はネクリュウドフの腕を取つて、顯官の好意を受けた時のやうな元氣よさを再び見せたが、今度は嬉しいといふよりも寧ろ不安さうな調子を浮べた。

ネクリュウドフは取られた腕を振り放し、誰にも挨拶もせず言葉もかけず、廣間を抜け、

飛んで來た玄關番にも一顧も與れず玄關を過ぎつて通りに出た。

『どうなすつて、公爵は？　あなた何をなさいましたの？』とアンナは良人に尋ねた。

『あれは à la française（佛蘭西流）ですよ。』と誰やら他から云ふ者もあつた。

『何が à la française なの。あれちやあ à la Zoulou（ズウルウ流）だわ。』（ズウルウは南亞弗利加の一蠻族の名）

といふのもあつた。

『あの男はいつもあれなんですがらね。』

尙ほ新たに來る者もあり、歸る者もあつた。そして引續き無駄咄の花が咲いた。ネクリュウドフの打切棒なやり方は其夜の其處での好話題になつた。

翌日ネクリュウドフはマスレンニコフより、紋章入りの厚い光澤紙に堅苦しく綺麗に書いた手紙を受取つた。マスロオワを病院に移す事は醫者に其旨書いてやつて置いたが、十中八九は出來さうに思はれるといふ意味が書いてあつた。本文の末には、『親密なる古き交友より。』とあつて、其下に技巧を凝らした大きな花文字の書き判をしてあつた。

「馬鹿、」とネクリュウドフは心に彼を罵倒せずにはゐられなかつた。殊にマスレンニコフが自分の事を交友と云つてゐるのは、それで謙遜して積りらしく、加之その謙遜は、實は自分は社會の重要な地位にあつて大きな職責を荷つてゐる身ではあるが、それにも拘らず彼ネクリュウドフに對して親密を感じてゐる、尠くとも自分の偉大を鼻にかけてゐない事だけなりとも見て貰ひ度いと思つてゐるのだ、といふ謙遜らしく、それで交友と書いてるやうに思はれるので、愈々ネクリュウドフは堪らなかつた。

五七

人には皆めいめい夫れ夫れの定つた性質があつて、或者は善、或者は惡、又は賢愚冷熱などといふ具合に別々に出來てゐるものだといふ考は、非常に廣く一般に通用してゐる。併しそれは誤つた考であつて、人間はそんな者ではないのである。我々が一個の人に就いて正しく云ひ得る事は、たゞ其人には惡よりも善が多いとか、愚よりも賢が多いとか、冷よりも熱が多いとか、又はそれを逆にして善よりも惡が多いとか、其他同樣の云ひ方に過ぎないのであつて、若し我々が甲は徹頭徹尾善若しくは賢であり乙は又徹頭徹尾惡若しくは愚であるなどといふならば、それは誤つてゐるのである。けれども我々は實際に於てさういふ誤つた考によつて人に區別をつけてゐるのである。それはよくない事である。人は川のやうなものである。水は何時でも何處でも同じ水であるが、川には狹いのもあれば廣いのもあり、急流もあれば緩流もあり、溫いのも冷いのも、清流も濁流もある。人も亦其通りで、人たる以上誰

も皆人間的性質の一切の幼芽を自身に包藏してゐるのであるが、たゞ或者に於ては夫等性質中の一が、より強く現はれ、他の或者に於ては又他の或性質が顯著に出てゐるといふに過ぎない。同一人間に於ても時を異にすれば別人のやうな對照を生ずる事がある、しかしそれでも前後を通じて同一人である事は云ふ迄もない。人によつてはさういふ諸變化の兆が常に甚しいものもあるが、ネクリュウドフは即ち其種の人物の一人である。ネクリュウドフのさういふ變化は勿論肉體上の原因にも基づき精神上の理由にも發してゐるのであつて、それによつて今彼は自己革命の進行中にあるのである。

裁判に臨んでから、カテュウシヤと第一回の再會を遂げて生活の一新を思ひ立つた喜悅と勝利の感は、今ははや全く過ぎ去つてしまつてゐた。入り代りに來たものは第二回目の再會以後得た凄愴の感である、殆ど彼女に對する嫌惡の感である、そして義務の絶對遂行を促す自責の感である。彼はもはや如何なる事があらうとも彼女を放棄しないと決心した、彼女さへ承諾するならば彼女と結婚するといふ意志を決して翻さないと自ら誓つた。さういふ誓ひは併し彼に取つても決して易々たることではなかつた。

マスレンニコフを訪うた翌日、彼は再び彼女に會ふべく馬車を監獄へ走らした。今度は併し典獄は二人を事務室でも辯護士室でも會はせなかつた、たゞ女囚部の面會室で許した。典獄はネクリュウドフに對して萬事につけ親切を見せてはゐるのであるが、併し今度は今迄よりは其見せ方を餘程差控へてゐるのであつた。如何にも前日マスレンニコフとの會談の結果が斯うなつたのらしく、それで彼に對し特別に注意するやうとの命令が出てゐるのらしかつた。

『御面會なさるのはいゝのです。』と典獄は云つた。『けれども金錢の事はですね、どうか前に私が御注意申上げた通りにして下さい……。彼女を病院に移す事に就きましては、知事閣下よりの書面も來て居りまして、出來る事になつて居ります、醫者も承諾して居るのでございます、ただ併し本人が厭だと申しますのでね。癇つ癪きどもの面倒を見ろなんて、いやな事たと云ひますんですよ。どうもねえ、あんな手合は困つたものですよ。』と彼は云ひ添へた。

ネクリュウドフはそれには何とも答へず、たゞ早く面會さして貰ひ度いと云つた。典獄は一人の看守を女囚部に呼び出しにやり、自分はネクリュウドフを女囚部の空虛な面會室へ案内して行つた。

マスロオワははや來てゐた。おづおづと靜かにネクリュウドフの方へ金網越しに進み來てちらと觸れた視線を直ぐ外らしながら低い聲で云つた。

『ドゥミトリ・イ・イワノオヰッチュ樣、私が一昨日亂暴な事を申上げたのは何卒お許し下さいま

し。』

『私はあなたに許すなど丶云へる事はないんです。』とネクリュウドフも口を切つた。

『でもどうか私にお邪魔をしないで、そつとしておいて下さいまし。』と彼女は自分の云ひ分を前より續けながら、斜視の目を上げて彼に向けた。彼は再び其顏に緊張した強い敵意を讀んだ。

『どうして私はあなたを放棄つておかねばならないんです。』

『何にもならないぢやありませんか。』

『どうして何にもならないだらう？』

彼女は又もや強い敵意を持つた目で彼を見た。

『ね、私は構はないで置いて下さい。これは私眞劍に申上げるんてございます。あなたと一緒になるなんて、そんな事私には出來ませんわ。すつかり思ひ切つて下さいまし。』と脣を慄はして云つてから、少し默つた後、『さう私は思つて居ります、一緒になんぞなるよりは、私死んだ方が餘つぽど優しなのでございます。』

ネクリュウドフはさうした拒絶に、自分に對する嫌忌と憎惡と、なほ彼女に加へた許す可からざる汚辱に對する憤怒との含まれてゐる事を感じた、併し其外にまだ何だか別なものが含まれてゐさうに思はれた、――それは何だか分らないが兎に角良いものであり高潔なものであつた。前回の拒絶を更に冷靜な態度に於て繰返され、それに由つて彼女の心を確める事が出來るやうになつてみると、ネクリュウドフのあらゆる疑ひは一時に消え、彼は再び前のやうな嚴肅な感激的な心の態度に復るのであつた。

『カテュウシヤ、私は前に云つた事を今も亦其通り云ふ。』と彼は深い眞劍の調子で云つた。

『私と正當の結婚をしておくれ、私はお前に願ふ。お前がそれをいやならば、いやでなくなるまで私はお前の居る處に居る、お前の行く處へ行く、どんな處であらうとも行く。』

『それはあなたの御隨意ですわ。私はもう其事は何とも申しません。』と云つた彼女の脣は又慄へた。

ネクリュウドフも默つた。何とも云ふ事が出來なかつたのである。

『私はこれから田舍へ行く、それから彼得斯堡へ行く。』稍あつてネクリュウドフは心を靜めてさう云つた。『あなたの事、と云ふよりもつまり我々の事の爲めに骨を折る積りです、あの判決が變更されるやうに、神が救つて下さる事と思ふ。』

『よしんば變更されないだつて――それでも同じ事ですわ。その罪が私になくたつて、私は外にも罰を受けるだけの事をして居ります。』さう云つて彼女は湧き來る涙を零すまいと努

めた。彼はそれを見た。

『あの、あの、メンショオフにはお會ひ下すつて？』と彼女は切ない感傷を見せまいと急にさう尋ねた。『母子とも矢つ張り本當に無罪なのでございますか。』

『私は無罪に相違ないと思ふ。』

『そりや本當にいゝお婆さんですもの。』

彼はメンショオフに會つて聞いた事を殘らず話した、そして又彼女に何か入用な物でもありはしないかと尋ねた。彼女は何も要らないと答へた。

それから又沈默が挾まつた。

『それから、あの、病院の事はね。』と俄かに彼女は顏を上げて云つた。『私が移るのをあなたがお望みなら私移ります、そして今後はお酒も戴きませんわ……。』

ネクリュウドフは默つて彼女の目をぢつと見た。

『嬉しい、私は非常に嬉しい。』と彼はたゞそれだけ辛うじて云ふ事が出來た。

「さうだ、さうだ、もうこれで此女もすつかり別人になつたのだ。」とネクリュウドフは思つた、そして彼女に對する今迄の疑惑が一切消え去つてしまつてみると、彼は今まで全く知らなかつた愛の絶對に對する至深の信頼を覺えずにはゐられなかつた。

＊　＊　＊　＊

マスロオワは面會を濟ますと惡臭の漲つてゐる自分の檻房に歸り、獄衣を脱いで自分の寢床に腰かけ、兩手を膝の上にのせて默つてゐた。檻房内に居るのは肺病の女と乳飲兒を抱いたウラディミルスカとメンショオワの老婆と子供二人を連れた踏切番の女と、それだけであつた。役僧の娘は昨日精神病と診斷されて病院へ送られたのであつた。その外の女は皆洗濯物をしに出て行つてゐた。老婆は寢床に就いて睡つてゐた。子供等は廊下に出て居り、戸口はあけてあつた。ウラディミルスカは乳飲兒を抱いたまゝ、又踏切番は小まめな指さきで休みなしに靴下を編みながら、マスロオワの方へやつて來た。

『何うしたえ、よう話しなすつたかえ？』

カテュウシャは何とも答へずに腰かけたまゝ、兩足を垂れて揃へてゐた。

『何でお前さん其樣に鬱えでゐるんだね？』と踏切番は尋ねた。『何よりも氣が生々してゐなくちゃいけませんよ。ね、カテュウシャ、どうでしたえ？』そして絶えず針をちくちく動かした。

マスロオワは答へなかつた。

『檻房の者は皆洗濯物をしに行んでますだよ。今日はえれえ施し物があるちふ事だあよ。どつさり持ち込んで呉れたちふ話さ。』とウラディミルスカは知らした。

『フィナアシュカ、』と踏切番は戸の外へ怒鳴りやつた。『何處さ又去せやがるだ、この腕白小僧奴。』

そして編針の糸を外し、糸毬と靴下をそれで一緒に留めて、子供を追うて廊下へ走つて行つた。

その時廊下にどやどやと足音やら女の聲やら聞えたかと思ふと、やがて同檻房の餘の女どもが入つて來た。皆白パンを一つづゝ持つてゐた、中には二つ持つてゐるのもあつた。フェドッシヤは直ぐマスロオワの傍へ行つた。

『それで、どうなつて？　話が巧く行かない？』と尋ねながらフェドッシヤは其の澄んだ碧い目で親切さうにマスロオワの顏をのぞき込んだ。『私達のお茶受に少し貰つて來てよ。』そして壁に着いてる棧に白パンを載せた。

『どうしたえ？　旦那が又考え直しでもしたんかえ、結婚しねえつてのかえ？』とコラプレエワは尋ねた。

『さうではないわ、あの人は考へ直したんぢやないわ。だけど私がいやなの。』とマスロオワは辛と云つた。『あの人に私さう云つといたわ。』

『何だとえ？　其様な馬鹿げたことがあるものかえ？』とコラプレエワは持前の低音で叫んだ。

『そりやさうだわ、一緒に暮せなきや婚禮したつて仕様がないものねえ。』とフェドッシヤは云つた。

『だげんどお前さんの御亭主はお前さんと御一緒かえ？』と踏切番は反問した。

『私と亭主とは正式に婚禮してしまつたんだもの、無理に引離されて辛くない事があるもんですか。』とフェドッシヤは云つた。『だけどカテュウシヤさんは、其人が一緒になれないと思ふんなら、何しに結婚をしませう。』

『馬鹿だあね、お前さん、何しに結婚をするかなんて。その旦那が結婚して呉れりやあ、此女も金持になるぢやねえかな。』

『あの人が私に云ふには、何處へお前がやられたつて、私はお前に從いて行くつて、さう云ふの。』とマスロオワは云つた。『だけど、從いて來るなら來るがいゝわ、來なければ來ないがいゝわ。私は決して望みはしないのよ。あの人はこれから私の願ひの書附を出して彼得斯堡へ行くんだつて、大臣さん達は皆あの人と緣由があるんだつて。』そして尙ほ續けて、『で